

文化ボランティア 支援拠点形成事業 成果報告書



平成20年度
委託事業

目次

特定非営利活動法人 コミュニティアート・ふなばし	千葉県	3
特定非営利活動法人 トリトン・アーツ・ネットワーク	東京都	1 5
やまなし若者地域活性化プロジェクト推進委員会	山梨県	2 2
しが次世代文化芸術推進委員会	滋賀県	3 3
栗東芸術文化会館さきら	滋賀県	5 4
琵琶湖博物館はしかけ「びわたん」	滋賀県	6 3
特定非営利活動法人 シンフォニー	兵庫県	7 2
特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT	大分県	8 2
特定非営利活動法人 ネイチャリング・プロジェクト	鹿児島県	9 5
特定非営利活動法人 沖縄県立現代美術館支援会 h a p p	沖縄県	1 0 7

団 体 名：特定非営利活動法人コミュニティアート・ふなばし
代 表 者：下山 浩一
所 在 地：千葉県船橋市本町4-40-23
本町フリーマーケット内
問合せ先：PXZ06005@nifty.ne.jp



1① 団体紹介

平成9年から千葉県船橋市を主なフィールドに活動するアートNPOです。

美術・演劇・ダンス・映像 etc. コミュニティにおけるさまざまな課題を創造的に解決するアート「コミュニティアート」の企画・運営を行うとともに、地元商店街との協働によるアートプロジェクト・市民対象のワークショップ・セミナーを多く展開すると同時しています。地元商店街との協働によるアートプロジェクトから、千葉大ボランティア実習受け入れ若手ボランティアスタッフのケアに力を入れています。

1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団 体 職 員 数：専任職員 0名、兼任職員 10名
- ・ 養成講座担当職員数：専任職員 0名、兼任職員 10名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

コミュニティアート・プロジェクトの企画・運営を行うにあたり、コミュニティにおける創造的なアート活動の意味と、ネットワークのつなぎ手の役割を理解し、受入側の地域コミュニティ内の事情や住民のまちづくりとアートに関するニーズを受け止めて、地域で創造的な活動を志す人がさまざまな能力を発揮するための支援的役割を担うことができる人材を育成しています。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

本事業は、地域で活動するアートNPOイニシアティブによる、文化ボランティア・コーディネーター育成プロジェクトです。

コミュニティアート・ふなばしは、平成17年度、19年度において文化庁委嘱文化ボランティア推進モデル事業を実施し、団体内に地域における文化の担い手とアートの現場をつなぐノウハウを蓄積することができましたが、今後は文化ボランティアが自律的・継続的に活動を行い、スキルアップするためには、ノウハウの共有が不可欠であるという認識に至りました。

各地で行われている文化ボランティアの育成は、高度なノウハウの伝達が試みられていますが、スキル化・テキスト化が不十分な部分が多く、優れた取り組みが「やりっぱなし」となり、後継者育成の障害となっているという問題があります。

船橋市中心市街地では、商店街を中心にした地域づくり活動が活性化しつつあります。しかし、船橋市は、「NPO立県」を標榜する千葉県下で2番目にNPO数が多いにも関わらず、芸術文化面に関しては、情報発信の力が弱いという欠点を持ちます。本プログラムの実施により、継続的にコミュニティアートに関わるリーダー層を育成し、地域の文化力を高める必要があります。

3① 養成されたコーディネーターの実際

本事業の受講者に見られた効果として、「現場力の増大」「コミュニケーション能力の発達」「コミュニティアート全般に関する理解」がありました。実際に養成されたコーディネーターは、スキルもさることながら、問題発見能力、自律的な立案能力が高い人材として、地域のステークホルダーにも高く評価をいただきました。

3② 実施した養成プログラムの問題点

本来養成プログラムに先立って開催されるべきプログラム開発検討会が、すべて養成講座途中となってしまったため、プログラム開発検討会の内容をすべて事業に反映することができず、もったいない状態となりました。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

- ・ 船橋市本町通り商店街および駅前中心市街地における地域づくりイベント「きらきら夢ひろば」「夢市ふなばし」において、コミュニティアート・プログラムの企画・立案、実施のコーディネーターとして活動する。
- ・ 「コミュニティアート映像祭」の企画・立案、実施のコーディネーターとして活動する。
- ・ 全国のアートNPOと交流し、コーディネーターとしてのスキルをさらに向上させる。
- ・ 今後、本事業のような養成事業を行う際に、企画立案、実施に関わる。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

単なるボランティアではなく、各地のアートNPO、コミュニティアートの事情に精通することにより、「アサヒ・アート・フェスティバル」のような地域密着型のアートにおけるコーディネーターとして、高い専門性を備えた人材としての役割が期待することができます。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数：97名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数：8名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数：4名

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

8月10日（日）、9月26日（金）、10月24日（金）、11月28日（金）、12月26日（金）（すべて養成講座途中） 計5回開催

検討会メンバー：

- ・ 山内正平（千葉大学普遍教育センター、環境文化史学）
- ・ 半田晶子（特定非営利活動法人まちアート・夢虫理事長、コミュニティアートの企画立案）
- ・ 中村正明（佐倉・株式会社高千穂ネットワーク代表取締役、地域づくり）
- ・ 増井真理子（川口・アート記念日実行委員会、キュレーター）
- ・ 岸井大輔（POTARAIVE 主宰・脚本家）
- ・ 曾我高明（現代美術製作所ディレクター・向島学会、アートディレクション）
- ・ 下山浩一（特定非営利活動法人コミュニティアート・ふなばし、コミュニティアートの企画立案）

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

8月10日（日）プログラム全体について コミュニティアートと多様性について

【意見】意見日本人だけでなく、在住外国人にも本事業をアピールしていく必要がある。広報段階から配慮すべき。

【反映】「報告書」の一部バイリンガル化から取り組む。

9月26日（金）コミュニティアートのクオリティについて

【意見】ボランティアやコーディネーター、さらには地域のステークホルダーに達成感を持っていただくためには、プロセスも大事だが、作品としてのインパクトも軽視してはいけない。

10月24日（金）「地域資源」の考え方について

【意見】人と人のネットワークそのものを新しい資源と考え、本格的に開拓する必要がある。コーディネーターとしてのスキルアップは、自分のフィールドに籠っているだけでは難しい。

【反映】次年度以降の事業においては、各地の先進事例の視察を実施プログラムに入れ、人材の交流を計画的に行う。

11月28日（金）

【意見】現場で得られたノウハウを、可視化し、多くの人と共有できるようにすべき。

【反映】事業成果で得られたノウハウを「マニュアル」（報告書）にできるだけ多く盛り込む。今後は、ウィキペディア等の活用も検討すべき。

12月26日（金）「報告展」について「マニュアル」構成について

【意見】「報告展」でワークショップを実施することは、プロセス重視のコミュニティアートの成果報告として良い。他の地域でも実施できるワークショップ・プログラムの開発を目指しては、「マニュアル」のデザインは、本事業のイメージに大きく影響を与えるので重要。幅広い層にアピールするためにも、斬新かつ親しみが持てるデザインにするべき。

【反映】「ポタライブ・ワークショップ」「門脇篤ワークショップ」は、受講生とアーティストが、ゼロから話し合い、ワークショップ・プログラムの開発を行った。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

「文化ボランティア」は、どちらかといえば単発的で、プログラム単位の参加のイメージが強いですが、「文化ボランティア・コーディネーター」は、文化ボランティアおよびアートプロジェクトに関しての専門知識とスキルを持ち、地域における文化芸術活動において持続的にかかわる人材と認識しています。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

「文化ボランティア・コーディネーター」は、実際のアートプログラムの運営だけでなく、企画・立案を行うため、地域のキーパーソンとの人脈づくり、アートに関する専門知識、各地のアートNPOスタッフとの交流が不可欠です。

いずれの資質も、座学のみでは成果を得ることができません。OJTのような形で、先輩コーディネーターとともに働く、アーティストのフィールドワークに同行するといった、現場での教育が重要です。

また、コーディネーターとして最も重要な資質は、「モチベーション」の維持と考えます。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

今後、継続的にコミュニティアートに関わるリーダー層を育成し、地域の文化力を高める必要があります。コミュニティアート・プロジェクトの企画・運営を行うにあたり、コミュニティにおける創造的なアート活動の意味と、ネットワークのつなぎ手の役割を理解し、受入側の地域コミュニティ内の事情や住民のまちづくりとアートに関するニーズを受け止める人材が必要とされています。また、地域で創造的な活動を志す人がさまざまな能力を発揮するための支援的役割を担うコーディネーターが必要とされており、高度なノウハウの伝達を確かなものにしていくために、今年度作成して養成プログラムをベースに、毎年見直しを行い、今後5年間のうちに、30名の文化ボランティア・コーディネーターを養成します。

また、養成したコーディネーターは、

- ・ 船橋市本町通り商店街および駅前中心市街地における地域づくりイベント「きらきら夢ひろば」「夢市ふなばし」において、コミュニティアート・プログラムの企画・立案、実施のコーディネーターとして活動する。
- ・ 「コミュニティアート映像祭」の企画・立案、実施のコーディネーターとして活動する。
- ・ 全国のアートNPOと交流し、コーディネーターとしてのスキルをさらに向上する。
- ・ 今後、本事業のような養成事業を行う際に、企画立案、実施に関わる。

というように活用するほか、単なるボランティアではなく、各地のアートNPO、コミュニティアートの事情に精通することにより、「アサヒ・アート・フェスティバル」のような地域密着型のアートにおけるコーディネーターとして、高い専門性を備えた人材としての役割が期待することができます。将来に渡って、我が国の将来を担う、コーディネーター育成に資することができます。

今回の事業のキーパーソン：

川勝裕邦さん（船橋市本町通り商店街事務局長）。

コミュニティアート・プログラムの実施にあたっての助言。

キーパーソンからの一言

コミュニティアート・ふなばしは、学生をたくさん商店街に呼んでくれてとても助かっています。今回実施したアートプログラムも、商店街だけでは、発想もできません。このような団体が各地に増えてくれると良いと思います。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： コミュニティアート・プロジェクトの企画・運営を行うにあたり、コミュニティにおける創造的なアート活動の意味と、ネットワークのつなぎ手の役割を理解し、受入側の地域コミュニティ内の事情や住民のまちづくりとアートに関するニーズを受け止めて、地域で創造的な活動を志す人がさまざまな能力を発揮するための支援的役割を担うことができる人材を育成する。			
受講対象者	文化ボランティア活動およびコミュニティアート・ふなばしに関心を持ち、コーディネーターとしての活躍を志望する者。		
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPに掲載し、また千葉大学をはじめとする教育機関、美術館・ホールへのパンフレット折り込み、mixi 等 SNS・メールリングリストで活用等を行い、周知する。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1 アート NPO の役割	市民とアートをつなぐアート NPO の役割とコーディネーターとして必要なスキルに関して理解する。	アート NPO の実務担当者を講師に招き、国内外のアート NPO の活動事例、他セクターとの連携、ボランティア・コーディネート、ファンドレイジングについて講習を受ける。講師：坂本倫子(NPO 法人 BEPPU PROJECT)、増井真理子(アート記念日実行委員会)他 会場：ステッキハウス・ヒロキ	講義 2 時間×5 回 7 月～11 月実施。
2 地域資源とのマッチング	モデル地域である船橋市中心市街地の地域資源に関して理解を深め活用方法とコーディネート、プレゼンテーションのスキルを身につける。	①地域資源を活用してアートプロジェクトを展開しているアーティストの実践事例を聞き、フィールドワークに立ち会う。講師：岸井大輔(POTALIVE 主宰)、長岡野亜(映画監督・近江八幡)、林 僚児(アーティスト・沖縄)、門脇篤(アーティスト・仙台)他 会場：船橋市民ギャラリー ②コーディネーターの指導の下、地域資源マップを作成し、地域のアート資源を広く市民にプレゼンテーションを行う。講師：朝田尚子(デザイナー) 会場：船橋市市民活動サポートセンター	①講義 2 時間×3 回、フィールドワーク 3 回 8 月～10 月実施 ②実習×4 回、発表会 1 回 9 月～12 月実施
3 ワークショップの企画立案	市民参加によるアートプロジェクトに必須の「ワークショップ」を安全かつ効果的に実施	ファシリテーターの指導の下、コミュニティアート・プログラムを実施するプロセスに必要な、「ワークショップ」	実習×5 回

	するためのスキルを身につけ、ワークショップを企画・立案・実施できる能力を身につける。	の企画・立案・広報・コーディネート・実施を行う。講師：相田ちひろ(アーティスト)、門脇篤(現代アーティスト)他 会場：船橋市市民活動サポートセンター 他	
4 コミュニティアート・プロジェクトの企画立案	コミュニティアート・プロジェクトが自立的に活動を企画立案・実施できる能力を身につける。	コーディネーターの指導の下、受講者らが企画段階から参加し、「船橋まち歩き文化祭」「コミュニティアート映像祭」でのプログラムを企画・立案・広報・実施・検証する。講師：門脇篤(現代アーティスト)他 会場：船橋市市民活動サポートセンター他	実習×5回 7月～12月 イベント開催 9月-10月
5 成果報告会の企画・運営	学習の成果、プロジェクトの効果を検証し、発表会を企画・運営するスキルを身につける。	コーディネーターの指導の下、受講者らが自らの学習成果、プロジェクトの効果を検証し、プレゼンテーションを行いコメンテーターから講評をいただく。報告会の企画・立案・広報・実施を自ら行い、当日運営までの実践的スキルを身につける。講師：朝田尚子(デザイナー)他、コメンテーター：プログラム検討委員会 会場：船橋市市民活動サポートセンター、船橋市民ギャラリー	講義2時間×3回 イベント開催12月
6 活動ドキュメント・マニュアルの作成	コミュニティアート活動において重要なドキュメント・マニュアル作成に関するスキルを身につける。	コーディネーターの指導の下、受講者らが企画段階から参加し、本事業のドキュメントを「コミュニティアート・コーディネーターズ・マニュアル」(仮称)として編集し、作成する。講師：朝田尚子(デザイナー)他 会場：船橋市市民活動センター	講義2時間×2回、実習×5回 10月～12月実施。 発行2月

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター： コミュニティアート・プロジェクトの企画・運営を行うにあたり、コミュニティにおける創造的なアート活動の意味と、ネットワークのつなぎ手の役割を理解し、受入側の地域コミュニティ内の事情や住民のまちづくりとアートに関するニーズを受け止めて、地域で創造的な活動を志す人がさまざまな能力を発揮するための支援的役割を担うことができる人材を育成する。				
受講対象者	文化ボランティア活動およびコミュニティアート・ふなばしに関心を持ち、コーディネーターとしての活躍を志望する者。			
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPIに掲載し、mixi 等 SNS・メールリストで活用等を行い、周知させた。			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
1 アート NPO の役割	市民とアートをつなぐアート NPO の役割とコーディネーターとして必要なスキルに関して理解する。	アート NPO の実務担当者を講師に招き、国内外のアート NPO の活動事例、他セクターとの連携、ボランティア・コーディネーター、ファンドレイジングについて講習を受ける。講師：坂本倫子(NPO 法人 BEPPU PROJECT)、増井真理子(アート記念日実行委員会)他 会場：ステッキハウス・ヒロキ	講義 2 時間×5 回 8 月～11 月実施。	特になし。
2 地域資源とのマッチング	モデル地域である船橋市中心市街地の地域資源に関して理解を深め活用方法とコーディネーター、プレゼンテーションのスキルを身につける。	①地域資源を活用してアートプロジェクトを展開しているアーティストの実践事例を聞き、フィールドワークに立ち会う。講師：川崎けい子(アーティスト)、長岡野亜(映画監督・近江八幡)、大木裕之(アーティスト・高知)、門脇篤(アーティスト・仙台)他 会場：船橋市民ギャラリー ②コーディネーターの指導の下、地域資源マップを作成し、地域のアート資源を広く市民にプレゼンテーションを行う。講師：朝田尚子(デザイナー) 会場：船橋市市民活動サポートセンター	①講義 2 時間×3 回、フィールドワーク 3 回 8 月～10 月実施 ②実習×4 回、発表会 1 回 9 月～12 月実施	フィールドワークは、アーティストの熱意により、実際には、この回数を大幅に超えてしまった。超えた分の謝金については、コミュニティアート・ふなばしが負担した。
3 ワークショップ	市民参加によるアート	ファシリテーターの指導の下、コ	実習×5 回	特になし。

プの企画立案	プロジェクトに必須の「ワークショップ」を安全かつ効果的に実施するためのスキルを身につけ、ワークショップを企画・立案・実施できる能力を身につける。	コミュニティアート・プログラムを実施するプロセスに必要な、「ワークショップ」の企画・立案・広報・コーディネート・実施を行う。講師：岸井大輔(脚本家) 会場：船橋市市民活動サポートセンター 他		
4 コミュニティアート・プロジェクトの企画立案	コミュニティアート・プロジェクトが自立的に活動を企画立案・実施できる能力を身につける。	コーディネーターの指導の下、受講者らが企画段階から参加し、「船橋まち歩き文化祭」「コミュニティアート映像祭」でのプログラムを企画・立案・広報・実施・検証する。講師：岸井大輔(脚本家) 会場：船橋市市民活動サポートセンター他	実習×5回 7月～12月 イベント開催 9月-10月	門脇篤氏は、本プログラムの指導だけでなく、ブログによる情報発信等でも活躍いただき、受講生のプログラムに対する理解とモチベーション形成に重要な役割を担っていただいた。実習以外の企画・立案部分に関する謝金を計上していなかったため、労働に対する謝金をお支払することができなかった。
5 成果報告会の企画・運営	学習の成果、プロジェクトの効果を検証し、発表会を企画・運営するスキルを身につける。	コーディネーターの指導の下、受講者らが自らの学習成果、プロジェクトの効果を検証し、プレゼンテーションを行いコメントーターから講評をいただく。報告会の企画・立案・広報・実施を自ら行い、当日運営までの実践的スキルを身につける。講師：朝田尚子(デザイナー)他、コメントーター：プログラム検討委員会 会場：船橋市市民活動サポートセンター、船橋市民ギャラリー	講義2時間×3回 イベント開催12月	特になし。
6 活動ドキュメント・マニュアル	コミュニティアート活動において重要なドキュ	コーディネーターの指導の下、受講者らが企画段階から参加	講義2時間×2回、実習×5回	デザイン面では、高品質のも

ルの作成	メント・マニュアル作成に関するスキルを身につける。	し、本事業のドキュメントを「コミュニティアート・コーディネーターズ・マニュアル」(仮称)として編集し、作成する。講師:朝田尚子(デザイナー)他 会場:船橋市市民活動センター	10月～1月実施。 発行2月	のとなったが、事業終了の締め切りの関係で、プログラム終了後から、「マニュアル」作成までの期間が非常に短かったため、内容には不満が残った。
------	---------------------------	---	-------------------	--

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター： コミュニティアート・プロジェクトの企画・運営を行うにあたり、コミュニティにおける創造的なアート活動の意味と、ネットワークのつなぎ手の役割を理解し、受入側の地域コミュニティ内の事情や住民のまちづくりとアートに関するニーズを受け止めて、地域で創造的な活動を志す人がさまざまな能力を発揮するための支援的役割を担うことができる人材を育成する。			
受講対象者	文化ボランティア活動およびコミュニティアート・ふなばしに関心を持ち、コーディネーターとしての活躍を志望する者。		
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPに掲載し、mixi等SNS・メーリングリストで活用等を行い、周知させた。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1 アート NPO の役割	市民とアートをつなぐアート NPO の役割とコーディネーターとして必要なスキルに関して理解する。	アート NPO の実務担当者を講師に招き、国内外のアート NPO の活動事例、他セクターとの連携、ボランティア・コーディネート、ファンドレイジングについて講習を受ける。講師：坂本倫子(NPO 法人 BEPPU PROJECT)、増井真理子(アート記念日実行委員会)、アサダワタル(築港 ARC)皆川俊平(WATARASE ART PROJECT)他 会場：ステーキハウス・ヒロキ	講義 2 時間×5 回 7 月～11 月実施。
2 地域資源とのマッチング	モデル地域である船橋市中心市街地の地域資源に関して理解を深め活用方法とコーディネート、プレゼンテーションのスキルを身につける。	①地域資源を活用してアートプロジェクトを展開しているアーティストの実践事例を聞き、フィールドワークに立ち会う。講師：岸井大輔(脚本家)、林 僚児(アーティスト・沖縄)、門脇篤(アーティスト・仙台)、大木裕之(アーティスト) 会場：船橋市民ギャラリー ②コーディネーターの指導の下、地域資源マップを作成し、地域のアート資源を広く市民にプレゼンテーションを行う。講師：朝田尚子(デザイナー) 会場：船橋市市民活動サポートセンター	①講義 2 時間×3 回、フィールドワーク 3 回 8 月～10 月実施 ②実習×4 回、発表会 1 回 9 月～12 月実施
3 ワークショップの企画立案	市民参加によるアートプロジェクトに必須の「ワークショップ」を安全かつ効果的に実施するためのスキルを身につけ、ワークショップを企画・立案・実施できる能力を身につける。	ファシリテーターの指導の下、コミュニティアート・プログラムを実施するプロセスに必要な、「ワークショップ」の企画・立案・広報・コーディネート・実施を行う。講師：岸井大輔、(脚本家)、門脇篤(現代アーティスト)他 会場：船橋市市民活動サポートセンター 他	実習×10 回
4 コミュニティ	コミュニティアート・プロジェクト	コーディネーターの指導の下、受講者らが企	実習×10 回

アート・プロジェクトの企画立案	が自立的に活動を企画立案・実施できる能力を身につける。	画段階から参加し、「船橋まち歩き文化祭」「コミュニティアート映像祭」でのプログラムを企画・立案・広報・実施・検証する。講師：門脇篤（現代アーティスト）他 会場：船橋市市民活動サポートセンター他	7月～12月 イベント開催 10月
5 スタッフ交流研修	コーディネーター育成の先進事例を持つ地域のアート NPO に滞在して研修を行い、団体の運営に関して学ぶとともに、コーディネーターとしての資質として不可欠な、ネットワークづくりを行う。	【派遣先】（候補） 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT（別府市） 特定非営利活動法人カコア／クオリティ・アンド・コミュニケーション・オブ・アーツ（松山市） 空間実験室（青森市） 特定非営利活動法人 S-AIR（札幌市）	8月～9月 各地に1週間程度滞在し、研修を受ける。
6 成果報告会の企画・運営	学習の成果、プロジェクトの効果を検証し、発表会を企画・運営するスキルを身につける。	コーディネーターの指導の下、受講者らが自らの学習成果、プロジェクトの効果を検証し、プレゼンテーションを行いコメンテーターから講評をいただく。報告会の企画・立案・広報・実施を自ら行い、当日運営までの実践的スキルを身につける。講師：朝田尚子（デザイナー）他、コメンテーター：プログラム検討委員 会場：船橋市市民活動サポートセンター、船橋市民ギャラリー	講義 2 時間 × 3 回 イベント開催 12 月
6 活動ドキュメント・マニュアルの作成	コミュニティアート活動において重要なドキュメント・マニュアル作成に関するスキルを身につける。	コーディネーターの指導の下、受講者らが企画段階から参加し、本事業のドキュメントを「コミュニティアート・コーディネーターズ・マニュアル」（仮称）として編集し、作成する。講師：朝田尚子（デザイナー）他 会場：船橋市市民活動センター	講義 2 時間 × 2 回、実習 × 5 回 10 月～12 月実施。 発行 2 月

団 体 名：特定非営利活動法人
トリトン・アーツ・ネットワーク
代 表 者：理事長 加茂文治
所 在 地：東京都中央区晴海 1-8-10
晴海トリトンスクエアX棟5階
問 合 せ 先：Tel 03-3532-5701
担 当：櫻井あゆみ



1① 団体紹介

東京都中央区晴海・トリトンスクエア内第一生命ホールでのクラシックコンサートの主催および近隣小学校、幼稚園、病院でのアウトリーチ活動などの2本の柱で活動しています。

1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団 体 職 員 数：専任職員 8名、兼任職員 0名
- ・ 養成講座担当職員数：専任職員 1名、兼任職員 0名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

音楽アウトリーチ活動を行うにあたり、アートの社会的役割とその意味を理解し、受入側の時間や会場の制約などの事情や聴き手のニーズを受け止めて、アーティストと受け入れ先の円滑なコーディネートを行うことができる人材を育成します。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

本NPOでは、東京都中央区を拠点に平成13年より音楽による「アウトリーチ活動」を毎年約40回程度継続して実施しています。受け入れ先とアーティストを円滑に結びつける“コーディネーター”は現在専門者が行っていますが、受け入れ先とアーティストの仲介役となるアウトリーチ・コーディネーターは細かい配慮と専門的ノウハウが必要であり、専門者のみでは同時に多くの活動を行うのは困難です。

しかし、年々「アウトリーチ活動」への地域の認知度が増し、依頼も多くなってきており、さらにはもっと広い地域で活動が浸透していくべきであるという考えより、コーディネーター育成の必要性があります。

3① 養成されたコーディネーターの実際

今回の講座では、まず座学でアートの社会的役割とその意味を理解してもらうことができ、実地研修での受入側との打合せでは、先方の要望や施設の状況を把握し理解することができ、更に演奏者との打合せで的確に状況を伝えその上で演奏者の要望を受け止め、両者の間に立って相互をコーディネートする力を身につけることが出来ました。

しかし、4、5名が一つのグループで動き、細かく役割分担を行ったので、一人のコーディネーターが全体を見渡すということは出来ませんでした。

3② 実施した養成プログラムの問題点

予想よりも応募が多く、予定の人数より多くの受講生でスタートしたため、一人一人にコーディネーターとして全体を見渡すという役目までは実地研修の中で実施出来ませんでした。また、実地研修ではグループに分かれ活動を行ったため、他のグループの活動がわかりにくく、間にそれぞれの報告会や各グループの視察を入れるとより客観的な視野が広がったのではないかと思います。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

当団体が通常行っているアウトリーチ活動の補助などを通して、さらにコーディネーターとしての専門知識を養い、ゆくゆくはアウトリーチ・コーディネーターとして活動を支えてもらいたいです。また、それぞれの地域でアウトリーチ活動の実施先を新規開拓することによって、当団体の活動を広げていきたいです。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

それぞれが所属する場（会社や大学、サークルなど）で、音楽を通したなんらかの活動を実施する際に、講座のノウハウを活かしてコーディネーターの役割を担えることを期待します。それによって一部の専門職（舞台芸術の制作など）のみならず、市民の力で文化・芸術を盛り上げていくことが出来ると期待しています。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数：23名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数：12名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数：23名

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

12月10日（養成講座途中）

2月18日（養成講座終了後）計2回開催

検討会メンバー：

- ・ 大久保邦子（文化ボランティア・コーディネーター 企画集団Vnet 世話人）
- ・ 大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室 研究員／日本橋学館大学非常勤講師）
- ・ 武濤京子（昭和音楽大学音楽芸術運営学科准教授）
- ・ 高山秀男（NPOトリトン・アーツ・ネットワーク 事務局長）
- ・ 田中玲子（NPOトリトン・アーツ・ネットワーク ディレクター）
- ・ 櫻井あゆみ（NPOトリトン・アーツ・ネットワーク アソシエイト・ディレクター）

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

今後反映が必要な部分は、文化ボランティア・コーディネーターの基本的な考え方を学ぶ講座が必要であることと、「アウトリーチ・コーディネーター」は実地を何度も経験することが重要であるため、単年度だけでなくプロフェッショナルに向かって3コース程度にレベルを分け1年に1段階ずつあがっていきけるような構造にする必要があります。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

文化ボランティア・コーディネーターは、地域の文化振興などのために何か役立ちたいという希望を持っていますが、ボランティアがより自分に合った活動を行えるように助言や活動の場を提供し、更にステップアップをするための情報を提供することが出来る人だと認識しています。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

- ・ 相手の話をよく聞く。
- ・ 常に問題点がどこにあるか考え、よりよい方向へもっていくために労力を惜しまない。
- ・ バランスの取れた触媒的な要素。
- ・ 自分が関わる文化（音楽や地域の歴史など）を純粋に愛することができる。
- ・ 未来に対して何らかの危機感を持っている（今よりもっと良くしようと思う気持ち）。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

全国各地で音楽によるアウトリーチ活動が盛んになってきている昨今、アートNPOや文化施設の職員の手だけでは実情に合ったアウトリーチを実施することが難しくなっています。地域とアートをつなぐ役割を担うコーディネーターが必要とされており、これからアウトリーチ活動を様々な地域で行っていくために、毎年スキルアップをしていけるようなプログラムを作成し、今後3年間のうちに15名のアウトリーチ・コーディネーターを育成します。また、育成したコーディネーターは当団体が実施しているアウトリーチのコーディネーターとして活用するほか、それぞれの地域で市民の力で文化・芸術を盛り上げていくリーダーシップ的役割も期待でき、専門職員の人材不足による文化・芸術振興の妨げなどの課題の改善に貢献できると思います。

今回の事業のキーパーソン：

櫻井あゆみ（NPOトリトン・アーツ・ネットワーク アソシエイト・ディレクター）

キーパーソンからの一言

「アウトリーチ・コーディネーター」は音楽と人の出逢い、人と人の出逢いをコーディネートする役割を持っています。音楽が好き、人が好き、まずその気持ちを大切に思い、講座であらためて認識してもらうことが大切です。人との付き合い方や生の音楽が人に与える影響力は参考書からは学べません。本講座ではその部分を体感することが何よりも重要だと考えます。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： 音楽アウトリーチ活動を行うにあたり、アートの社会的役割とその意味を理解し、受入側の時間や会場の制約などの事情や聴き手のニーズを受け止めて、アーティストと受け入れ先の円滑なコーディネートを行うことができる人材を育成する。			
受講対象者	アウトリーチ・コーディネーターに興味があり、養成プログラムに最後まで参加できる者。(10～15名)		
受講者の募集方法	・当団体のHPに掲載 ・当団体登録のボランティアに告知 ・アートマネジメント関係のメーリングリストにて告知		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1. アウトリーチの企画～制作を学ぶ	アウトリーチ・コーディネーターとして必要なノウハウを身につける。	①アウトリーチ制作のプロフェッショナルを外部講師として招き、「TANアウトリーチハンドブック」を教本にアウトリーチ制作に必要な8ステップを学ぶ。	講義2時間×5回 8月～9月に開催
2. 受け手側の気持ちを知る	受け手(聴衆)の身になってコーディネートをする力を身につける。	①アウトリーチを頻繁に行っているアーティストのプログラムに聴衆として参加する。 ②その後、アーティスト・講師を交えて討論を行う。	アウトリーチ1時間×1回 討論1時間×1回 9月に開催
3. 活動の企画立案・実施	自立的に活動を企画立案・実施できる能力を開発する。	①コーディネーターの指導の下、養成講座受講者らが東京都中央区内でアウトリーチを企画立案し実施する。	実習 10ヶ所(参加者10名の場合) 10月～1月に開催
4. 振り返り	アウトリーチ実施後に問題点を見つけ、次回に向けて解決していく力を身につける。	①参加者がそれぞれのアウトリーチを報告。 ②講師を交え、振り返りを行う。 ③養成プログラムの内容について討論を行う。	振り返り及び討論会 4時間×1回 1月に開催

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター： 音楽アウトリーチ活動を行うにあたり、アートの社会的役割とその意味を理解し、受入側の時間や会場の制約などの事情や聴き手のニーズを受け止めて、アーティストと受け入れ先の円滑なコーディネートを行うことができる人材を育成する。				
受講対象者	アウトリーチ・コーディネーターに興味があり、養成プログラムに最後まで参加できる者。(23名)			
受講者の募集方法	当団体のHPに掲載 ・アートマネジメント関係のメーリングリストにて告知 ・当団体登録のボランティアに告知			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
1. アウトリーチの企画～制作を学ぶ	アウトリーチ・コーディネーターとして必要なノウハウを身につける。	①TANで実際にアウトリーチ活動に携わっているスタッフが講師となり、「TANアウトリーチハンドブック」を教本にアウトリーチ制作に必要な8ステップを学ぶ。	10/16 講義 19時～21時 21名参加 講師:児玉真 NPOTリトン・アーツ・ネットワーク ディレクター(専門分野/芸術文化と社会学) 10/29 講義 19時～21時 21名参加 講師:櫻井あゆみ NPOTリトン・アーツ・ネットワーク アソシエイト・ディレクター(専門分野/クラシック音楽によるコミュニティ活動の企画・運営) 11/19 講義 19時～21時 19名参加 講師:櫻井あゆみ	講義3回のうち2回は概要の説明でほとんど費やしてしまい、残りの1回でグループ分け、実地に向けての準備を行ったため、細かい部分まで指導できなかった。
2. 受け手側の気持ちを知る	受け手(聴衆)の身になってコーディネートをする力を身につける。	①アウトリーチを頻繁に行っているアーティストのプログラムに聴衆として参加する。 ②その後、アーティスト・講師を交えて討論を行う。	11/12 模擬アウトリーチ 19時～20時 講師:田村緑 ピアニスト 討論会 20時～21時 20名参加	とくに問題点はなかった
3. 演奏家・施設それぞれのニーズを知る	演奏家・施設それぞれのニーズを知り、またそれを上手く調整する力を身につける	①演奏家を講師として迎え、アウトリーチに関する知識を得る。 ②施設と打合せをし、受け手のニーズを知る。	11/25 講義 18時半～21時 4名参加 講師:田村緑 ピアニスト 12/4 講義 19時～21時 6名参加 講師:バズ・ファイブ(金管五重奏団) 演奏家 12/17 講義/打合せ 19時～21時 13名参加 講師:小野明子 ヴァイオリニスト 11/26 打合せ 14時～15時 2名	施設との打合せは平日昼間のことが多いため、社会人の参加者は参加できなかった。

			参加 12/5 打合せ 11時～12時 2名 参加 12/11 打合せ 17時～18時 2名 参加 12/18 打合せ 15時～16時 2名 参加 12/28 打合せ 14時～16時 6名 参加 1/20 リハーサル 18時半～20時 4名参加	
4. 活動の実施	これまでの講座を踏まえて、コーディネーターの立場となって実際にアウトリーチを実施する	①コーディネーターの指導の下、養成講座受講者らが東京都中央区内でアウトリーチを実施する。	1/6 高齢者総合福祉施設 晴海苑 9時～16時 5名参加 1/17 佃児童館 9時～16時 5名参加 1/22 月島第二小学校 9時～15時 4名参加 1/24 勝どき児童館 9時～16時 4名参加 1/28 月島第一小学校 9時～14時 5名参加	1グループが4、5名と人数が多かったため、全体を見渡せなかったようだ。コーディネーターとして自立できるところまでは育成できなかった。
5. 振り返り	アウトリーチ実施後に問題点を見つけ、次回に向けて解決していく力を身につける。	①参加者がそれぞれのアウトリーチを報告。 ②講師を交え、振り返りを行う。 ③養成プログラムの内容について討論を行う。	2/4 振り返り 19時～21時 18名参加	とくに問題点はなかった
6. その他	他団体の活動を知り、アウトリーチに対する知識を養う。	①TAN、昭和音楽大学、ロンドン交響楽団によるアウトリーチ・シンポジウムを開催。	12/1 シンポジウム 15時～17時 12名参加	とくに問題点はなかった

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター： 音楽アウトリーチ活動を行うにあたり、アートの社会的役割とその意味を理解し、受入側の時間や会場の制約などの事情や聴き手のニーズを受け止めて、アーティストと受け入れ先の円滑なコーディネートを行うことができる人材を育成する。			
受講条件 (受講対象者)	①平成20年度アウトリーチ・コーディネーター講座受講者で②の対象者のリーダーとして講座を受講する者(5名) ②新規のアウトリーチ・コーディネーターに興味があり、養成プログラムに最後まで参加できる者。(10名)		
受講者の募集方法	①平成20年度の参加者へ告知 ②当団体のHPに掲載 ・当団体登録のボランティアに告知 ・アートマネジメント関係のメーリングリストにて告知		
課題	目的	問題点を踏まえた改善策(実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1. 文化ボランティア・コーディネーターの役割について学ぶ	文化ボランティア・コーディネーターの考え方を知り、役割を認識する	文化ボランティアの活動に詳しい外部専門家を講師として招き、講義を聞く。	講義2時間×1回 8月に実施
2. アウトリーチの企画～制作を学ぶ	アウトリーチ・コーディネーターとして必要なノウハウを身につける。	TANで実際にアウトリーチ活動に携わっているスタッフが講師となり、「TANアウトリーチハンドブック」を教本にアウトリーチ制作に必要な8ステップを学ぶ。	講義2時間×2回 9月に実施
3. 受け手側の気持ちを知る	受け手(聴衆)の身になってコーディネートをする力を身につける。	TANが通常行っているアウトリーチ活動を見学する。	随時
4. 実践に向けてコーディネーターの役割を知る	演奏家・施設それぞれのニーズを知り、またそれを上手く調整する力を身につける	昨年受講済みのリーダーを中心に3名1グループで実践に向けて、演奏家および受入れ施設との打合せを実施し、準備を進める。	打合せ2時間×1回 演奏家との打合せ×1回 受入れ施設との打合せ×1回 その他、準備は随時
5. 活動の実施	これまでの講座を踏まえて、コーディネーターの立場となって実際にアウトリーチを実施する	東京都中央区内でアウトリーチを実施する。	実習 5ヶ所(参加者15名の場合) 10月～1月に実施
6. 振り返り	アウトリーチ実施後に問題点を見つけ、次回に向けて解決していく力を身につける。	①参加者がそれぞれのアウトリーチを報告。②講師を交え、振り返りを行う。③養成プログラムの内容について討論を行う。	振り返り及び討論会 2時間×1回 1月に開催

団 体 名 : やまなし若者地域活性化
プロジェクト推進委員会
代 表 者 : 事務局長 佐藤安紀
所 在 地 : 山梨県甲府市丸の内1-6-1
山梨県教育委員会内
問合せ先 : E-Mail yyproject.office@gmail.com



1① 団体紹介

地域の活性化へ向けて県内大学生の活力を活用した「やまなし若者地域活性化プロジェクト」は、意欲ある大学生の社会参画を促すことをねらいとして平成20年度に設立されました。山梨県教育委員会が事務局となっています。

1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団 体 職 員 数 : 専任職員 0名、兼任職員 2名
- ・ 養成講座担当職員数 : 専任職員 0名、兼任職員 2名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

中心市街地が抱える課題を認識し、若者の活力による暮らしやすいまちづくりに取り組むため、中心となって活躍する大学生を育成します。まちの文化の資産化、まちの魅力発信、仲間作り、後輩育成の資質を身につけます。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

甲府市の中心商店街は、空き店舗が増えるとともに、商工会議所による市中心部での歩行者を数えた調査（週末3日間のみ）は、昭和61年に38万人だったのが、20年後の平成18年には17万8千人と半分以上に落ち込んでいます。

中心市街地の再生を目指す動きとして、山梨県立大学の学生らによる「よつびしまちづくり総合研究所」が平成19年度に設立され、若者独特の新鮮なアイデアに大きな期待が寄せられています。

一方、こうした学生らによるまちづくり文化ボランティアの取り組みは緒についたばかりであり、他県の先進的な事例の調査研究や、理論と経験に基づく実践が行われているわけではなく、体系的なボランティア・コーディネーター養成は十分ではありません。

こうした中、山梨県は県内大学生の活力を活用した「やまなし若者地域活性化プロジェクト推進事業」を平成20年度に新規に実施し、意欲ある大学生の社会参画を促すこととしています。これら意欲ある大学生に対し、文化ボランティア支援拠点形成事業においては、将来のコミュニティづくりのリーダーとなるようそのスキルを高めることを目的として、体系的な「大学生まちづくり文化ボランティア・コーディネーター養成」を行うとともに、先輩大学生から後輩大学生へ人材養成を継承するサイクルを確立させる必要があったからです。

3① 養成されたコーディネーターの実際

意欲ある大学生の社会参画を促すことをねらいとした「やまなし若者地域活性化プロジェクト」は当初、甲府市近郊の大学生20名の参加により開始しました。文化ボランティア支援拠点形成事業において、将来のコミュニティづくりのリーダーとなるようそのスキルを高めることを目的として、体系的な「大学生まちづくり文化ボランティア・コーディネーター養成」を行ったところ、まちづくりや文化ボランティアに興味関心を持つ大学生の輪が広がり、県東部の都留市、県南部の河口湖町、県西部の身延町の大学生からも積極的な参加があり、最終日の拠点形成プログラムとした「甲府クリーンアップ」には、8大学250名が参加しました。こうした中で、各大学に自然発生的にリーダーが育ち、1/3に当たる80名が今後のコミュニティづくりのリーダーとして登録を名乗り出るに至りました。

仲間作り、動機作り、そして、「任される」という自信作りの仕掛けを行うことで、1年足らずで人材養成の基礎を確立することができました。

3② 実施した養成プログラムの問題点

初年度は養成側で用意したプログラムと、大学生主導による自主企画が相互に良い影響をおよぼしました。ただし、大学生の本務である大学の授業等や、自由に活躍できる週末や長期休業期間とうまく調整することが必要であることがわかりました。

今後は、「養成プログラム」を企画・立案段階から大学生主導による人材養成システムの取り組みを進め、さらなる文化ボランティア・コーディネーターの養成に努めていきたいです。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

山梨県及び山梨県教育委員会においては、養成プログラム受講者を県の社会教育や文化・文化財に関する委員へ委嘱するなど、県の政策立案・実施の際に活躍の場を提供することとしています。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

甲府商工会議所の協力により営業店舗、空き店舗を含む甲府市中心商店街の全域、県や市が管理する公園、甲府城など、中心市街地一帯において、文化ボランティアが活動する場が確保されています。

このエリアにおいて、まちづくり活動、まちおこしイベントの実施が円滑に行われるよう、行政としても仲介、支援していくこととしています。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数：250名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数：80名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数：250名（①を含む）

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

- ・ 5月30日（養成講座開始前）
- ・ 8月11日、11月7日（養成講座途中）
- ・ 2月11日（養成講座終了後）計4回開催

検討会メンバー：

- ・ 山梨県教育委員会 社会教育課長 大堀修己
- ・ 山梨県立大学 国際政策学部総合政策学科 准教授 熊谷隆一
- ・ 山梨学院大学 現代ビジネス学部現代ビジネス学科 准教授 伊藤洋晃
- ・ 日本上流文化圏研究所 研究員 柴田彩子
- ・ 社団法人 甲府青年会議所 理事長 金井博
- ・ NPO法人 大丸有エリアマネジメント協会 理事 廣野研一

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

居住住民がいない点においては、甲府市中心商店街も東京丸の内地区も同様であるが、初年度は大学生に先入観を持たせず純粹に取り組ませることの方が教育効果もあるとの意見から、エリアマネジメント研修の実施時期を養成プログラムの初めではなく仕上げの段階の1月にずらしました。

普段、大学生が接することのない行政関係者や商工関係者の話を聞くだけでも価値のあることであり、委託経費を要せず実施できるものは積極的に取り組むべきとの意見から、県副知事、甲府市副市長との意見交換をはじめ博物館等の学芸員等の講義も取り入れました。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

「新しい公共」を自ら創り出そうと考え・行動する者が「文化ボランティア・コーディネーター」です。仲間作り、動機づくり、そして「任される」という自信づくりの仕掛けを行うことで、誰もが「文化ボランティア・コーディネーター」となることができることが本事業によって得られた成果です。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

「おもしろい人」であること。

（参考）河合隼雄著「こころの声を聴く」より

「おもしろい」とは、知的判断としてよりは、人間全体としての反応の方に重点をおいた言葉である。「オモロイナ、よしやろう！」というように、何かこちらの身体まで動き出しそうなの—と言って何をやるのか定かではないが—動きが生じてくるのである。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

学生、子育て後の主婦、高齢者のように、社会づくりに時間をかけることの出来る層を「社会起業家」と位置づけ、社会の仕組みや原動力づくりのきっかけとなるようなプログラムにしていきたいです。

総論的には、「経済の活性化」「賑やかしを含めた文化の活性化」「伝統知を含めた知的財産の掘り起こし、再発見及び進化」「伝統産業への参画、活力の注入。交流による担い手育成」を行います。

具体的には、養成プログラム「3活動先の開発」「4事業企画実践演習」において、山梨県における地域の課題として、「ワイン産業、ジュエリー産業の後継者不足」「必ずしも官が担うものではない公共の仕事、清掃活動」「文化財等の有効活用」「空き店舗の有効活用として、アーティストとの連携」などについて文化ボランティア・コーディネーターの活躍の場が期待されていることから、これらに特化させながら、今後さらなる養成プログラムを深化させていきたいです。

養成の規模は、県内12大学の学生を中心とした若者を毎年50名予定しています。

今回の事業のキーパーソン：

戸田 達昭 氏（山梨大学大学院卒業、25歳）

県内12大学250名の学生を取りまとめる役割を果たしました。

キーパーソンからの一言

「ヨソモノ・ワカモノ・バカモノがチャレンジし、一石を投じる時期」は過ぎました。これからは、「継続したチャレンジ・裾野を広げていく時期」であり、そして「地域に生活する者との共有共育、文化として定着させる時期」を迎えます。

ワカモノの地域への社会参画・貢献意欲を湧きたてる仕掛けが必要です。トップダウンではなく自然発生的に湧き上がるワカモノの活力を、行政や関係団体が側面から支援することが大切です。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： 「大学生まちづくり文化ボランティア・コーディネーター」 中心市街地が抱える課題を認識し、若者の活力による暮らしやすいまちづくりに取り組むため、中心となって活躍する大学生を育成する。まちの文化の資産化、まちの魅力発信、仲間作り、後輩育成の資質を身につける。			
受講対象者	まちづくりや文化ボランティアに興味関心を持ち、活動歴のある若者(大学生等)20名		
受講者の募集方法	甲府市内4国県私立大学のゼミナールで呼びかけるほか、山梨県教育委員会HP、新聞記事で周知		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1:まちづくり団体との連携	行政や商工会議所等のまちづくり団体が抱える課題の把握、これら団体との協働に必要なスキルを身につける	①山梨県知事や甲府市長など行政トップのまちづくり所信や若者への期待を聞く。県市のまちづくり担当課の説明を受ける。 ②行政、商工会議所、商店主を交え、まちづくりに必要な若者の活力・活用策について討論する。	講義・協議 2時間×4回(6, 7, 12, 1月実施)
2:エリアマネジメント研修	市民やNPOによるまちづくりの先進事例を研究・評価する	①成功例や失敗例を調査研究し、まちづくりの理論を身につける。 ②都市部における市民やNPOによるまちづくりの先進地域におけるプログラムに実践的に研修参加する。	講義・協議 2時間×4回(6, 7, 12, 1月実施) 実習 各2日(千代田区丸の内、京都市)(8, 10月実施)
3:まちづくり文化ボランティア活動先の開発	眠っている地域文化資産を発見し、これらの価値を表面化させる活動を通して、文化ボランティアの活動先を開発する	①歴史、昭和の面影が残る街並み、衣食住の生活文化など「あるもの探し」 ②地域文化資産のデータベース化 ③甲府のまちでの文化ボランティアの活動事例を紹介し、新たに開拓した活動先をガイドマップに作成する。甲府市周辺の大学(5か所)・高校(15か所)・カフェ(30か所)に、ガイドマップ及び配架キットを配布し、新たなボランティア参加者(高校生から20代)を促す。	実習 4グループ(7月から12月)
4:まちづくり文化ボランティア事業企画実践演習	文化ボランティアを実際に活用した事業を企画、実践する経験を高める	①養成プログラム受講者による「まちの魅力発信」や「甲府のまち御案内仕隊(つかまつりたい)」などの企画を立案し、実践する。ここでは、歴史や昭和の面影が残る街並みを発信し、その文化資産を継承しようとするボランティアの輪を広げることをねらう。 ②受講者による「やまなし まちづくり文化ボランティアSNS」を運営し、文化ボランティアの参加促進やコミュニティを形成する。各受講者が文化ボランティア事業を企	実習 4グループ(7月から12月)

		画する際に、ウェブや携帯サイトを活用し、若い世代を文化ボランティアに誘引できるスキルを身につける。	
5: 大学生まちづくりボランティア拠点形成	先輩大学生から後輩大学生への実践的な活動を通して、文化ボランティアのノウハウを引き継がれるシステムを構築	①行政や商工会議所等のまちづくり団体への成果説明、市民向け報告会の開催。報告会は、中心市街地にある公園、駅前広場、城趾・カフェ等の人が集まる空間を活用して行う。 ②空き店舗の利用など、活動拠点づくり ③先輩大学生から後輩大学生への活動の引き継ぎ	協議・実習 4グループ（1月）

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター : 「大学生まちづくり文化ボランティア・コーディネーター」 中心市街地が抱える課題を認識し、若者の活力による暮らしやすいまちづくりに取り組むため、中心となって活躍する大学生を育成する。まちの文化の資産化、まちの魅力発信、仲間作り、後輩育成の資質を身につける。				
受講対象者	まちづくりや文化ボランティアに興味関心を持ち、活動歴のある若者(大学生等)80名			
受講者の募集方法	山梨県内12国県私立大学へ呼びかけるほか、山梨県教育委員会HP、新聞記事で周知			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
1:まちづくり団体との連携	行政や商工会議所等のまちづくり団体が抱える課題の把握、これら団体との協働に必要なスキルを身につける	①山梨県知事や甲府市長など行政トップのまちづくり所信や若者への期待を聞く。県市のまちづくり担当課の説明を受ける。 ②行政、商工会議所、商店主を交え、まちづくりに必要な若者の活力・活用策について討論する。	①甲府市副市長(5名参加)(7/16 9-11)、山梨県副知事(15名参加)(9/5 9-11) ②商工会議所事務局長他(5名参加)(8/7 13:30-15)、ヴァンフォーレ甲府ゼネラルマネージャー(5名参加)(1/15 13-15)、甲府青年会議所理事長他(40名参加)(1/15 18:30-21)	概ね計画通り実施できた ①②とも、委託経費を要せず実施できた
2:エリアマネジメント研修	市民やNPOによるまちづくりの先進事例を研究・評価する	①成功例や失敗例を調査研究し、まちづくりの理論を身につける。 ②都市部における市民やNPOによるまちづくりの先進地域におけるプログラムに実践的に研修参加する。	①甲府市役所副市長他(40名参加)(12/5 13:30-15) ②東京都千代田区丸の内大丸有エリアマネジメント協会 長島俊夫(各24名の参加者に対し、エコ、子育て・暮らし、文化、カフェ、エコツェリア、仕掛けづくり、プロデュース等について講義・案内)(1/24 13-17, 1/25 13-17 大手町、丸の内、有楽町地区)	大学生に先入観を持たず純粹に取り組ませることが教育効果であり、実施時期を養成プログラムの仕上げの段階にずらした
3:まちづくり文化ボランティア活動先の開発	眠っている地域文化資産を発見し、これらの価値を表面化させる活動を通して、文化ボランティアの活動先を開発	①歴史、昭和の面影が残る街並み、衣食住の生活文化など「あるものの探し」 ②地域文化資産のデータベース化 ③甲府のまちでの文化ボランティアの活動事	①放光寺住職(20名参加)(9/8 10-12) ②ワインツーリズム山梨代表(20名参加)(7/23 15-17)、県立科学館学芸員他(20名参加)(8/14 13-14:30)、県立博物館学芸員他(20名参加)(10/20	概ね計画通り実施できた ①②の一部は、委託経費を要せず実施できたほか、受講者が自主的にフィールドワークを実施した

	する	例を紹介し、新たに開拓した活動先をガイドマップに作成する。甲府市周辺の大学(5か所)・高校(15か所)・カフェ(30か所)に、ガイドマップ及び配架キットを配布し、新たなボランティア参加者(高校生から20代)を促す。	13:30-15)、県立考古博物館学芸員他(20名参加)(10/29 13:30-15:30)、地域データベース化演習 坂本真紀(20名の参加者に対し、講義・実習)(1/30 8-12, 13-18) ③コミュニティアート実習 戸田達昭(20名の参加者に対し、成功事例・失敗事例等を講義・実習)(9/28 14-16)、調査(9月～)、DTP制作(11月～)、配付(2月～)	
4:まちづくり文化ボランティア事業企画実践演習	文化ボランティアを実際に活用した事業を企画、実践する経験を高める	①養成プログラム受講者による「まちの魅力発信」や「甲府のまち御案内仕隊(つかまつりたい)」などの企画を立案し、実践する。ここでは、歴史や昭和の面影が残る街並みを発信し、その文化資産を継承しようとするボランティアの輪を広げることを行なう。 ②受講者による「やまなし まちづくり文化ボランティアSNS」を運営し、文化ボランティアの参加促進やコミュニティを形成する。各受講者が文化ボランティア事業を企画する際に、ウェブや携帯サイトを活用し、若い世代を文化ボランティアに誘引できるスキルを身につける。	①文化財について 県教委学術文化財課長ほか(20名参加)(8/5 9-11 甲府城) ②家庭教育支援について 山梨県立大学人間福祉学部講師(20名参加)(7/24 9:30-10:30)、子育てサークルとの意見交換(20名参加)(12/25 14-16 県庁)、まちづくり研修 山梨県立大学 鶴見尚弘(各150名の参加者に対し、県勢概要、地域コミュニケーション、国際交流、日本語教育、高等教育の現状等について講義・意見交換)(1/30 13-17, 2/1 13-17)、SNS制作(7月～1月)	概ね計画通り実施できた ①②の一部は、委託経費を要せず実施できたほか、受講者が自主的にフィールドワークを実施した 情報共有と情報発信のため、Webサイトの設置は必須である
5:大学生まちづくりボランテ	先輩大学生から後輩大学生	①行政や商工会議所等のまちづくり団体へ	①まちづくりと大学生ライフスタイル 河西真、戸田達	概ね計画通り実施できた

ィア拠点形成	への実践的な活動を通して、文化ボランティアのノウハウを引き継がれるシステムを構築	の成果説明、市民向け報告会の開催。報告会は、中心市街地にある公園、駅前広場、城趾・カフェ等の人が集まる空間を活用して行う。 ②空き店舗の利用など、活動拠点づくり ③先輩大学生から後輩大学生への活動の引き継ぎ	昭、坂本真紀(50名×3グループの参加者に対し、企画・調査・統計実習・発表方法等を指導)(11/7 10-12, 13-17 コミュニティスペース) ②甲府クリーンアップ 戸田達昭(250名の参加者に対し、心得・手順を指導し引率)(2/11 8-12, 13-18 甲府市内、コミュニティスペースほか) ③報告会(各50名×3グループの取り組み状況についてプレゼンテーション、意見交換)(11/7 8-18, 2/11 13-21 コミュニティスペース)	中心市街地活性化イベントや空き店舗利用(別途予算で実施)は、コストパフォーマンスについて課題が残された想定外の250名規模まで参加者が増えたが、コアリーダーを養成するためには、ある程度絞り込む必要も指摘された。
---------------	---	--	--	--

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター :「大学生まちづくり文化ボランティア・コーディネーター」 中心市街地が抱える課題を認識し、若者の活力による暮らしやすいまちづくりに取り組むため、中心となって活躍する大学生を育成する。まちの文化の資産化、まちの魅力発信、仲間作り、後輩育成の資質を身につける。			
受講条件 (受講対象者)	まちづくりや文化ボランティアに興味関心を持ち、活動歴のある若者(大学生等)50名		
受講者の募集方法	山梨県内12国県私立大学へ呼びかけるほか、山梨県教育委員会HP、新聞記事で周知		
課題	目的	問題点を踏まえた改善策(実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1:まちづくり 団体との連 携	行政や商工会議所等 のまちづくり団体が抱 える課題の把握、これ ら団体との協働に必要 なスキルを身につける	①山梨県知事や甲府市長など行政トップ のまちづくり所信や若者への期待を聞く。 県市のまちづくり担当課の説明を受ける。 ②行政、商工会議所、商店主を交え、まち づくりに必要な若者の活力・活用策につ いて討論する。	講義・協議 2時間×4回 (6, 7, 12, 1 月実施)
2:エリアマ ネジメント研 修	市民やNPOによるまち づくりの先進事例を研 究・評価する	①成功例や失敗例を調査研究し、まちづく りの理論を身につける。 ②都市部における市民やNPOによるまち づくりの先進地域におけるプログラムに実 践的に研修参加する。	講義・協議 2時間×4回 (6, 7, 12, 1 月実施) 実習 各2日 (千代田区丸の内、京都 市) (8, 10 月実施)
3:まちづくり 文化ボラン ティア活動 先の開発	眠っている地域文化資 産を発見し、これらの 価値を表面化させる活 動を通して、文化ボラ ンティアの活動先を開 発する	①歴史、昭和の面影が残る街並み、衣食 住の生活文化など「あるもの探し」 ②地域文化資産のデータベース化 ③甲府のまちでの文化ボランティアの活動 事例を紹介し、新たに開拓した活動先をガ イドマップに作成する。甲府市周辺の大学 (5 か所)・高校(15 か所)・カフェ(30 か所) に、ガイドマップ及び配架キットを配布し、 新たなボランティア参加者(高校生から 20 代)を促す。	実習 4グループ (7 月から 12 月)
4:まちづくり 文化ボラン ティア事業 企画実践演 習	文化ボランティアを実 際に活用した事業を企 画、実践する経験を高 める	①養成プログラム受講者による「まちの魅 力発信」や「甲府のまち御案内仕隊(つか まつりたい)」などの企画を立案し、実践す る。ここでは、歴史や昭和の面影が残る街 並みを発信し、その文化資産を継承しよう とするボランティアの輪を広げることをねら う。 ②受講者による「やまなし まちづくり文化 ボランティアSNS」を運営し、文化ボラン ティアの参加促進やコミュニティを形成する。	実習 4グループ (7 月から 12 月)

		各受講者が文化ボランティア事業を企画する際に、ウェブや携帯サイトを活用し、若い世代を文化ボランティアに誘引できるスキルを身につける。	
5:大学生まちづくりボランティア拠点形成	先輩大学生から後輩大学生への実践的な活動を通して、文化ボランティアのノウハウを引き継がれるシステムを構築	①行政や商工会議所等のまちづくり団体への成果説明、市民向け報告会の開催。報告会は、中心市街地にある公園、駅前広場、城趾・カフェ等の人が集まる空間を活用して行う。 ②空き店舗の利用など、活動拠点づくり ③先輩大学生から後輩大学生への活動の引き継ぎ	協議・実習 4グループ (1月)
(新規課題) 6:後継者育成、地域お助け隊、活力注入事業	山梨県における地域の課題として、「ワイン産業、ジュエリー産業の後継者不足」「必ずしも官が担うものではない公共の仕事、清掃活動」「文化財等の有効活用」「空き店舗の有効活用として、アーティストとの連携」など	これらの新しい課題に対して、文化ボランティア・コーディネーターの活躍の場が期待されていることから、これらに特化させながら新たな養成プログラムを実施したい。	講義・協議 2時間×10回 (年間) 協議・実習 4グループ(年間)

団体名：しが次世代文化芸術推進委員会

代表者：委員長 岸野 洋

所在地：滋賀県大津市京町3-4-22

問合せ先：Tel 077-522-6268

Fax 077-524-6300

E-Mail shiga-aspo@shiga-bunshin.or.jp



1① 団体紹介

子どもたちに自分たちの住む地域への誇りや愛着を感じることを積み重ねることが、子どもたちの豊かな人間性や自分自身に自信を持って生きる力を育むといえます。そのための方策として、地域の美しい自然や文化芸術・伝統等に触れる体験することが大切であると考えます。

滋賀県では「すべての子どもたちに、本物の文化芸術に触れる体験をととして、豊かな心を育てる」を理念に、平成12年度より本物の文化芸術に触れる授業をはじめた。これは、学校のカリキュラムの中で、美術館・芸術家と学校教育とを繋いで本物の文化芸術に触れる授業を実施するというもので、現在、幼・小・中・高校・養護学校と年間100回の連携授業を実施するまでに広がってきています。

この実績を踏まえ、平成20年4月、民間組織と行政との協働で、「しが次世代文化芸術推進委員会」が設立され、具体的な活動をする場として「しが文化芸術学習支援センター」が開設された。これは、今までになかった新しい次世代文化芸術推進協働モデルとして注目されています。

具体的な活動をする場として開設された「しが文化芸術学習支援センター」の事業としては、「体験：連携授業」「育成：文化ボランティア」「研究：連携研究会」「発信：子ども文化芸術祭」「連携・協働：連携・協働事業」の5つの柱を掲げています。

この中で美術館と学校教育との連携による次世代支援活動、文化ホール、音楽・演劇など多様な芸術教育との連携、企業・大学などとの連携・協働事業を実施しています。また、それらの事業を支えている文化ボランティア、文化ボランティア・コーディネーターの育成・養成に力を入れ、「市民による文化力」を育てる拠点としての役割を担っています。

養成するコーディネーター：

- ・ 馬場 輝代（前滋賀県総合教育センター所長、しが文化芸術学習支援センター長）
- ・ 津屋 結唱子（子どもの美術教育をサポートする会代表、しが文化芸術学習支援センター トータルコーディネーター）

1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団体職員数：専任職員 5名、兼任職員 3名
- ・ 養成講座担当職員数：専任職員 5名、兼任職員 3名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

本年の文化ボランティア・コーディネーター養成については、「地域の文化・伝統」をキーワードに、美術教育・美術館を活用した子ども支援活動における、コーディネーターの養成プログラムを実施します。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

滋賀県内の幼・小・中・高校・養護学校では、9年前より、アートNPOが美術館・芸術家と学校とを繋ぎながら、本物に触れる体験的連携授業を実施しています。毎年1万人近くの子どもたちが文化芸術体験し、600人もの文化ボランティアが現場のサポート（支援）に参加しています。

滋賀の連携授業の特徴は、学校のカリキュラムの中で実施されているという点で、全国的にもめずらしいといえます。こうした先駆的な活動を継承・発展させることを目的に、平成18年7月には、(財)滋賀県文化振興事業団内に子どもたちの文化芸術体験支援と文化ボランティアの育成機関として「しが文化芸術体験サポートセンター」が開設されました。これには、平成19年9月に知事に提出された提言「滋賀の文化振興のあり方」において、次世代の文化活動の充実や学校教育における文化活動の充実が重要施策の一つとして取り上げられたことも背景にあると考えられます。このことから「文化芸術」による次世代支援の仕組みづくりの重要性が関係者の間で共通認識されるようになりました。

また、平成19年9月には、「百人車座会議（アートNPOと行政との共催）」が開催されました。これは「文化芸術」と「教育」の融合の取り組みの具体的な事例を検証するとともに、「文化芸術」を通じた次世代育成のこれからの方向性等について意見交流する場として、もたれたのであるが、参加者から多くいただいた意見は、双方を繋ぐ「コーディネーター」の存在の重要性についてでした。その具体的な意見としては、次の通りです。

- ・ コーディネーターにゆらぎ・ぶれがないところが、人々を惹きつけ信頼感を得ている。
- ・ 子どもを真ん中に、コーディネーターには受容・辛抱が強く求められる。
- ・ 教師自身は日々のカリキュラムをこなすことで精一杯であることに加えて最近では、保護者の対応に忙殺されているのが現状であり、ここにつなぎ役としてのコーディネーターの出番がある。
- ・ コーディネーターを増やすなど、後押しできる仕組みが重要である。
- ・ 文化ボランティアの存在は非常に大きく、そのボランティアを束ねるコーディネーターが的確な指示と育成を行うことで、質の高い支援ができる。

こうしたことを背景に、平成20年4月から「しが次世代文化芸術推進委員会」が設立され、「しが文化芸術学習支援センター」が開設しました。そして、上述の意見を踏まえ、しが文化芸術学習支援センターの事業の1つとして、文化ボランティア・コーディネーターの研修・養成を実施することになりました。

これまでの連携授業で培った経験をもとに、コーディネーター育成の体系的なプログラムを構築することをめざしています。このために、専門家や関係者と現場での検討・研修を重ね、現場での即戦力に求められる能力・資質等を養成することで、次世代育成型コーディネーターの未来を見据えたモデルを今後とも提案したいと思います。

3① 養成されたコーディネーターの実際

本年の文化ボランティア・コーディネーター養成については、「美術教育・美術館を活用した子ども支援活動」という枠だけでなく、博物館、文化ホール、写真家、音楽家など、新しいジャンルの専門家の協力と、その専門性を活かした養成プログラムが実施しました。

対象となった受講者は、「文化芸術」をキーワードに、多様な講座型研修と体験的研修を受講できた。また、養成中のコーディネーターが中心となって具体的に企画・運営・実践をしたことで、個々にコーディネーターとしての自覚と成長が見られ、大変効果的な研修でした。

3② 実施した養成プログラムの問題点

しが文化芸術学習支援センター事業としては、年間通じて連携授業のニーズが高く、ほぼ連日学校現場で、文化ボランティア・コーディネーターと共に実践を重ねることで、支援現場での経験は深まりました。

しかし、養成プログラムの課題としてあることは、時間的に余裕がないことで、受講者が養成コーディネーターと個々の課題についてゆっくり話し合う機会が持てなく、細やかなアドバイスの機会がとれなかったことです。次年度はこの点について改善を図ります。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

しが文化芸術学習支援センター事業である「体験：連携授業」「育成：文化ボランティア」「研究：連携研究会」「発信：子ども文化芸術祭」「連携・協働：連携・協働事業」の5つの柱において、養成したコーディネーターがどのような役割を担うか、下記に示します。

1 「体験：連携授業」

連携授業における学校から依頼を受け、学校側、文化施設側、芸術家との授業の綿密な打ち合わせ、当日スタッフへの連絡調整、授業全体の運営・進行について、連携授業の始まりから終わりまでを見届ける。

2 「育成：文化ボランティア」

文化ボランティア（初心者）研修の企画、講師との調整、参加者の呼びかけ、運営全般の責任的立場。登録している文化ボランティアに対して、連携授業やセンターの事業への参加に向けて、情報発信をして、参加者をまとめる。現場での、文化ボランティアの世話も行う。

3 「発信：しが子ども文化芸術祭」

子ども文化芸術祭の企画内容の検討、関係者との打ち合わせの調整、当日までの準備、登録文化ボランティアの参加呼びかけ、スタッフの把握、手配、当日の運営、チラシの作成、広報活動など。

4 「研究」

連携研究会の開催日程調整、検討内容の検討、当日の準備、研究会当日の運営、研究会関係者の意見などの記録・まとめをする。

5 「連携・協働」

行政・企業・民間団体との新しい展開、具体的な連携事業企画案実施に向けての打合せに参加し、企画・運営・ボランティアの派遣に関わる。平成21年度10月の「しが子ども芸術祭」開催に向けて、本年度の研修の実績から、養成したコーディネーターが主体的に企画や運営に関わるようにする。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

- ・ 文化ボランティアの大学間交流の企画・実施のコーディネート
- ・ 企業による社会貢献事業での連携企画・実施のコーディネート
- ・ 文化ボランティアの活動のホームページの作成、活動事例集などの情報発信のコーディネート
- ・ 文化芸術を通じた地域のまちづくりと連携した企画・実施のコーディネート
- ・ センターの各事業に必要な事業予算の組み立て、基金の確保など、組織全体の運営に必要な経費も含めた運営全般についての補助的役割。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数：15名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数：6名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数：2名

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

平成20年5月31日 連携研究会（兼プログラム開発検討会）（養成講座開始前）

平成20年9月20日 連携研究会（兼プログラム開発検討会）（養成講座開始中）

全体会議としては 2回

各メンバーからは年間通じてアドバイスを受け検討を重ねた

検討会メンバー

- ・ 馬場輝代（しが文化芸術学習支援センター センター長（美術教育））＝全体の指導
- ・ 畑中章良（MIHO MUSEUM 美術館学芸員）＝美術館連携・研修プログラムの指導
- ・ 三浦弘子（県立陶芸の森 美術館学芸員）＝陶芸連携・研修プログラムの指導
- ・ 布谷知夫（県立琵琶湖博物館 博物館学芸員）＝博物館連携・研修プログラムの指導
- ・ 中川 大（びわ湖ホール 企画制作課）＝文化ホール連携プログラム・研修の指導
- ・ 山崎仁嗣（県立膳所高校、美術教師）＝写真家との研修・連携授業の指導
- ・ 門脇 宏（県民文化課 課長）＝研修会などの検証
- ・ 北島泰雄（県教育委員会生涯学習課 学校・地域コーディネーター担当）＝地域の力を学校に事業との連携の今後について指導
- ・ 津屋結唱子（しが文化芸術学習支援センター トータルコーディネーター）＝研修全体の運営、受講者の世話役

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

○養成講座前に開催した連携研究会（兼プログラム開発検討会）5月31日において、

- ・ 検討会メンバーの協力による、研修の内容の検討
- ・ 文化ホールを活用しての養成講座の実施
 - びわ湖ホールとの連携で、センター長の講義を受講後、ホール裏側体験と音楽鑑賞を平成20年6月29日、7月16日に開催
- ・ 教育関係者、文化ボランティア・コーディネーター対象の美術館研修会の内容検討
 - 夏の美術館研修会での研修内容に反映し、8月4日、5日に開催
- ・ 博物館と初の連携企画の提案・検討
 - 琵琶湖博物館におけるボランティアグループとの連携による「糸紡ぎと染め織」の授業を実施 そのための検討のための研修会を博物館で実施
- ・ 研修会・・・平成20年月27日、8月1日
- ・ 草津養護学校で連携授業実施・・・平成20年9月18日 参加者（養護学校）5名

○養成講座途中で開催した連携研究会（兼プログラム開発検討会）9月20日において、

- ・ 大学における「博物館機能論」の授業にて、文化施設、芸術家、学校関係者と学生文化ボランティアとの交流の場を提案 → 京都橘大学で平成20年11月8日に、学生120名対象に実施
- ・ 広く県民に文化芸術の次世代支援の大切さを伝えるために「しが子ども文化芸術祭」の開催において、文化施設、学校関係者、文化ボランティア・コーディネーターの実践事例発表の場、文化ボランティア交流会、車座会議、子どもの作品展などの企画内容の検討 → しが子ども文化芸術祭 平成21年1月8日～11日開催
- ・ 子どもの作品展 入場者600名
- ・ 事例報告会・車座会議 参加者70名、
- ・ 学生文化ボランティア交流会 参加者20名

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

文化ボランティア：

文化芸術を通じたボランティア活動に参加する人。だれでも気軽に参加し体験することから文化芸術の楽しみや関心を深める。(個人的参加の範囲)

文化ボランティア・コーディネーター：

文化芸術を通じた社会への発信のため(個人的参加から社会への貢献という視点)、その経験や専門性を活かして、だれでも気軽にボランティア活動に参加し、文化芸術の楽しみや関心を深める機会を、企画し養成をする人

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

文化ボランティア・コーディネーターの役割には、3つのキーワードがあります。

1 「共感」

事業実施において、関係者の「未来を担う文化の継承者である子どもたち」「未来を託す子どもたちのために」という、活動の軸となる「何のために」という思いの共感が大切です。さらに、コーディネーターは根本の理念について、周囲に常に発信し、ある時は個々に理念の確認をするメッセンジャー的役割があり、自分自身の思いを明確に持ち、どんな局面にたっても、指針面で揺らぎがないことが、最重要の資質です。

2 「共有」

現場の実践の中で、子どもたちの心に寄り添い、満足した表情と出逢う体験・感動の「共有」が大切です。連携授業などの活動現場では、同じ立場で子どもたちと向き合わない限り、「共有」をした同胞とは認められないという感覚がある。見学的な関わりの「現場」と、活動現場関係者の「現場」とでは、捉え方が本質的に違い、「共有」ができず、現場と行政間でズレが生じることになります。コーディネーターにとって、この真の「共有」の輪を広げることが重要な仕事です。

3 「進化」

昨日より今日、去年より今年と、連携活動において、特に授業プログラム作りについては、常に進歩向上を目指す意識が大切です。この「進化」のために、関係者はお互いの感性をとぎすませ、新しい情報交流をし、常にもっと良い内容を構築しようと工夫します。進化のための検討・意見交流によって、関係者の結束は深まります。

コーディネーターは、事業において「裏方の要」役であり「責任」ある立場です。また、その存在の必要性は、「客観的評価」によるもので、コーディネーターが不在でも完結する事業もあり、「必要と求められるコーディネーター」でなければならないと思います。

コーディネーターは常に、関係者の年間、次年度の事業への関心を持ち、その中から新しい素材を探し、自ら提案し、実現までを繋ぐ、大切な役割もあります。つまり、プロジェクトの過去から未来までをトータルで繋ぐ責任があります。コーディネーターは誰よりも「人との繋がり」の重要性を強く思い、その輪を明確に広げ、実践の形で具現化し、その成果が外部から評価されるよう、ひとつひとつの事業の始まりから終わりまで、細やかな配慮をし、最後まで責任を果たすことが大切です。

コーディネーターの評価はあくまで客観的なものでしか測れない厳しさもあります。新

しく関わっていく関係者、継続して関わっている関係者それぞれの立場に合わせて、多様に対応し、細やかなコーディネートによって、満足した実績が積み上がることが、プロジェクト全体の志気に関係します。そういった意味でコーディネーターは、事業の裏方的役割でありながら要的存在です。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

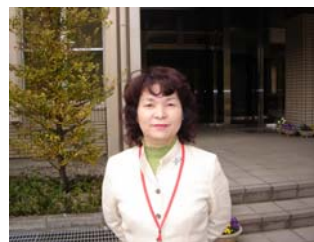
滋賀県では、年々学校現場、地域から本物に触れる文化芸術体験授業の依頼が増え、また美術系のプログラムだけでなく、音楽系、さらに多様なジャンルの要望へと広がっています。（次年度は、音楽・演劇など文化ホールを活用した支援のコーディネーター養成にも広げたプログラムを企画したいと思います。）

本年度4月～2月まで100回以上の連携授業支援をしています。受け入れきれなく、支援できないケースもでてきています。現在は1人のコーディネーターで、すべての依頼に対して対応し、打ち合わせから授業当日までの全体を把握し運営しています。現状では早急にコーディネーターが複数必要であり、受講者は4①で記載したように、子どもの文化芸術体験支援のために、学校現場を中心とした連携授業のコーディネーターとして活用するほか、4②で記載したように、今後の連携として企業、大学、まちづくりという新しい協働事業の企画・運営の仕掛けをする役割も期待でき、情報発信など、これまでの活動を広く伝える役割も期待できます。複数のコーディネーターが活躍することで、2②の課題に対して、専門性の高いアドバイスを受ける余裕も生まれ、個々の向上に繋がると思います。

- ・ プログラム開発検討会の継続（年間6回程度）
- ・ コーディネーター養成講座：専門家による講義型研修（年間3回程度）
- ・ 学校や地域での子ども体験プログラム実践現場での、プログラムや授業の組み立て、
- ・ センター登録文化ボランティア100名の世話などの、実践的コーディネーター研修（年間10回程度）
- ・ 年間の実践の成果発表の場としての「子ども文化芸術祭」の、企画運営の実践。

今回の事業のキーパーソン：

しが文化芸術学習支援センター長 馬場 輝代



キーパーソンからの一言

研修の質の高さが人を育てる

研修の質がボランティアを変える

しが文化芸術学習支援センター長 馬場 輝代

子どもたちに本物の文化芸術の学習を通して届けたいという願いから、学習支援センターは活動を続けています。その中で見えてきたことは、未来の文化の担い手の子どもたちを育てているために、いかに子どもたちに関わっていくかが大人の責務であるということです。

このことから学習支援者を育成する研修が必要となってきました。学習支援センターの前身のサポートセンターにおいてもボランティアを育てる取り組みをしてきていますが、今年度は、「どの子どもにも機会が与えられる学校現場での学習支援」という学習支援センターの中核から研修を組み立て積み重ねてきました。

研修のねらいは「人を育てる」ということです。

実際には学習の現場での学習支援を通して、具体的に学ぶこと、滋賀県のいろいろな施設で取り組まれている活動の実際を学ぶこと、ビデオを撮ったり編集したりする実際的な活動を通しての研修など、いま考えられるいろいろな方向を研修として実践してきました。約1年、研修を受けてきた受講生の仕事に深さが出てきたと同時に、人としての厚みを感じている今日この頃です。

これまで、連携授業の取り組みについては紆余曲折、試行錯誤が続いてきましたが、それを支え、発展させ続けてきたのは、まずはボランティア自身の柔らかい感性にあります。言い換えると、本物にふれ、感動する心を持っている人たちが集まったことであり、その輪が広がったということにあります。自分自身が感動し、喜びを持つことが活動の原動力になります。そして、同じ喜びを持つ人が集まり喜びを共有することが連帯感を生み出します。子どもを育てることを通して、大人が育ちあう研修を今後も続け、さらに深めていきたいと考えています。

全国でも、このような取り組みをされているところが多いと思いますが、それぞれが工夫や努力されていることに敬意を表するとともに、共有の輪を広げていきたいと願っています。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： 本年の文化ボランティア・コーディネーター養成については、「地域の文化・伝統」をキーワードに、美術教育・美術館を活用した子ども支援活動における、コーディネーターの養成プログラムを実施する。(次年度は、音楽・演劇など文化ホールを活用した支援のコーディネーター養成にも広げたプログラムを企画したいと思う) 養成するコーディネーター： 馬場 輝代 (前 滋賀県総合教育センター所長、しが文化芸術学習支援センター長 津屋 結唱子(子どもの美術教育をサポートする会代表、しが文化芸術学習支援センター トータルコーディネーター)			
受講対象者	1、しが文化芸術学習支援センター登録文化ボランティア(約 130 名)の中で、継続的活動歴 1 年以上の人 2、県内外文化施設ボランティアで、継続的活動歴 1 年以上の人 3、NPO 活動など、子ども・文化芸術分野のボランティア継続活動歴 1 年以上の人 1, 2, 3に該当する人で、コーディネーターを目指す人		
受講者の募集方法	1, 2, 3ともに、県内外に募集を呼びかける。 応募の用紙には、過去のボランティア活動歴・推薦者の欄などを設け、確かな実績と意欲的な人材を受け付け、コーディネーターとして養成する。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
①文化ボランティア・コーディネーターについてその必要性を知る	「コーディネーターの必要性を認識する」 文化ボランティア・コーディネーターの役割について学び、その存在の必要性を認識する機会とする。	第 1 回研修 講座型 「文化ボランティア・コーディネーターとは、その必要性」の講義に参加 講義:滋賀県総合教育センター前所長 馬場輝代 氏	7月上旬
②芸術家・文化施設それぞれの成り立ち・背景を知る	「文化施設の個性を知る」 県内文化施設の教育担当者と出会い、各施設によって仕組みに違いがあることを知る機会とする。	第 2 回研修 実践型 県内で教育普及プログラムに積極的に取り組んでいる文化施設の担当者から話を聞き、課題について意見交流する。(びわ湖ホール・近代美術館・しが県民芸術創造館など)	7月中旬
③文化施設と教育現場・文化ボランティアの3者の研修を通して、コーディネーターの役割を知る	「美術館での教育関係者向け研修から、実践関係者のニーズを知る」 毎年美術館で開催している、教育関係者向けの研修に参加し、文化芸術体験プログラムが、どのようにして組み立	第3回研修 実践型 夏の美術館研修にて教育関係者の研修に参加	8月4日(月)、5日(火)

	てられていくのか、文化施設の持つ本物という資源の重要性を認識する機会とする。		
④コーディネーターの実践の成果の場としての、連携授業の学校現場への組み込み方について知る	「学校教育現場側の視点を学ぶ」 文化ボランティア・コーディネーターとして、学校教育現場の体験的授業の組み込み方など背景を知る	第3回研修 講座型 講義:前 滋賀県総合教育センター所長 馬場輝代 氏	8月末日
⑤文化ボランティア・コーディネーターの実践の場として、連携授業のプログラムの組み立て方を知る	「文化施設側の視点を学ぶ研修」 文化ボランティア・コーディネーター実践的事例の検証 教育現場で実施している、連携授業プログラムの事例を学び、その中で、コーディネーターの役割・仕事を知る	第3回研修 実践型 美術館学芸員 MIHO MUSEUM 畑中学芸員からプログラム事例について教材に触れながら学ぶ 第4回研修 実践型 美術館学芸員 陶芸の森 三浦学芸員、陶芸家・宮本ルリ子氏から、 プログラム事例について教材に触れ、造形体験をしながら学ぶ。 場所:陶芸の森	9月上旬 9月中旬
⑥文化ボランティア・コーディネーターの企画した体験プログラムの実践と課題を知る	「企画案の提出・実践」 県内美術館2館で開催する、研修会に参加した後、美術館の作品を活かして、どのような体験プログラムが可能であるかについて考え、体験プログラムを企画する。 文化ボランティア・コーディネーターの実践として、連携授業のプログラムを企画したものの中から、実際に学校で実践できるか検討することで、現場での課題に気づく機会とする。	第3回・4回研修の経験を活かして、文化ボランティア・コーディネーターが学校現場で、文化施設(美術館など)の作品などを活用して、どのような体験プログラムが実現できるかについて、企画案を各自提出し、現場で実現可能か、実際の打ち合わせなどで提案してみる。 経験豊富な美術館学芸員・芸術家に内容の検討をお願いする。	10月～平成21年2月
⑦文化ボランティア・コーディネーターの実践現場の体験を重ねる	「連携授業現場でのコーディネーターの役割を知る」 文化ボランティア・コーディネーターの学校現場での実践	年間通じて、連携授業に10回以上参加し、学校現場との打ち合わせから実施までの一連の経過を、トータルコーディネータ	7月～平成21年2月

	体験を重ねることで、現場でどのような経験が必要かを学ぶ。	一の指導のもとで実地研修する。 経験豊富なコーディネーターと、毎回意見交流をし、課題に向けての解決について意見交流する。	
⑧文化ボランティア・コーディネーターとして、子ども文化芸術事業の企画に関わることで、コーディネートの自分の力を知る	次世代文化芸術支援事業の成果発表の場としての「子どもの文化芸術祭」の企画・運営に関わることで、自分自身のコーディネート力を知る機会となり、今後の学びの方向性について考える機会とする	次世代文化芸術支援事業の成果発表の場としての「子どもの文化芸術祭」の企画・運営に関わってもらい、実際に広く県民に紹介し、新しい相談依頼に対応できる経験を積む機会とする。芸術祭終了後に、全員で意見交流をし、今後の課題を見出す。	11月～12月下旬
⑨文化ボランティア・コーディネーターとして、実践に向けての課題を知る	「文化ボランティア・コーディネーターの役割と課題」について、関係者が一堂に会し、現場の実践から、自分自身の今後の学びのテーマを整理し、認識する機会とする。	第5回研修 フォーラム型 「文化ボランティア・コーディネーターとは、その必要性和課題」フォーラムにて発表。 プログラム開発検討会のメンバーに対して、参加者全員が本年の成果発表を行い、関係者と意見交流する。 コメンテーター 月刊ミュゼ編集長 山下治子氏 文化ボランティアも見学参加し、次年度のコーディネーター養成の人材も育てる機会とする。	2月上旬
⑩本年度の文化ボランティア・コーディネーター養成の取り組み、コーディネートのプロセスを記録化し広く発信する。	文化ボランティア・コーディネーターの役割、コーディネートのプロセス等を報告書としてまとめることで、「滋賀連携コーディネートモデル」として広く県内外に発信し、他の取り組みの参考としていただくことができる。	文化ボランティア・コーディネーターの役割、コーディネートのプロセス、実際のコーディネートの実践事例をまとめる。本年度の文化ボランティア・コーディネーター養成における、コーディネート研修の内容・実践事例等を報告書としてまとめる。	

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター：

本年の文化ボランティア・コーディネーター養成については、「地域の文化・伝統」をキーワードに、美術教育・美術館を活用した子ども支援活動における、コーディネーターの養成プログラムを実施する。(次年度は、音楽・演劇など文化ホールを活用した支援のコーディネーター養成にも広げたプログラムを企画したいと思う)

養成するコーディネーター：

馬場 輝代 (前 滋賀県総合教育センター所長、しが文化芸術学習支援センター長

津屋 結唱子(子どもの美術教育をサポートする会代表、しが文化芸術学習支援センター トータルコーディネーター)

受講対象者	1、しが文化芸術学習支援センター登録文化ボランティア(約130名)の中で、継続的活動歴1年以上の人 2、県内外文化施設ボランティアで、継続的活動歴1年以上の人 3、NPO活動など、子ども・文化芸術分野のボランティア継続活動歴1年以上の人 1, 2, 3に該当する人で、コーディネーターを目指す人			
受講者の募集方法	1, 2, 3ともに、県内外に募集を呼びかける。 応募の用紙には、過去のボランティア活動歴・推薦者の欄などを設け、確かな実績と意欲的な人材を受け付け、コーディネーターとして養成する。			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
①文化ボランティア・コーディネーターについてその必要性を知る	「コーディネーターの必要性を認識する」 文化ボランティア・コーディネーターの役割について学び、その存在の必要性を認識する機会とする。	第1回研修会 講義・体験型 「学校現場における文化芸術体験プログラムの具体例から学ぶ」 講師：滋賀県総合教育センター 前所長 馬場輝代氏 場所：滋賀会館 時間：10:00～11:30	日時：平成20年6月29日(日)午前 形式：講義型 回数：1回 参加人数：5名	小学校の連携授業の事例をもとに、授業の組み立てについて具体的な話だった。関係者が本気で取り組んでいる実践例を学び、参加者一同今後の活動に意欲がわいた。これまでは、実施した授業を全体的に紹介することが多かったのだが、今後は、このように、なぜ学習を通しての支援であるのか、そのねらいに迫る講義を、さらに深めて、実施する必要がある。
④コーディネーターの実践の成果の場としての、連携授業の学校現場への組み込み方について知る	「学校教育現場側の視点を学ぶ」 文化ボランティア・コーディネーターとして、学校教育現場の体験的授業の組み込み方など背景を知る			
②芸術家・文化施設それぞれの成り立ち・背景を知る	「文化施設の個性を知る」 県内文化施設の教育担当者との出会い、各施設によって仕組みに違いがあること	第2回研修会 「びわ湖ホール裏側体験と管弦楽コンサート鑑賞」 場所：びわ湖ホール 時間：12:30～15:30	日時：平成20年6月29日(日)午後 形式：鑑賞型 回数：1回 人数：8名	施設の裏側を見学や担当者の方とのお話、そしてコンサートの鑑賞を通して、施設の特色を知る良い機会となった。参加した受講者同士の交流も

	を知る機会とする。		見られた。内容が充実しており、半日だけでは物足りないという声もあった。今後、受講者が学びを深められるよう、研修の時間配分について考慮する必要がある。
	第3回研修会 鑑賞型 「びわ湖ホールで本格的オペラのゲネプロ鑑賞」 場所：びわ湖ホール 時間：13:30～17:00	日時：平成 20 年 7 月 16 日（水） 形式：鑑賞型 回数：1 回 人数：7 名	素晴らしい体験の場をいただき、お客という立場で、びわ湖ホールの特色を体感することができた。しかし、担当者と話す機会などがなかったため、仕組みの違いを知る機会となったとは言い難いため、この好機をいかに生かすかという計画段階でのねらいをきちんとつとに課題が残った。
	第7回研修会 講義・交流型 「文化施設・文化政策のキーパーソンとの出会い」 講師：びわ湖ホール、琵琶湖博物館、陶芸の森、MIHOMUSEUM、文化振興事業団、県民文化課、生涯学習課 時間：10:00～15:00	日時：平成 20 年 11 月 8 日（土） 形式：交流型 回数：1 回 人数：5 名	全体の報告会で、それぞれの文化施設、行政の話をもとめて少しずつ発表されたことによって、仕組みの違いについて知る機会となった。しかし、研修を受けた後に、受講者同士が意見を交わす場がなく、お互いの考えを共有することができなかった。受講者一人一人の意識を高めるためにも、思いを十分に引き出し、今後の活動につなげる十分な時間を確保する必要がある。
	第9回研修会 交流型 世界的写真家による連携授業を見学、その後意見交流会を行う。 講師：写真家 越田悟全	日時：平成 21 年 1 月 21 日（水） 形式：交流型 回数：1 回 人数：2 名	参加した受講者は、大変満足いく研修だという感想だった。しかし、高校での授業を通しての研修であるため、平日であったことや大学生は試験期間

		時間:9:30～14:00		中ということで、参加者が少なかった。授業設定を可能な限り早く設定し、連絡調整をきめ細やかにするという課題が残った。
		第10回研修会 講義型 「美術を楽しむ心に触れる」 講師:MIHO MUSEUM 学芸部長 片山寛明 時間:9:30～12:00 片山学芸部長がこれまでに研究された馬具について講義や、美術館でのボランティアの必要性についての現場の話聞き、今後の連携授業や体験プログラムの検討を行う。	日時:平成 21 年 1 月 25 日(日) 形式:講義型 回数:1 回 人数:3 名	大学生はテスト期間中であつたということや、講座内容が具体的にどのような現場と関係するのか明確でなかったということから、参加者が少なかった。しかし、人類の築いてきた「文化・芸術」のすばらしさにふれ、それを子供達に伝える役割にあるという自分自身の深まりに迫る内容であつた。そのため、今後もコーディネーターの資質を高める講座を企画する必要がある。
③文化施設と教育現場・文化ボランティアの3者の研修を通して、コーディネートの役割を知る	「美術館での教育関係者向け研修から、実践関係者のニーズを知る」 毎年美術館で開催している、教育関係者向けの研修に参加し、文化芸術体験プログラムが、どのようにして組み立てられていくのか、文化施設の持つ本物という資源の重要性を認識する機会とする。	第5回研修会 実践型 教育関係者を対象とした「夏季美術館研修」に参加 講師:上冷泉家第25代 当主 冷泉 為人 埼玉大学 准教授 寺田幸功 宇宙航空研究開発機構 研究員 馬場彰 時間:1 日目 9:00～17:00 2 日目:9:30～16:00	日時:平成 20 年 8 月 4 日(月)、8 月 5 日(火) 形式:体験型 回数:2 回 人数:1 日目 8 名、2 日目 7 名	体験する講座として、当日の運営スタッフとして関わった。参加した教育関係者や文化施設関係者が多く、直接話をする機会がもてなかった。また、打ち合わせ段階から参加しなかったという声もあり、今後は、研修会の打ち合わせから関わることや、当日の参加者の声を聞ける体制をつくることも考慮する必要がある。しかし、研修を支える土台としての気づきは多く、体験を通しての学びは意義深いものであった。
⑤文化ボランティア・コーディネーターの実	「文化施設側の視点を学ぶ研修」 文化ボランティア・コ	第8回研修会 連携授業プログラムにおける疑問点、課題を	日時:平成 20 年 12 月 27 日(日) 形式:体験型	実際に実施されている授業を受けることによって、これまでの疑問点などが

践の場として、連携授業のプログラムの組み立て方を知る	ーディネーター実践的事例の検証 教育現場で実施している、連携授業プログラムの事例を学び、その中で、コーディネーターの役割・仕事を知る	解決する 講師：陶芸家 橋功一郎、宮本ルリ子 陶芸の森 三浦学芸員 場所：滋賀県立陶芸の森 時間：10:00～15:00	回数：1 回 人数：8 名	改善され、大変意義のある研修であった。 問題点は、年末であったために参加したくても参加できないという声が多かった。現場での疑問や悩みなどに応える研修会を実施していく必要があることを痛感した。 課題であげている、「連携授業のプログラムの組み立てを知る」ところまでは、掘り下げることができなかった。研修実施の時期を考えることと共に、「連携プログラムを作る」という創造的な学びの充実をさらに図っていきたい。
⑥文化ボランティア・コーディネーターの企画した体験プログラムの実践と課題を知る	「企画案の提出・実践」 県内美術館 2 館で開催する、研修会に参加した後、美術館の作品を活かして、どのような体験プログラムが可能であるかについて考え、体験プログラムを企画する。 文化ボランティア・コーディネーターの実践として、連携授業のプログラムを企画したものの中から、実際に学校で実践できるか検討することで、現場での課題に気づく機会とする。	第4回研修会 実践型 「新しいプログラムの開発・実践」琵琶湖博物館と特別支援学校との初めての連携授業において、打ち合わせ段階からコーディネーターとして、実践的に学ぶ。 講師：琵琶湖博物館 中藤学芸員 1 回目：琵琶湖博物館にて、学芸員とボランティアと共に、学校からの要望に応えられるような教材の研究をする。 時間：13:00～15:00 2 回目：学校の教員と共に、博物館学芸員と文化ボランティアの 3 者で連携授業について打ち合わせをする。 時間：13:00～15:00	日時：平成 20 年 7 月 27 日（日）、8 月 1 日（金）、9 月 18 日（木） 形式：実践型 回数：3 回 人数：1 回目 3 名、2 回目 1 名、3 回目 3 名	実際に、連携授業を学芸員や学校の教員と共に組み立てていくことで、実践的であり、有意義な研修であったといえる。授業後は、学芸員も教員も大変満足しており、授業としても充実していた。 問題点としてあげるなら、連絡調整の段階で、受講者が現状の把握不足により、学芸員や先生に不安をよぎらせたことがあった。コーディネーターは、常に現状を把握し、的確な連絡調整をしなければならない。充実した研修ではあったが、企画者としての心構えに課題が残った。

	3回目:連携授業を実施する 時間:8:00~15:00		
	第6回研修会 実践型 「新しいプログラムの開発・実践」 講師:アフリカンパーカッション奏者 横沢正道、ダンサー 松葉みどり、阿部美奈子 1回目:教員対象とした「カホン制作研修会」 時間:13:00~16:00 2回目:教員対象とした「カホン演奏の研修会」 時間:9:30~12:30 3回目:パーカッション奏者とダンサーによる連携授業 時間:10:00~12:00 4回目:カホンを使った連携授業 時間:10:00~15:00	日時:平成20年8月11日(月)、8月21日(木)、11月17日平成21年2月10日(水) 形式:実践型 回数:4回 人数:1回目3名、2回目3名、3回目1名、4回目1名	教員と共に研修を重ね、授業を実施していく中で、教員との意思疎通が大変深くなったといえる。しかし、実際にコーディネーターとして活動する際には、全ての授業に対してこのような時間をかけた研修は行えないだろう。そのためには、今の研修の段階で、学校のニーズに応え実践に活かせるように様々な分野の学びを養成講座に取り入れていく必要がある。
	第11回研修会 「写真・映像の編集技法について学ぶ」 講師:MIHO MUSEUM 映像部 宮島氏 1回目:編集について学び、実際に撮影する 時間:13:00~16:00 2回目:撮影した映像を編集し、仕上げる 時間:10:00~16:00 研修を通じて、どのような連携授業や体験プログラムが可能かを検討する。	日時:平成21年1月25日(日)、2月8日(日) 形式:体験型 回数:2回 人数:1回目3名、2回目3名	今回は、受講者が主体的に、講師と連絡調整、研修内容の検討など企画・実施を行った。研修内容も参加者一同満足のいく内容となり、今後の体験プログラムの企画案も出た。来年度、今回の研修を生かし、来年度実施できるよう検討していきたい。
	これまで行われていた連携授業について、学校の要望に応じて、受	期間:平成20年6月~12月 人数:2名	受講者が発案し、教育関係者や講師などから、指導を受け、実施に至っ

		講者が導入部分を実施。学芸員や学校関係者による指導を受けて、パワーポイントを使って、生徒達に説明する。		た。授業の実施回数を重ねるごとに、課題がみつき、大変意義のある実践である。しかし、この学びなどを他の受講者に伝え、共有することができていないことをふまえて、さらに学びを広げる努力や工夫が必要である。
⑦文化ボランティア・コーディネーターの実践現場の体験を重ねる	「連携授業現場でのコーディネーターの役割を知る」 文化ボランティア・コーディネーターの学校現場での実践体験を重ねることで、現場でどのような経験が必要かを学ぶ。	年間を通じて、連携授業に参加し、学校現場との打ち合わせから実施までの一連の経過を、トータルコーディネーターの指導の元で実地研修する。	期間：平成 20 年 7 月～平成 21 年 2 月	仕事や大学との兼ね合いもあるなかで、文化ボランティア・コーディネーターそれぞれが熱意をもって連携授業で活躍した。しかし、ボランティアであるために、それぞれの都合に合わせて参加するため、一つの連携授業の打ち合わせから授業実施まで一連の経過を研修するということがあり出来ていなかった。一貫性をもって参加する手だてを工夫したい。
⑧文化ボランティア・コーディネーターとして、子ども文化芸術事業の企画に関わることで、コーディネートの自分の力を知る	次世代文化芸術支援事業の成果発表の場としての「子ども文化芸術祭」の企画・運営に関わることで、自分自身のコーディネート力を知る機会となり、今後の学びの方向性について考える機会とする	「しが子ども文化芸術祭」の企画・運営を通して、企業や文化施設担当者との打ち合わせ。当日のスタッフ調整や配置など全てに配慮し、県民に発信する術や協働におけるコーディネート力について、実践的に学ぶ。	しが子ども文化芸術祭 開催日時：平成 21 年 1 月 8 日(木)～11 日(日) 打ち合わせ等の期間：平成 20 年 11 月～1 月 形式：実践型	しが子ども文化芸術祭という大きなプロジェクトに関わることで、受講者自身のコーディネーターとしての力不足を知ることになった。結果として、トータルコーディネーターに頼る場面も多かった。また、関わる受講者が数名しかいなかったため、負担が大きいと感じる点もあった。「現実に学ぶ」という視点で、よりたくましい対応できるコーディネーターの育成を工夫したい。
⑨文化ボランティア・コーディネーター	「文化ボランティア・コーディネーターの役	県内文化施設・教育関係者による「事例報告	日時：平成 21 年 1 月 9 日(土)、2 月 2	養成講座をまとめ、実践を報告することはできた

ネーターとして、実践に向けての課題を知る	割と課題」について、関係者が一堂に会し、現場の実践から、自分自身の今後の学びのテーマを整理し、認識する機会とする。	会」「車座会議」や、琵琶湖博物館で開催された国内の文化施設が集まる研修会にて、文化ボランティア・コーディネーターの実践報告をする。	日(月) 形式:事例報告 回数:3回 人数(発表者):2名	が、実践報告だけに終わっている部分が多く、文化ボランティア・コーディネーターの役割や必要性について、さらに、言及する必要がある。具体的に、養成講座がどう意義あるのか、客観的に分析し報告することが課題である。
⑩本年度の文化ボランティア・コーディネーター養成の取り組み、コーディネートのプロセスを記録化し広く発信する。	文化ボランティア・コーディネーターの役割、コーディネートのプロセス等を報告書としてまとめることで、「滋賀連携コーディネートモデル」として広く県内外に発信し、他の取り組みの参考としていただくことができる。	今年度の文化ボランティア・コーディネーター養成講座をまとめて、事例報告書を作成する。	1月下旬～編集開始 2月下旬に完成	今回は、時間もなかったため、1人が中心となって編集作業を行った。実際に、これだけの量なら1人で行う方が楽ではあるが、今後の人材育成にはならない。今後は、経験者と初心者と数名で制作することも必要だろう。また、今回は報告書での発信だが、現場からは「インターネット」を使った発信(ブログ開設、HPの強化)を求める声が多く、発信手段について今後検討する必要がある。

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター： 「地域の文化・伝統」をキーワードに、美術教育・博物館・美術館・文化ホールを活用した子ども支援活動における、コーディネーター養成プログラムを実施する。学校現場を中心とした連携授業でのコーディネーターとして活動するほかに、企業や大学という新しい協働事業の企画・運営のしかけをする役割や、情報発信などにおいて広く活動を広げる役割を持つことが出来るコーディネーターを養成する。			
受講条件 (受講対象者)	1、しが文化芸術学習支援センター登録文化ボランティア(約 100 名)の中で、継続的活動歴 1 年以上の人 2、県内外文化施設ボランティアで、継続的活動歴 1 年以上の人 3、NPO 活動など、子ども・文化芸術分野のボランティア継続活動歴 1 年以上の人 1, 2, 3に該当する人で、コーディネーターを目指す人		
受講者の募集方法	1, 2, 3ともに、県内外に募集を呼びかける。 応募の用紙には、過去のボランティア活動歴・推薦者の欄などを設け、確かな実績と意欲的な人材を受け付け、コーディネーターとして養成する。		
課題	目的	問題点を踏まえた改善策(実施内容)	備考(時期・形式・回数)
文化ボランティア・コーディネーターの実践の場を具体的に学び、必要性を知る。	文化ボランティア・コーディネーターの活動実践の背景や具体的な活動内容を知ること、現場でどのように必要とされているのかを知り、今後の活動意欲を高める。	講座型 研修 講師:しが文化芸術学習支援センター 馬場輝代、トータルコーディネーター 津屋結唱子 前年度の実践やその背景など具体的な活動の内容を知る。また受講者同士で、意見交流を行う。	平成 21 年6月上旬
コーディネーターの実践の場である連携授業において、学校現場での組み立てについて知る。	「学校教育側の視点を学ぶ」学校教育現場の体験的授業の組み立て方などを知り、その後の実践に活かせるようにする。	講座型 研修 講師:しが文化芸術学習支援センター 馬場輝代、連携授業を実施した学校関係者具体的な実践例をもとに、なぜ学習を通じた支援であるのかについて、深め、それぞれの意識を高める研修	平成 21 年6月下旬
文化施設のそれぞれの成り立ち、背景を知る。	「文化施設の個性を知る」県内施設の見学、担当者との出会いによって、各施設によって仕組みに違いがあることや、その後の研修や	実践型 研修 県内で教育普及プログラムに積極的に取り組んでいる文化施設の見学や担当者との意見交流をする。(びわ湖ホール、近代美術館、しが県民芸術創造館、	平成 21 年7月～

	連携授業のプログラム開発の参考にする。	MIHO MUSEUM、陶芸の森など)	
実践現場の体験を重ね、実践力を養う	「連携授業現場における体験を重ね、コーディネーターの役割を知る」	実践型 研修 年間を通じて、連携授業に参加する。また、打ち合わせの日程も連絡し、学校現場との打ち合わせから実践までの一連の経過を養成コーディネーターの指導の元で実地研修する。	平成 21 年 6 月～平成 21 年 2 月
養成コーディネーターと受講者の個々の課題を解決する	実践現場の体験や研修を通して、受講者が抱く疑問点や課題などに対して、養成コーディネーターと参加する受講者との課題や提案など意志の共有させる	養成コーディネーターと受講者同士で、現場での実践や研修を受講する中での疑問点や課題について意見交流をする	平成 21 年 6 月～ 月 1 回程度(研修の後などに実施)
コーディネーターの資質を高める	芸術家や博物館・美術館学芸員、文化ホール関係者を講師に招き、コーディネーターの資質を高め、コーディネーター能力を育成する。	講座型・実践型 研修 講師:文化ホール関係者、博物館・美術館学芸員、芸術家 実際に連携授業を実施している方にはその背景や組み立てる際の心構えなどを知る。また、コーディネーターの資質を高めるため、第一線で活躍する専門家による研修など行う。	平成 21 年 8 月～ 4 回(隔月 1 回)程度
文化施設と教育現場、文化ボランティアの 3 者の研修を通して、コーディネーターの役割を知る	「教育関係者向けの美術館研修から、実践現場のニーズを知る」毎年、美術館で実施している教育関係者向けの研修に参加し、文化芸術体験プログラムの背景を知り、文化施設の本物という資源の重要性を認識する	実践型 研修 教育関係者を対象とした「夏の美術館研修」(県内美術館 2 館を会場に開催)に打ち合わせ段階から参加する。 会場:MIHO MUSEUM、県立陶芸の森	平成 21 年 8 月(2 日間)
新しい協働事業の開発、企画や運営におけるコーディネーターの役割を知る	養成コーディネーターの元で、実際に企業や大学との協働事業の実践的なコーディネーター力を育てる。	実践型 研修 新しい協働事業において、事業の企画や運営まで全てに関わり、養成コーディネーターの指導の元、実践力を育てる研修を行う。	平成 21 年 7 月～

体験プログラムを企画し、実践における課題を知る	「企画案の提出・実践」 これまでに参加した研修の学びを活かし、どのような体験プログラムが可能か、または実施したいかを企画する。その企画案を実施できるかどうかを検討する中で、現場での課題に気付く機会とする。	これまでの研修の学びを活かし、企画案を提出し、実践可能かを検討する。また、可能なものに対しては、主体的に実践に向けて活動する。 講師・指導：博物館・美術館学芸員、文化ホール関係者、養成コーディネーター	平成 21 年 9 月～
子ども文化芸術祭の企画・運営に関わることで、自身の力を知る	次世代文化芸術支援事業の成果発表の場として「しが子ども文化芸術祭」の企画・運営に関わり、自分自身のコーディネート能力を実感し、今後の課題や目標を考える機会とする	「しが子ども文化芸術祭」の企画・運営を通して、企業や文化施設担当者と打ち合わせ、当日スタッフ調整や配置など全ての企画に参画する。県民に発信する術や協働におけるコーディネート力を学ぶ。	平成 21 年6月～ 子ども文化芸術祭は、平成 21 年 10 月に開催
講座型研修や体験型研修を受け、実践に向けての課題を知る	「文化ボランティア・コーディネーターの役割と課題」関係者が一同に集まり、現場の実践から見えてきた課題や疑問点などを話し合い、共有し、今後の学びや目標を認識する	フォーラム型 フォーラム形式で、コメンテーターを招き、本年度の取り組みに付いて、受講者がそれぞれにまとめ、成果と課題について発表する。検討会メンバーや関係者と意見交流をする。 コメンテーター：未定	平成 22 年2月
本年度の養成座をまとめて、発信する	本年度の養成講座のプロセスや実践を記録し、まとめて、分析し、広く県内外に発信する。	活動を広く発信するために、定期的に HP やブログに情報を掲載し、年度末には報告書を制作する。	平成 22 年2月下旬

団体名：栗東芸術文化会館さくら
代表者：館長 八木和敏
所在地：滋賀県栗東市縄二丁目1番28号
問合せ先：Tel 077-551-1455
E-mail m.matsuzaki@sakira-ritto.net



1① 団体紹介

栗東芸術文化会館さきは、栗東市が設置し、平成11年10月に開館「まちづくり、ひとづくりの拠点」「芸術文化情報の受発信の拠点」「交流の拠点」の3つ基本理念を掲げ、様々な文化事業を行っています。基本軸としてある「ひとづくり」、人材の育成においては、市民参画型の事業として創造ミュージカル、「さくら」ジュニアオーケストラアカデミー、コミュニティアート・プロジェクトとして、ふれあい夏まつりなどのフェスティバル事業を実施し地域から人が育ち、人が支えるホールを目指します。

平成18年4月より、指定管理者制度の導入により、株式会社ジェイアール西日本総合ビルサービスが管理運営を行っています。

1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団体職員数：専任職員2名、兼任職員2名
- ・ 養成講座担当職員数：専任職員1名、兼任職員1名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

「さくら」には、現在81名の「さくら」ボランティアコミュニティ（通称ボラコミ、以下ボラコミ）登録者があり、ホールのフェスティバル事業などに参画していただいています。しかし参加者の多くは、「手伝いが出来ます。何か仕事がありますか？」と言う手放しな状態であり、ホール職員が中心となってお膳立てをしながら進めている現状があります。今後文化芸術を通じて活動や交流を進める中、地域の特性、事業への積極的な提案、状況の把握や柔軟な対応が出来る人材が求められて来ます。「さくら」ボラコミの中から本支援事業を通じて、ミッションを感じてもらい積極的に活動に参加し、リーダー的に活動できる人材の育成を目指します。人と人、アーティストとグループ、地域と地域、行政の機関と活動家、地域へとつなぐ役割としての文化ボランティア・コーディネーターを養成します。

ボランティア活動の拠点として栗東芸術文化会館さきがその役割を担い、文化芸術を通じて協働し、楽しむことを提案できる人また、リーダーシップを発揮し人々をまとめ、活動の意義を見出し導くことが出来る人材を育てます。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

地域（栗東市内でも）により「さきら」との距離感が違い、文化事業などの享受に不均衡があります。文化事業を行っている「さきら」になかなか足を運び難い地域、「さきら」から遠い地域（駅周辺以外）に対して文化事業の普及や内容の充実について不足の声が多く、地域ボランティア・コーディネーターの活動を通じてその格差の是正を図る必要があります。

文化事業参加ボランティアの資質の向上

地域住民の地域貢献への意識の高まりを背景に、一般の方でも文化ボランティアとして参加したい人は多いが、何をして良いのか判らないまま参加することが多く、リーダーの育成が実質的に必要と考えます。また、「さきら」ボラコミのメンバーが主軸的に動く為に、活動意識や具体的運営を身につける必要があります。

3① 養成されたコーディネーターの実際

○ 成果

「さきら」に関わるボランティア（ボラコミ）の意識改革は出来たと考えます。単なるボランティア、或いは文化ボランティアとしてこれまで「さきら」の事業に参加していたものが、今回の養成講座などを通じて僅かでもコーディネーターとしてのあり方、具体的な方法など実践を通じて学ぶことが出来ました。コーディネーターとしての意識を持ち、自分の立ち位置を認識できる人材の養成に繋がりました。また、地域を越えてのボランティアの交流からホール以外の場所でも人の行き来が生まれました。

○ 未達成

経験を積む実践事業などにも参加したが、参加者が具体的に自分の地域に戻っての活動が見え難いです。また、レポートやアンケートなど参加者の意識確認が不十分です。

ほか、コーディネーターが自立的な活動が出来るよう、ホール側の事業準備の不足をしています。

3② 実施した養成プログラムの問題点

支援事業1年目の今年、一言にボランティアと言ってもさまざまな思いや意識レベルがあることに今回の事業を通じて気付かされました。只々参加するボランティア、目的をきちんと持って参加するボランティア、また、ホールに係わり舞台芸術に係わりたいボランティア、もっと広域に地域の文化を産業として捉え発信して行きたいボランティア、多様なボランティア活動の場面で各ニーズに対してコーディネーター養成のプログラム提案が応えられていたのかは疑問です。しかし、まだまだ始まったばかりです。「さきら」のボラコミはどうあるべきか。文化ボランティア・コーディネーターと言う目標を掲げ、ホール事業や舞台芸術、文化に係わりながら意識を育んでもらうのが課題です。

事業を通じて地元地域だけ狭い視点、考えから、広域に視野を広げることが出来るのか。様々な活動スタイルを学び、理解することで自分にできることを見付け、地域に活躍の場を見出して行ける力を付けることが重要です。

今後は、長期的に「さきら」が文化ボランティアの活動拠点として、コーディネーターの活動を確りサポートし、互助的に地域やアーティスト、ジャンルを超えた人材を繋ぎ地域の活性化に貢献できる事業を組み立て、そのサポート体制、環境を整え積み重ねることが大切です。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

- ・ 「さきら」が実施する事業、コミュニティアート・プログラムの中で受講者の参加、活躍の場をつくりコーディネート力を更に付ける場面を設定する。
- ・ ボランティアの力を「さきら」の事業運営に積極的に活かし、協働で行うことにより地域文化の発信、活力の発揮、再発見。
- ・ 今回実施の地域に出かける事業「御旅所プロジェクト」を引続き実施し、受講者発案のイベントや地域貢献活動を側面的にサポートして行く。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

- ・ 地域活動の場（地域のイベント、学校教育に関わる育成事業、地域企業、行政との連携事業など）において、中心的な役割を果たし文化活動の活性化を図る。
- ・ コーディネーターとして「さきら」の自主事業などへも企画段階で参画し、地域団体との連携や人材提案など企画提案なども積極的に行う場づくり。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数：4～5名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数：4～5名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数：4～5名

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

10月17日（養成プログラム実施中）

12月23日（冬の「さきら」イベント「あかりの遊び庭」終了後）計2回開催

検討会メンバー：

小泉知子（造形アーティスト）

杉原秀樹（造形アーティスト）

根木山恒平（りっとーあーとをつくろう隊）

浦谷誠人（滋賀がいいもん市実行委員会代表）

小暮宣雄（橘大学文化政策学科教授） ホール担当2名

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

検討委員会からの意見により、受講者が、意識を持って活動に望めるよう役割分担の明確化や、意見収集から発展形への進め方など講師と受講者が実践（実習）を通じて地域の方々と交流を深めることができるよう工夫しました。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか

地域性（地域の特性や伝統文化、問題点など）や舞台芸術など文化芸術を広く理解し、総合的に市民のボランティアな活動を支援し、その実際の活動において地域情報発信や新たな創造（イベント・産業など）へ繋げ広げる人材、そして、参加する文化ボランティアの力が発揮できるよう、市民と市民または、市民と行政、組織やアーティストを繋ぎ、組織内での調整を行うことが出来る人材を文化ボランティア・コーディネーターと考えます。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

地域貢献への意欲を持ち、文化の定義としてある福祉、教育、まちづくり、文化・芸術、環境、人権、国際交流など広く総合的に理解し、様々な実経験を持ちリーダーシップを発揮しながら関係者をまとめる資質と強い意志が必要と考えます。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

栗東市では、市民活力の向上と文化振興の実践が必要とされ、10周年を迎える栗東芸術文化会館さきらを中心に文化事業を多く行っているが、ボランティアの活動拠点として誰もが気軽にに関わり興味を持ち実践的に参加してもらうことが出来る環境を作ることが第1にあると考えます。更に、養成講座や実習を通じボランティア・コーディネーターが育ち、同じ意識を持った人材が、積極的にネットワークを広げ相互協力を深め、協調して活動し地域全体の活力を創生する地域づくり、まちづくりを自発的に推進することを目指します。

来年度以降も「さきら」として継続的に講座、実習を開催する予定だが、これまでのホールが在り文化ボランティアがあるイメージから、文化ボランティアと共にホールが在り、仮に指定管理者が変わり運営状況が変化したとしても、文化ボランティア・コーディネーターが各々の特色を活かしながら、中心となって地域に根ざした活動を自主運営出来るよう養成します。

今回の事業のキーパーソン：

根木山恒平（りっとーあーとをつくろう隊）

キーパーソンからの一言

「さきら」ボラコミの活動させていただいていますが、活動を通じて「顔」の見えるコミュニティを少しずつ、地域で広げてゆきながら、昔からある地域の伝統芸能や恒例イベントへの参加やそれを基にした新しいことへの挑戦など、地域に元気をもたらすお手伝いが出来ればと思っています。

今回は、1.25の養成講座の中でボランティア・コーディネーターの役割について自分も含め、皆で考える良い機会をいただきました。目的意識を持って活動に今後参加してくれるボランティアさんが増えることを願っています。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： 地域を理解しそのニーズに合った芸術文化事業の提案が出来る人材の育成をする。 当プログラムを通じてボランティア活動の主旨、意図を理解し、総合的に状況を把握し地域の人たちやアーティストをリーダーとしてまとめながら活動を協調的に実践できる人材を育成する。			
受講対象者	文化ボランティア活動を継続的にを行っている者。また、活動に興味を持ち積極的に参加意志をもつアーティスト及び、「やってみよう」という意識をもつ人材を一人でも多く作ることを目的とするため広く一般からも公募する。また、近隣の公共ホール関係者なども対象とする。		
受講者の募集方法	案内を当会館のHPに掲載、当団体に登録しているボランティア(69名)へのメール周知。当団体情報誌及び、県内情報誌などへの募集広告の掲載。新聞関連への広告掲載。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
プロ① 基本的な考え方を学ぶ	ボランティアの定義や その他団体の事例などを聞きながら活動の方向性を見極める。	文化ボランティア養成講座の開催。 小暮氏(橘大学教授)	講義 3 時間 × 1 回 6 月中旬開催
プロ② 自分の活動との比較検討	実践例を多く聞くこと によって地域差や方法論の違いを確認する。	ボランティア先進館と考える新潟・小出郷文化会館と石川・能登演劇堂より、館長やボランティア担当者を招いて、現状報告を交えた「地域コーディネーターの必要性とあり方について」講義とディスカッション。	講義と座談会 2 時間 × 2 回 7 月と 10 月開催
プロ③ 県や市の文化施策(考え)と地域のニーズ(現実)の比較検討による現状把握	県や市の文化施策(考え)と地域のニーズ(現実)の比較検討による現状把握	滋賀県・栗東市の文化担当者を招き、国・県の文化施策文化行政担当者と文化行政の課題について討論を行う。助成の種類や申請方法について講習を受ける。	講義 2 時間 と討論 × 1 回 11 月実施
プロ④ 企画力と実践力をつける	実践を通じてリーダーシップを発揮し、コーディネーターとしての自覚の開発。	コーディネーターの指導の下、養成講座受講者らが企画段階から参加し、屋外での地域イベントに参画する。 ①さくらふれあい夏まつり 2008 お化け屋敷の中で、コーディネーター養成者が構想立案した一部にかかる準備と運営の実践を行う。サポートスタッフの仕切り全般(装置作り、衣装作り、備品調達、当日運営、誘導体制、管理、危機管理などをコーディネート) ②あかりの遊び庭 「あかりで遊ぶ」というテーマから、コーディネーター養成者が、独創的な企画へと発展させる内容 コーディネーター(ボランティアリーダー)としてのノウハウの習得(企画の立案、安全性、収益性、施工準備、集客、運営、分析、評価など様々な観点を実践)	①実習(5 時間) × 5 回 (準備) 5 月～6 月、イベント開催 7 月 ②実習(5 時間) × 5 回 9 月～11 月、イベント開催 12 月

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター： 文化ボランティア・コーディネーターの主旨、立場を理解し、総合的に地域性やそのニーズと状況を把握して、地域の人たちやアーティストをまとめながら文化振興活動を協調的に提案、実践ができる人材を育成する。				
受講対象者	地域で文化ボランティア活動を行っている人。また、活動に興味を持ち積極的に参加意志をもつ一般、アーティスト。近隣の公共ホール関係者なども対象とした。			
受講者の募集方法	市内外の公共施設への案内、周知。当団体に登録しているボランティア(69名)へのメール周知。 当団体情報誌及び、県内情報誌などへの募集広告の掲載。ボランティア活動ブログによる発信。			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
プロ① 基本的な考え方を学ぶ	ボランティアの定義やその他の団体の事例などを聞きながら活動の方向性を見極める	○文化ボランティア・コーディネーター養成講座 <特別編Ⅰ> 「みんなで話そう文化ボランティア・コーディネーター」ってなににする？」座学により文化ボランティア・コーディネーターについて、ダンスグループ主催の現状と問題点など学びました。 講師：五島(ごしま)智子(ともこ)(Dance & People代表)／根木山(ねぎやま)恒(こう)平(へい)(りっとーあーとをつくろう隊)	H21年1月25日(日) 16:00～18:30 講義1回	ボラコミにとって系統立った講義は珍しく新しく発見があった。1度きりで終わらず、継続的に実施が必要
プロ② 自分の活動との比較検討	小出郷の実践例を聞くことによって地域差や方法論の違いを確認する。討論会によりさきらの現状について討論する	○文化ボランティア・コーディネーター養成講座 <特別編Ⅱ> 講座／「地域における文化ホールとボランティアの係わり」 18:30～19:30 講師：桜井俊幸(新潟県：小出郷文化会館館長) 公開討論／「求められる文化ボランティアのあり方とコーディネーターの役割について」 パネラー：小暮宣雄(京都橘大学教授) 桜井俊幸・吉田 元(小出郷文化会館事業担当)	H21年1月30日(金) 18:30～21:30 講義・討論会1回	時間の制約があり事例紹介と現状報告が多くなり本当の意味でのセッションになっていなかった
プロ③ 地域のこと	実践を通じて現場	○さくら御旅所プロジェクト 2008 「ダンボールでおうちをつくろう」<葉山	H20年 9月14日(日)実習	地元では大変好評であったが、

現状を知り 地域と交流 する	の対応力 や調整力 を養う。ダン ボール アートの 面白さと 可能性を ワークショ ップや実 践を通じ てノウハ ウを学 び、アレン ジ力の向 上	編＞ 造形アーティストの小泉知子さんを迎 え指導していただきながら、地域のコミ ュニティセンターが中心に行うふれあ いまつりに参加。ボランティアが打合 せを経て、ダンボールを大量に持ち込 み、子どもたちとダンボールを使ってお うちを作ったり、仕掛けのトンネルを作 ったり、実習により学んだノウハウを実 践しながら地域との交流を図るもの。	18:00～20:00 9月27日(土)実習 18:00～20:00 10月17日(金)講義 19:30～21:30 10月25日(土)実習 13:00～15:00 10月26日(日)実習(本 番) 10:00～14:00	まだこちらから出 向いている感が 強く地元の方に もスタッフとして 参加していただく ことが必要。
プロ③ 地域のこと 現状を知り 地域と交流 する	地域事業 に積極的 に参加交 流し、実 習での成 果を現場 で実践確 認する。	○さくら御旅所プロジェクト 2008 「ダンボールでおうちをつくろう」 ＜葉山東編＞ 地域のコミュニティセンターが中心に 行うふれあいまつりに参加。葉山編 と同じくふれあいまつりの一部に参加 し盛り上げに貢献	H20 年 11月8日(土)実習 13:00～15:00 11月9日(日)実習(本 番) 10:00～14:00 12月6日(土)実習 13:00～17:00 12月13日(土)実習 13:00～17:00	当日のみ対応で なく現場に足を 運び交流を深め ることが必要
プロ③ 地域のこと 現状を知り 地域と交流 する	何も無い 空間に舞 台を作り 発表公演 をする。舞 台づくりの 基礎的な づくりを学 び、その 制作段取 りなども経 験し学ぶ	○さくら御旅所プロジェクト 2008 ショートミュージカル「あらしのよるに」 の実施 地域のボランティア団体と交流しながら 進めてゆくプログラム。 地元劇団の演出家、小関真理子の指 導の下、地域の子どもたちと元 OSK (大阪松竹歌劇団) トップ女優の洋あおいさんとのコラボ 公演を実施。公演実施への稽古手順 や舞台についての 段取り、組み立てを一緒に実践してゆ きます。当日は、お客様の案内、照明 や舞台のスタッフもボランティアが参 加。手作りの舞台を体験するもの	H20 年 10月24日(金)実習 16:00～18:00 11月3日(月祝)実習 13:00～17:00 11月14日(金)講義 16:00～18:00 11月22日(土)実習 13:00～17:00 11月28日(金)実習 18:00～20:00 11月29日(土)実習 13:00～17:00 11月30日(日)実習(本 番) 10:00～14:00	参加ボランティア だけでの公演は まだ難しいが、 継続実施が重要

プロ④ 企画力と実践力をつける	実践を通じてリーダーシップを発揮し、コーディネーターとしての自覚の開発	コーディネーターの指導の下、養成講座受講者らが企画段階から参加し、ホールイベントに参画する ①さくらふれあい夏まつり 2008 お化け屋敷の中で、コーディネーター養成者が構想立案した一部にかかる準備と運営の実践を行う。サポートスタッフの仕切り全般(装置作り、衣装作り、備品調達、当日運営、誘導体制、管理、危機管理などをコーディネート) ②あかりの遊び庭 「あかりで遊ぶ」というテーマから、コーディネーター養成者が、独創的な企画へと発展させる内容 コーディネーター(ボランティアリーダー)としてのノウハウの習得(企画の立案、安全性、収益性、施工準備、集客、運営、分析、評価など様々な観点を実践)	H20 年 ①7 月 27 日(日) ②12 月 21 日(日)	各ポジションでの仕切りが精一杯で、企画段階からの参画や予算面などの把握も課題。 コーディネーター育成のためだけに特化したフェスティバルなどの大きい事業は立ち上げ難く既存の事業を実践の場として利用することが重要
--------------------	-------------------------------------	--	--	--

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター： 地域の特性や問題点、その歴史やニーズに合った芸術文化に関する事業や催しの提案が出来る人材の育成をする。 併せて、地域で総合的に俯瞰的に状況を把握し、地域の人たちやアーティストをまとめながら活動を協調的に実践できる人材。また、文化NPOなどの新たな活動を創生する活力ある人材を育成する。			
受講条件 (受講対象者)	文化ボランティア活動に興味を持ち積極的に参加意志をもつ方で、継続的に行っている者。 広く一般からも公募する。また、近隣の公共ホール関係者なども対象とする。		
受講者の募集方法	ホールのホームページ、チラシなどによる募集、ブログ等		
課題	目的	問題点を踏まえた改善策(実施内容)	備考(時期・形式・回数)
入門編	ボランティア・コーディネーターの活動を基礎的に学ぶ 講座・実習	有識者・実践者による講義やワークショップ	8～10月頃 講座2回
ステップアップ編	ボランティア・コーディネーター養成講座	入門編をさらにレベルアップした異分野の有識者や先進の方々に話を聞き、セッションも行う	10～12月頃 講座2回
企画立案編	ニーズの分析と自分のノウハウを合わせての想定力、イメージ作りの力を養う	コンサルなどのプロに話を聞く場面や、ホール関係者や、アーティストとの話によりモチーフを企画化してみるカリキュラム	10～12月頃 講座1回 自習3回
実習実践編	現場のニーズに即応しながら調整力を養う	ボランティア・コーディネーター育成に特化した事業「さくら御旅所プロジェクト」の実践やホール事業に核的に係わって行く。コーディネーター自身の企画調整による事業を実践して行く	通年(未定) 実習15回
検証編	何が出来ていて何が問題なのかを検証し次の事業運営や改善に繋げる	自分の行動についての検証、アドバイスを受けることにより自己改善をする	2月～3月頃 講座2回

団体名：はしかけグループ「びわたん」
代表者：北村美香
所在地：滋賀県草津市下物町 滋賀県立琵琶湖博物館
問合せ先：077-568-4811
E-Mail kitamura-m@lbn.go.jp



1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団体職員数：専任職員2名、兼任職員0名
- ・ 養成講座担当職員数：専任職員2名、兼任職員0名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

博物館展示と連動したワークショップ・プログラム開発を行える、ボランティア・コーディネーターの仲間づくりを行い、博物館展示を活かしたワークショップ・プログラムの企画・立案、および展示連動型のワークショップを運営できるボランティア・コーディネーターを養成します。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

博物館の展示は、博物館を人々が利用する際のもっとも魅力ある要素のひとつです。しかし、通常の博物館展示は「モノ」の展示に終始しがちであり、コストをかけた展示更新以外には魅力を増すことができないと考えられています。展示更新はもちろん重要だが、展示の魅力を引き出すワークショップ・プログラムなど、ソフト面の仕掛けを利用者の視点から提案できれば、よりよい博物館展示の利用を模索できるはずです。ただし、こうした仕掛けを提案したり、展開したりできる人材は少なく、その仲間作りの方法も確立されているとはいえません。そこで、この事業を通して、博物館展示を活かしたワークショップ・プログラムの企画・立案、および展示連動型のワークショップを運営できる、ボランティア・コーディネーターを養成します。

3① 養成されたコーディネーターの実際

講座は、新たに募集に応じた3名を軸に「びわたん」メンバーを加えて実施しました。その中で明らかになってきたことは、コーディネートするボランティアの像が大きく転換しつつあること、また、博物館と美術館とのボランティアのイメージの違いでした。その結果、講座の集大成にあたるセミナーでは、博物館および美術館におけるボランティア像の再構築について検討を深めるものになりました。また、コーディネーターとボランティアとの関係については、ボランティア活動をふまえないボランティア・コーディネーターの存在はありませんが、一方でコーディネーターというキャリアのプロフェッション化をある時点で行う必要があるという理解が共有されました。

3② 実施した養成プログラムの問題点

養成プログラムについては、実施の過程で成果と同時に様々な問題があることが分かってきました。まず第1に、本講座のコーディネーターとはプロフェッションではないコーディネーター養成を目指したが、受講者の中には職業としてのコーディネーターを志向する人もおり、その結果、イメージを共有できていなかった一名が途中で講座をやめることになりました。また、第2に、開発検討会には多数の外部講師を招聘することを予定していましたが、受講生の生活実態を考慮し、実技指導の一部変更や時間的な集約を行う必要がありました

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

受講者の中から、今後の「びわたん」活動の中核を担っていく人材が登場しました。今後の活動の中での活躍が期待されています。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

全国の博物館は、今、予算の削減を受けてNPO法人等の受託による指定管理者制度の導入が目論まれています。また、友の会なども、従来の利用者サービスの活動から、博物館の存在を支える活動に重点を移しています。本講座の過程では、そのような動きにどのように働きかけるのかが受講生の側からしばしば話題提起され、それらの場所でのコーディネート活動が、今後期待できそうです。

また、部分的に参加した受講生の中からも、今後の博物館ボランティアについてコーディネートという立場から議論する人々が登場しており、今後の活動への参加が期待されるので、機会毎に積極的に呼びかけを行うことを確認しています。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数：5名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数：3名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数：1名 他に潜在的メンバー7名

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

- ・ 7月6日 採択の連絡を受けて、具体化のための検討会実施。（講座開催前）
- ・ 8月24日 開始に向け人集め、プログラムの手順などを検討（講座開催前）
- ・ 12月17日 翌日のセミナーと講座手順などを相談。（養成講座途中）
- ・ 1月17日 ワークショップを含んだ養成講座の1回目の振り返りと次回の計画を検討するための検討会を行った（養成講座途中）
- ・ 2月15日 要請講座全体のまとめを行い、報告書を作成する準備のための検討会を行った。（養成講座終了後） 計5回開催

検討会メンバー：

- ・ 北村美香・琵琶湖博物館はしかけグループ「びわたん」、
- ・ 牧野厚史・琵琶湖博物館学芸員
- ・ 布谷知夫・琵琶湖博物館学芸員
- ・ 秋山廣光・琵琶湖博物館学芸員
- ・ 青木伸子・琵琶湖博物館特別研究員
- ・ 黒岩啓子・特別研究員・Learning Innovation Network
- ・ 五月女賢司・国立民族学博物館

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

準備段階でのヒアリングの練習を行う展示会会場での講座と座学、博物館の場を使った教育・学習についての最新の内容についてのセミナー、子どもたちが活動をするワークショップの運営補助体験、全国各地の博物館でのボランティア・コーディネーターのセミナーを行い、その場で意見を聞き、議論に参加するような養成の場という、4種類の養成事業を行いました。

検討委員会のメンバーは計画作成の際、参加者の理解を助け、参加者一人一人が具体的にプログラムに参加できる工夫を提案し、議論しながらプログラムを作成しました。

また、検討委員会のメンバーは、事業に参加し、参加者の様子を確認しながら、次回の養成講座の進め方についての検討を行いました。特に今後中心的に活躍が期待されている対象者については、いろいろな立場での体験ができること、必要な意見を出すことができることなどを配慮しながら、プログラムを進めていけるように工夫を行いました。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

文化ボランティアをふまえないコーディネーターはありえませんが、ある時点でコーディネーターはプロフェッション化する必要があります。文化ボランティアは自分たちのための活動ですが、コーディネーターには他者のための仕事が相対的に多く、それらを「楽しみ」にむけた自発性でカバーすることは不可能です。よって、その活動の公共的な意義を金銭的報酬も含めて社会的に評価する必要があります。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

コーディネーターには、よき文化ボランティアの担い手であるという経験をもつとともに、オーガナイザーとしての資質が必要となります。オーガナイザーとは、自分で動くだけでなく他者をも動かすことであり、そのためにはそれなりのプロフェッションとしての自覚と責任が必要となります。文化ボランティアとしての技能は、二義的であります。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

現代の博物館では、展示更新だけではなくソフト的な魅力が重視されているという背景から、展示の魅力を引き出すワークショップ・プログラムなど、ソフト面の仕掛けを利用者の視点から提案する役割を担うコーディネーターが必要とされており、これから「びわたん」を含めたワークショップ活動を展示と連動したかたちで発展させてゆくために、今年度作成した養成プログラムをベースに、毎年見直しを行い、今後5年間のうちに25名の文化ボランティア・コーディネーターを養成します。また、養成したコーディネーターは、「びわたん」活動の中核メンバーとして活用するほか、その本職が指定管理制度で運営されている施設の職員が数名含まれているため、指定管理者制度を機能させる役割も期待でき、コストをかけない博物館展示の魅力増加という課題の改善に貢献できます。

今回の事業のキーパーソン：

布谷知夫（琵琶湖博物館総括学芸員）

キーパーソンからの一言：

今、日本の博物館ボランティアの位置づけは、あきらかに転期を迎えています。その中で活躍するコーディネーターとは、楽しみを支えるプロフェッショナルといえます。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： 展示連動型ワークショップを実行する文化ボランティア・コーディネーター 博物館展示の趣旨を理解し、展示連動型ワークショップのプログラム企画立案ができ、かつ、文化ボランティアをまとめワークショップの運営が可能な文化ボランティア・コーディネーターを養成する。			
受講対象者	滋賀県内の自然系施設スタッフ、琵琶湖博物館の一般来館者。		
受講者の募集方法	自然系施設スタッフは「びわたん」を中心とした口コミと直接依頼、琵琶湖博物館来館者は、チラシ等を置いてもらって周知。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1. ボランティア・コーディネーターの募集	人材の確保と目的の共有	単なる募集ではなく、博物館に来館してもらい口頭で目的を説明。	6月-7月・面接・定員まで随時
2. プログラムの企画立案	博物館と利用者のマッチングを、プログラムの企画立案という実践を通して理解する	①博物館にあつまり、展示担当学芸員を招き、意図の説明とあわせて、ワークショップ・プログラムを企画・立案する(計4回)。 ②うち1回は、外部有識者による一般講演および講義に参加、また、仕上げはプログラムの予行演習を行う。	8月-9月・討論と作成・3回 8月-9月・講演と講義・1回 (外部有識者による講義 2人×2時間、外部有識者による公開講演 2人×2時間)
3. プログラムの実演実習	プログラムを実践できるスキルおよび、その際の課題を理解する	博物館のギャラリー展示を利用し、プログラムを相互に実施(計8回)。その際、特定の展示に偏らないよう、2つ程度の展示で実施する。うち2回は外部有識者を招くとともに、博物館の学芸員にも広くよびかけ、講評を受ける。	9月-1月に8回(うち2回は実習後、外部有識者による講義 2人×2時間×2回)
4. コーディネート実習	集めた文化ボランティアのコーディネート上の問題(イベントの企画・運営)を理解する	①実際の展示室およびギャラリー展示を利用し、文化ボランティアによるプログラムを一般利用者に向けて実施。アンケートおよび相互批評を行う。 ②外部有識者を招くとともに、博物館学芸員にも広くよびかけ、講評を受ける。	9月-1月・コーディネートによるプログラム実施・2回 12月-1月・外部有識者を招いて講演と講義(公開講演 2人×2時間 講義 2人×2時間)・1回
5. 養成プログラムのまとめ	電子メール等を用いて外部有識者の助言を得ながら、成果をとりまとめ、公表する	パンフレット等を作成し、まとめた成果を公開する。	1月-2月・討論と成果とりまとめの実務・2回

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター：展示連動型ワークショップを実行する文化ボランティア・コーディネーター 博物館展示の趣旨を理解し、展示連動型ワークショップのプログラム企画立案ができ、かつ、文化ボランティアをまとめワークショップの運営が可能な文化ボランティア・コーディネーターを養成する。				
受講対象者	滋賀県内の自然系施設スタッフ、琵琶湖博物館の一般来館者。			
受講者の募集方法	自然系施設スタッフは「びわたん」を中心とした口コミと直接依頼。また電子メール等で博物館に関連する人々に呼びかけ。			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
1. コーディネーター側の問題意識の共有	講座開始にむけて学芸職員の問題意識を共有し、予想される課題を抽出	展示を活かしたワークショップの主催実習	2008年10月23日、写真展示にあわせた老人会からのヒアリング・1回、その後も展示室での観察と案内などを随時実施。	ヒアリングに専念してしまい、事業をコーディネートする人物の不在が明らかに。実践を通じてコーディネーターの役割に気づく。
2. ボランティア・コーディネーターの募集	人材の確保と目的の共有	単なる募集ではなく、博物館に来館してもらい口頭で目的を説明。	2008年12月7日、受講希望者に対し博物館ボランティアとコーディネーターの役割を講義、その後討論。	博物館ボランティアそのものの多様な理解の仕方が浮上。何をコーディネートするのかの明確化が課題に。
3. コーディネートに必要な知識の習得	博物館での教育学習活動の在り方と、その参加者に対する働きかけの方法についての認識の一致	博物館からのレクチャーおよび海外で活躍するゲストからの講義とその後の討論	2008年12月18日、座学、1回	初めて参加する方と、はしかけなどで活動を活発にしている方との両方がいるために、両方に合わせたレクチャーにはならなかった
4. プログラムの実演実習	プログラムを実践できるスキルおよび、その際の課題を理解する	展示を活かしたワークショップの主催実習(博物館、びわたんとの共催)	2008年12月13日、21日、2009年1月11日、18日、の4回にわたり、博物館ギャラリー展示と連動するワークショップに参加する形で実施。	役割分担が明確でないという問題点があった。
5. コーディネート実習	集めた文化ボランティアのコーディネート上の問	①実際の展示室およびギャラリー展示を利用し、文化ボランティア	2月3日、1回、外部有識者を招いて博物館展示室を用いて「びわたん」と受講生によるワークショップを実施	外部のコーディネーターにも参加してもらい、意見を聞いたがおおむね好評であった。

	題(イベントの企画・運営)を理解する	によるプログラムを一般利用者に向けて実施。アンケートおよび相互批評を行う。 ②外部有識者を招くとともに、博物館学芸員にも広くよびかけ、講評を受ける。		
6. 養成プログラムのまとめ	電子メール等を用いて外部有識者の助言を得ながら、成果をとりまとめ、公表する	パンフレット等を作成し、まとめた成果を公開する。	2月2日から3日にかけて・討論と成果とりまとめの実務・2回	現在整理中

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター：展示室を使いながら、博物館の利用者に対して働きかけをするコーディネーター 博物館の教育学習活動に対する理解があり、その立場で展示室を使って行うワークショップや対話型の学習活動などを行うためのプログラムの企画立案・実施ができ、同時に文化ボランティアをまとめて、指導・運営ができるコーディネーターの養成を行う。			
受講条件 (受講対象者)	滋賀県内の自然系博物館施設、類似施設のスタッフと、琵琶湖博物館の利用者		
受講者の募集方法	琵琶湖博物館のはしかけグループ「びわたん」によるロコミとメーリングリスト、および滋賀県内自然系博物館施設のネットワーク「環境と科学のフェスティバル参加館」への働きかけ		
課題	目的	問題点を踏まえた改善策(実施内容)	備考(時期・形式・回数)
問題意識の共有	中心的に活動してもらおうコーディネーターと博物館職員との問題意識の共有化	コーディネーター養成講座全体の趣旨を明確にして、効果的なプログラムを作成するための最初の準備プログラムとするためには、展示づくり、ヒアリングの準備、老人会の募集などについても、中心スタッフの意見を聞きながら準備、実施をしたほうが、後の事業がスムーズに進むと考えられる。	可能であれば、夏前に準備を行い、夏休み時期に集中した事業を行いたい
コーディネーターの募集	新しい人材養成のためのコーディネーター候補者の募集	募集先についてはこれまでのネットワークの中からならざるを得ないために、講座参加者が多様であることを念頭に入れたレクチャーや口座の運営が必要。	募集の方法はおおむね今回と同じ。あるいは後のレクチャーなどを効率的におこなうためには、博物館実習の学生など、一定の認識を持った人を含むような方法も。
座学(レクチャー)と議論	博物館独自の教育学習活動を、特に展示室を活用しながら行うための考え方についての認識一致	1回の短時間のセミナーでは無理な点があり、博物館での教育学習活動というあまり一般的ではない内容に対しては、より時間をかけて、じっくりと取り組む必要がある。	博物館の事業と共催して、2～3回
プログラムの実習	プログラムを企画し、実施することで、内容の確認と問題点などを議論して認識する	琵琶湖博物館のびわたん事業との共催をしたために、そちらに頼ってしまうという結果となった。やはり独自のプログラムの組んで実施することが必要。ただし参加者個人の動きとしては必ずしも悪い動きではなく、役割分担を工夫すれば、共催も可能。	びわたん等との共催から、少しずつ独自企画色を強く持てるようにプログラム化しながら、4～5回
コーディネーター実習	自らがコーディネーターとして企画運営をする体	プログラムの実施を経験している上での実習であったため、文化ボランティアに逐次指示も出して、順調に行われた。ただコ	この実習に対する準備期間をやや長くとり、夏以後により独自に考えた企画を行う。回数は少なく

	験をし、今後の活動に生かす	ーディネーターの人数と当日のボランティアとの人数バランスが余裕を持って実施できるような状態であったために、ボランティアの人数が多い場合の対応は別途考える必要がある。	てもよい。
プログラムのまとめ	コーディネーターとして参加したメンバーと博物館とで総括し、今後のプログラムつくりと、コーディネーターの要請に生かす。	今回の事業では、年度後半に集中したために、事業の結果をまとめて今後に生かすための作業を全体で時間をかけて行うことができなかったために、余裕を持って事業を行い、参加者全体での振り返りが十分にできるようにしておきたい。	上記と同様に、秋に時間をかけて行いたい。まとめの発表会を実施。

団 体 名：特定非営利活動法人 シンフォニー
代 表 者：山崎 勲
所 在 地：兵庫県尼崎市北城内 88-4-2-106
問 合 せ 先：06-6412-8025



1① 団体紹介

NPO法人シンフォニーは、震災ボランティアから生まれた団体で、避難所仮設住宅でのコミュニティづくりや、震災被害者の復興住宅への引っ越しなどを支援してきました。現在は防災、福祉、環境などをテーマに「まちづくり団体」として阪神地域を中心に活動中です。

1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団 体 職 員 数：専任職員 9名、兼任職員 3名
- ・ 養成講座担当職員数：専任職員 1名、兼任職員 2名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

- ・ 地域資源（人、モノ、情報）を活用するプログラムづくりと事業展開に、市民の参加をデザインし、プロデュースしていく力を持つ人。
- ・ 地域コミュニティのレベルでも芸術・文化を活用することが出来る人。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

大阪・神戸間の阪神地域は、工業都市としての発展を基礎に、文化的な施設が多く建設され、グレードの高い芸術、文化活動が活発に行われてきました。しかし、高度経済成長の終焉とともに、投入される資金（予算）が減少し、文化活動が衰退してきた。その結果、文化活動（ソフト）のマンネリ化と貧困化が目立つ。また地域（コミュニティ）の斜陽化も進んでいます。

しかし、他方では、阪神地域は、「私文化」の宝庫ともいわれ、文化・芸術活動に取り組む多くの人があります。

コミュニティの活性化のためには、地域の資源の再評価し、積極的に活用していくことができる「文化ボランティア・コーディネーター」が必要になっています。

3① 養成されたコーディネーターの実際

今回の講座で目指したのは、市民参加型で地域文化資源の活用できる人材育成でした。受講生は、チラシ、インターネットを使って一般公募で集めました。

受講生は、28名であった。内訳は次の通りです。

- ・ 会社員フリーアナウンサー 11名
- ・ 学生（大学院生） 3名
- ・ 教員 1名
- ・ 定年退職者 8名
- ・ 行政職員 2名
- ・ フリーアナウンサー 2名
- ・ アーティスト 2名

今回の講座の特徴は、特定の施設ボランティアのコーディネーターではなく、芸術文化の力でまちづくりを推進するという視点を共通項として、それに必要なコーディネーター能力を獲得しようという人たちでした。講座は毎回熱を帯びたものとなり、体験実習にも積極的に参加し、共通の事業企画とは別に、自主事業の企画を立てるメンバーも出ました。

（ある養護学校の教員は、養護学校に通う障害者の卒業後の進路があまりにも狭い（一般的に作業所しかない）現状を憂い、その選択の幅をひろげるための場づくりを、芸術文化を活用して行うという企画をつくり、次年度協働で実施することになりました。）

ただ「当初理想としていたコーディネーター像通りに養成されたのか」という点で見れば、受講生の問題意識や条件に応じて、個々的に「差」が出ました。これは、講座終了後、継続的なフォロー（支援）や学んだものを活用する中で解決されていくでしょう。

3② 実施した養成プログラムの問題点

今回のプログラムは、地域の文化資源の活用という大きなテーマにもかかわらず、コマ数、時間数が少なかったです。特定の文化施設のコーディネーターの養成と違って、芸術をコミュニティ・まちおこしの側面として生かす手法を獲得する講座としては、時間的にも内容的にも密度が薄かったといわざるを得ません。

受講生の募集においても、経験や知識等の条件づけを徹底できなかった。受講資格、テスト等で、受講生を絞り込み、質の統一を図れるかどうか、大きな課題として残りました。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

協働事業におけるリーダー的活動

阪神地域は、文化・芸術分野で行政との協働事業が活発であり、そうした中でリーダー的役割を担います。

平成21年度に決まっている協働事業

- ・ 阪神地域文化資源データベース事業

地域の芸術・文化や人々の生き方、あるいは企業のこれまでの文化活動と地域社会との関わりをデータベースとして作成・保存し、エコミュニゼという手法を通じて次世代に伝承する事業です。

- ・ 尼崎市街のみどころ案内事業

ガイドボランティア等の活用による事業として計画中であり、これらの一部を養成講座修了生に担います。

- ・ 文化施設の文化事業コーディネーター

NPO法人シンフォニーが指定管理者になる「尼崎市立労働福祉会館」（働く市民の文化施設）で、年間を通じて、勤労市民の芸術・文化活動を支援するための「勤労者文化」事業を行うことになっているが、そこでのコーディネーター的役割を今年の「文化ボランティア・コーディネーター養成講座」の修了生に担ってもらう予定です。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

地域イベントでの活躍

阪神地域の各商店街等地域では季節毎の「イベント」が実施されているだけでなく、展示、ワークショップなど活性化のための事業が実施されています。ただし、多くのところで、担い手が不足しているだけでなく、ソフトがマンネリ化しています。そこに、養成講座修了生が参画することとで、新しい刺激やアイデアが生まれる可能性があります。

福祉施設での活躍

老人ホームやディサービスセンター、障害者支援施設などに養成講座修了生が参画することで、芸術・文化をつかった「元気アップ」「リハビリ」支援ができます。

教育施設での活躍

教育施設をコミュニティ単位で捉え、芸術活動を教育活動と結合させながら、潜在的創造性を開花させることを目的とした事業に参画し、地域のアーティストをコーディネートしていくことが出来ます。

将来は、ティーティング・アーティストのような事業のコーディネーター的役割を担うことが出来ます。

文化施設（尼崎市立労働福祉会館）での活躍

平成21年4月1日より、当法人が指定管理者になる尼崎市立労働福祉会館で実施される館主催の文化事業で、企画・運営のサポートをしてもらいます。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数：28名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数：7名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数：5名

5① プログラム開発検討会の実施状況

委員

- ・ 津田 直則 桃山学院大学教授
- ・ 辻川 敦 尼崎市立地域研究史料館長
- ・ 田中 正朗 尼崎市 近松・生活文化 まちづくり情報課長
- ・ 池崎 すみよ ミュージカルダンサー、ヤマハミュージックスクール ボーカル講師
- ・ 武地秀実 タウン誌『ととも』編集長
- ・ 山崎 勲 NPO法人シンフォニー 代表理事

第1回 文化ボランティア・コーディネーター養成講座のカリキュラムの検討会

6月1日（月）～6月25日（木）

これは企画書提案時期と重なり、メーリによる稟議制で行い、「文化ボランティア・コーディネーター養成講座」の内容を作成した。

第2回 体験実習のカリキュラムの検討会

9月30日（火）

出席者 津田、武地、山崎

10月1日（水）

出席者 津田、田中、山崎

体験実習のプログラム検討、体験時に行う阪神地域の地域資源の評価方法等の検討を行った。（歴史、文学に表現されている等）、

第3回 受講生によるイベント実施に関する検討会

1月13日（火）

出席者 武地、田中、山崎 池崎

受講生イベントのプログラム検討（日中音楽交流における日本側アーティストの検討、マッチング）

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

養成講座プログラムの作成

座学、体験、実施、振り返りで作成

体験プログラム検討会で、フォロー活動を提案

体験実習のプログラム検討会では、受講生に「企画力、運営力」を獲得してもらうことのフォローが必要になりました。これは、基本的な「養成プログラム」の枠内では難しいと判断され、事務局で個別面談、フォローを行いました。

イベント実施検討会で、適正に応じた役割分担を提案

イベント実施は、「中国春節際」を関西障害者国際交流協と共催で行いました。「日中文化交流」を軸とすることや、企画・運営に当初から関わることを提案しました。

実際、企画を共同でおこなっただけでなく、受付、進行、司会、配膳手伝い、写真、駐車場案内、前日の舞台作成など実質的なところを養成講座受講生が担いました。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

次のように整理して、養成講座を行いました。

文化ボランティアとは、芸術・文化活動が無償で行うアーティスト及び芸術・文化事業をサポートしてくれる個人またはボランティアグループです。

文化ボランティア・コーディネーターとは、施設等の場とアーティスト、文化ボランティアをマッチングし、事業をスムーズに行う人です（通常、年間を通じて事業を担当している団体スタッフ（有償、無償を問わず））。

私たちの整理について、団体、施設で「仕事」としてのコーディネーターを目指している受講生間では、ブレはほとんどありませんでした。しかし、将来のビジョンが明確でなく、ぼんやりと「文化ボランティア・コーディネーター」を目指しているものにとっては、この整理だけでは、区別が明確でなく、混乱を生じさせかねません。

文化施設や地域資源、地域のアーティスト、芸術・文化に関心がある市民をマッチングするというコーディネーションの実際の内容は、場（施設）や地域の特性に大きく左右されます。その意味でも、養成講座の共通ゴールをめざすプログラムだけでなく、個別進路相談やその後活動フォローを結合し、個々にコーディネーターのイメージ、求められる力を認識させる必要があると思います。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

- ・ 芸術・文化とコミュニティとの結合として考える場合、ハレとしての非日常空間を演出するものとしてだけでなく、日常生活をより豊かにするものとして存在する。
- ・ 文化ボランティア・コーディネーターには、こうした芸術・文化の役割をしっかりと認識出来ていることが必要である。（知識欲、柔軟な思考。）
- ・ また、地域の特有の歴史的資源や文化施設の歴史・現状を知り、それを活用するノウハウ。（様々の事柄に関心や興味を持っている。）
- ・ 行政側の考え方を知り、支援メニューを活用出来ることも求められる。それには文化振興に関わるプログラムづくりを協働でつくっていかなければならない。（行政との協働力）
- ・ 大学、企業、市民を結びつけることが必要である。（ネットワーク力。）

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

- ・ 阪神地域では、多くの文化施設が作られているが、ソフト不足が目立ち、地域コミュニティの衰退も目立つ。その克服策の一つとしてコミュニティレベルで、芸術・文化を取り入れていくことが課題となっている。
- ・ その課題を解決するためには、「美術館など地域資源を活用するプログラムづくりと展開に、地元アーティストとボランティア、住民の参加をデザインし、プロデュースしていく力を持ち、商店街や福祉施設などコミュニティレベルでも芸術・文化を活用することが出来る人」＝文化ボランティア・コーディネーターの養成が必要である。
- ・ 今年開発したプログラムは、第一歩であり、今後毎年バージョンアップを行い、毎年質の高い文化ボランティア・コーディネーターを10名以上養成していく。
- ・ 平成21年度は、個別のフォローアップを強化し、受講生のスキルアップを図る。

<プログラム案>

○地域資源を知る

阪神地域の文化的特徴、歴史、地域資源

- ・ マップや資料、年間を通じた具体的活用事例を中心に学ぶ
- ・ フィールドワークの方法、地域資源の掘り起し（再評価）、データベースづくりの技法

国や自治体の文化政策、支援メニューについて

- ・ 情報の入手方法、申請の方法、活用法を学ぶ

○コーディネーター

展示・イベントづくりのノウハウ

- ・ 企画・運営
- ・ 設営、警備
- ・ 進行台本の作り方
- ・ スタッフマニュアルの作り

プロジェクトマネジメントの技法

コーディネーターの技法

- ・ マッチングを軸にコーディネーションのノウハウを学ぶ

○体験、実習

文化施設

- ・ 尼崎市立労働福祉会館 「勤労者文化事業」

地域イベント

- ・ 商店街、福祉施設

受講生による企画

○振返

- ・ ワークショップ&交流会で、各自の経験を共有し、今後の「文化ボランティア・コーディネーター」につなげる。

今回の事業のキーパーソン：

稲葉 安正（元朝日新聞整理部記者、現NPO法人シンフォニースタッフ。）



文化ボランティア・コーディネーター養成講座では、事務局を担当し、講師のコーディネーターや受講生のフォロー（個別相談、サポート）、体験実習時の付き添いをしました。

キーパーソンからの一言

「オバマ大統領が有名な「Yes we can」演説で言ったことがある。「大勢の中にあって私たちは一つなのだ」と。皮膚の色や文化の違いをこえて一つになることを訴えました。こうした多様な世界をつくるためには、文化への理解がかかせません。「文化ボランティア・コーディネーター養成講座」は、こうしたことでも意味のあることだと思います。地域の文化振興には、こうした働きかけは、絶対必要です。経済が低迷する中、だからこそ、こういった試みを今後も続けていって欲しいです。」

団体へ向けてのメッセージ

- ・ 文化ボランティア養成と「文化ボランティア・コーディネーター養成講座」と違いを区別する。
- ・ 文化施設付きコーディネーター養成と、コミュニティレベルの「コーディネーター養成」を区別する
- ・ コミュニティレベルの養成講座であっても、文化施設でも実習（体験）活躍の場を確保しておく。

体験実習以後は、個別相談（進路相談）及び活動フォロー体制を整えるのが望ましい。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： 地域(主に阪神地域)の美術館や酒蔵など文化的な地域施設を活用して、芸術・文化を振興していくため、行政、企業、(NPO)が協働して、コーディネート力、ファシリテート力を有する人材を育成する。			
受講対象者	阪神芸術文化サポートクラブやその他文化団体でボランティア活動を1年以上継続的に行う者		
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPに掲載し、当団体のニュースレター、メールマガジン、チラシ等で周知する。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
オリエンテーション	文化ボランティア・コーディネーターのニーズ、課題について理解し、講座のゴール、獲得するスキルを明確にする	文化ボランティア・コーディネーターとはどんなことをする人なのか、そしてこの講座の目的、回数、期間、ルールについてオリエンテーションを受ける。	講義 90分×1回 講師:NPO法人シンフォニー 8月開催
阪神文化の特徴と歴史	阪神地域の文化政策、支援メニューを理解し活用法を考える。	兵庫県・阪神地域の文化的特徴、歴史、地域資源について講習を受ける。	講義 120分×1回 講師:河内厚郎(文化プロデューサー) または辻川敦氏(尼崎市地域研究史料館) 8月開催
行政の文化政策	国や自治体の文化政策、支援メニューを理解し活用法を考える。	県と市の文化担当課、地域文化団体から講師を招き、国、県の文化施策、助成メニュー、申請方法、協働のニーズ、課題等について講習を受ける。	講義 120分×1回 講師:横山佐和子氏(兵庫県地域協働課長) 講師:田中正朗氏(尼崎市まちづくり情報課長) 9月開催
地域の文化団体の現状と課題イベントづくり	地域の文化団体の現状と課題を理解し解決策としてのイベント型事業の作り方を考える。	地域の文化活動団体から講師を招き、芸術、文化イベント、展示会、音楽会などの現状、課題と解決策を考える講義とワークショップを行う。	講座 ワークショップ 120分×1回 講師:濱田 格子(帝塚山学院大学非常勤講師) 10月開催
コーディネーターの技法	コーディネーター、ファシリテーターの技能を習得する。	コーディネーター、ファシリテーターの体験を実践形式で行う。	ワークショップ120分×1回 講師:大濱田格子氏(帝塚山学院大学非常勤講師) 10月開催

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター： 地元アーティストとボランティア、住民の参加を求め、文化イベントの企画、立案、実践計画をねる。				
受講条件 (受講対象者)	阪神芸術文化サポートクラブやその他文化団体でボランティア活動を1年以上継続的に行う者			
受講者の募集 方法	当団体やネットのHPに掲載する			
課題	目的	問題点を踏まえた改善 策(実施内容)	実施日時・形式・回 数	対応策(事業実施内容) の問題点
文化イベント の企画	文化イベントの企画、立案、実践計画をつくる技能を修得	雑誌「ともも」の武地さんが、ワークショップのかたちでスライドとともに経験を披露、それをもとに話し合いがはずんだ。	11月25日(火) 18:30~20:30 武地 秀美 尼崎中小企業センター	
体験実習	阪神地域の文化政策にからみ活用法を考える	グッドマナーバンク第1回~ふれあいトーク&コンサート~ 第1部 歴史文化のタベ 尼崎市と近松門左衛門 第2部 夕暮れコンサート 播摩夏奈	11月19日(水) 18:00~20:00 ろうきん尼崎支店	
体験実習	イベント型事業のつくり方を考える	第5回ミュージックコンテスト甲子園音楽会などで現状を体験把握する	12月13日 13:00~17:00 尼崎ピッコロシアター 中ホール	
文化イベント の実施	イベント開催(1回)	春節祭(旧正月)に合わせ、中国の料理や音楽を通じて地域住民との交流を深める目的のイベントに企画、立案段階から参加、会場設営、司会、配膳手助け、運行などさまざまなボランティアも実施した。	2009年1月24日 (土曜日) 東難波町の NPO 法人 関西障害者国際交流協会 「2009年春節祭」中国 家庭薬膳料理試食会	

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター： 文化施設など地域資源を活用するプログラム作りと展開に、地元アーティストとボランティア、住民の参加をプロデュースしていくコーディネーターをつくる			
受講対象者	阪神芸術文化サポートクラブやその他文化団体でボランティア活動を1年以上継続的に行う者		
受講者の募集方法	当団体のHPに掲載し、チラシを各美術館、施設に配布。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数
オリエンテーション	文化ボランティア・コーディネーターのニーズ、課題について理解し、講座のゴール、スキルを明確にする	文化ボランティア・コーディネーターはどんなことをする人なのか、そしてこの講座の目的期間、ルールについてのオリエンテーション	第1回 9月30日(火) 18:30~20:30 講義90分
阪神地域の文化特徴、歴史、地域資源について	阪神地域の文化政策、支援メニューを理解し、活用法を考える	兵庫県阪神地域の文化的特徴、歴史、地域資源について講習を受ける。	第2回 10月7日(火) 講義 120分 辻川 敦(尼崎市地域研究史料館)
行政の文化政策	国や自治体の文化政策、支援メニューを理解し、活用法を考える。	県と市の文化担当課、地域文化団体から講師を招き国、県の文化施策、助成メニュー、申請方法、協働ニーズ、課題について講習	第3回 10月14日(火) 講義 120分 横山佐和子(兵庫県地域協働課長)
イベントづくりのノウハウ	地域の文化団体の現状と課題を理解し解決策としてのイベント型事業の作り方を考える。	地域の文化活動団体から講師を招き、芸術、文化イベント、展示会、音楽会などの現状、課題と解決策を考える講義とワークショップを行う。	第4回 10月21日(火) 講義 120分 池崎すみよ(ミュージカルダンサー)
コーディネートの技法	コーディネーター、ファシリテーターの技能を修得する。	コーディネーター、ファシリテーターの体験を実践形式で行う。	第5回 10月28日(火) 講義 120分 濱田 格子(伊丹市女性センター)

団 体 名：NPO法人 BEPPU PROJECT

代 表 者：山出淳也

所 在 地：大分県別府市汐見町9-1

観光港第3埠頭ターミナル2F みなとパレット

問合せ先：0977-22-3560

E-Mail info@beppuproject.com



1① 団体紹介

大分県別府市を拠点に現代芸術の紹介や教育普及活動、アート・マネージャー育成講座、出版やリノベーションなど様々な事業を実施しています。

1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団 体 職 員 数：専任職員 3名、兼任職員 2名
- ・ 養成講座担当職員数：専任職員 2名、兼任職員 0名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

別府市中心市街地の空き店舗のリノベーションによって生まれる文化的スペース（ギャラリーやレジデンス施設含む）を運営（就労）するアート・マネージャー育成と、それらのスペースを使った文化事業を地域とつなぐ架け橋となる文化ボランティア層の拡大を目指します。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

大型観光都市である大分県別府市は、近年の国際観光化時代の中で鮮度と集客力を失っています。町は老朽化し、空き店舗が増え続け、やがて荒廃し、魅力を失ったこの町に住み続けようとする若者は減っていくでしょう。国内の多くの地方都市と同様に、この町の地域社会自体が崩壊しようとしている現在、どのようにしてこの場を再生させるかが、私たちに突きつけられています。

そこで、NPO法人 BEPPU・PROJECTは、地域の公的団体（別府市や商工会議所、教育機関）らと協働し、文化によるコミュニティの再構築を図るため、シャッター街となった別府市中心市街地の空き店舗（中心街にある7つの商店街の空き店舗率は約35%）を多数リノベーションすることによる「星座型 面的アート・コンプレックス構想」を計画しています。

この計画は、創造者（若い芸術家や地域の竹工芸家）たちが町の中に居住する必然をうむために、制作工房や創造交流による事業展開を促進させることで、持続可能な創造クラスター、つまりこの町を豊かにする次世代の意欲を持つ人間たちを生み、集う必然を作ることとを主目的としています。空き店舗のリノベーションによって生まれる文化的スペース（ギャラリーやレジデンス施設含む）などを星座のようにネットワークで結ぶことにより、町の回遊性の必然を生むことを目指しています。この計画の実現にあたり最も必要とされるのは地域とアートの繋ぎ手です。しかし、現在この地域を支えるアート・マネージャーが他の地方都市と同様に育っていないのが現状です。

そこで、私たちが実施しようとする「文化ボランティア支援拠点形成事業」は、今後、別府市に生まれるリノベーション施設を運営するアート・マネージャー育成のため、そして、地域における文化活動を支える文化ボランティア層拡大に繋がるよう、様々な角度からのアートマネジメント講座と、実習訓練を実施します。さらに、その連続レクチャーをまとめた記録物を作り、広く配布します。

連続レクチャー、実習訓練と記録物作成からなる「文化ボランティア支援拠点形成事業」を通して、今後、地域における芸術普及プログラムと、公共空間におけるアートのスペースのマネジメントやオペレート方法などについて学び、実践し、そして今後の文化事業を担って活躍していく人材を育成する場としたいと考えています。

3① 養成されたコーディネーターの実際

講座と実習という2種類の学習形式をとったため、講座に関しては、社会人や学生、地域住民と様々な世代や職業の方に参加していただきました。実習に関しては、アートボランティアとして深く関わって行きたいという希望を持つ、学生らを中心に実践（星の記憶を未来につなぐ夏他）を重ねることができました。

学習と実践を交互に繰り返したため、当初の目的であった文化スペース（platform）の運営を行うアート・マネージャーも育ち、受講者らが独自にアートイベントを開催する等、更なる発展に繋がりました。

また地域とのかかわり合いとしても、講義で中心街の文化スペースを利用したので、商店主や地域住民とのコミュニケーションのきっかけにもなり、文化ボランティアの周知につながったと思います。

当初の目的では、講義、実習とも40名を目指したが、実習に関してはやはり学生など時間の融通がきく人が対象となり、社会人を巻き込むことができませんでした。今後は企業に対して、「文化事業を行う事で社会貢献に繋がる」ことをアピールし、社員教育の一環としての文化ボランティアの側面を訴えて行きたいと考える。また、養成されたアート・マネージャーのスキルアップが重要です。

3② 実施した養成プログラムの問題点

- ・ 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラムの実施と告知のタイミングがうまくいかず、実習の参加者が少なかった。
- ・ 全体的に30～40代の参加者が少なかった。今後は企業の社会貢献事業の一環として、文化ボランティア活動がある、ということを訴えて行きたい。
- ・ 実習のスケジュールがプログラム全体のスケジュールとアンバランスだった。
- ・ 実習に対してのサポートが十分でなかった。
- ・ 今回は、講義と実践というプログラムを行う取り組みとしては成功したと思うが、講義と実践をより近づけるためにも、今後は事務局（今回でいえば宮本初音氏）を担っている講師と中長期にわたるプログラムを行いたい。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

星の記憶を未来につなぐ夏で協働した、他NPOのイベント運営に参画し、平成21年春に開催される「別府現代芸術フェスティバル2009」のボランティア・リーダー、また引き続きplatformのスペース運営など、様々な役割が期待されます。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

用意された事業やプロジェクトに参加するだけでなく、この育成事業で関わったそれぞれのボランティアが、町に必要と思われるアートや文化的な事業を作り出すことが期待されます。（アート・コミュニティ・カフェの運営や他団体とのパートナーシップなど）

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数： のべ214名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数： 53名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数： 15名

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

7月18日（養成講座開始前） 1回開催

検討会メンバー：

- ・ 甲斐賢治（NPO法人remo代表理事）
- ・ 芹沢高志（P3 and environmentエグゼクティブ・ディレクター）
- ・ 鶴田浩一郎（NPO法人ハットウ・オンパク代表理事）
- ・ 山出淳也（NPO法人BEPPU PROJECT代表理事）

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

育成する人材にはアートと地域を繋ぐということからも、アートマネジメントのみならず、地域で活動するまちづくり団体などと連携して、別府の歴史や風土を身につけてもらうことが重要であるということで一致しました。

具体的な取組みとして、まちあるきへの参加を進めることや、平成20年で80周年を迎えた別府市中央公民館の記念事業を地域のまちづくり団体と共同で行なうこと等が決められました。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

文化ボランティアとは、文化的な事業に対して、自発的に運営に関わり、社会貢献を行う人であり、文化ボランティア・コーディネーターとは、文化的な事業の必要性を感じ、自らその事業の企画や運営などを計画し、社会と文化を繋ぐ人です。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

コミュニケーション能力の高さが必要です。文化的な知識やノウハウを持ちつつ、地域住民や企業、社会とのコミュニケーションをきちんととれなければ、根付かないため、文化的な活動が誰のために必要なのか、誰に伝えたいのか、常に自問自答し、社会に関わる様々な立場の人の思いや考えを汲みながら、活動する必要があります。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

2②で書いたように、疲弊した地域を再生するために、アートや文化の力が必要と考えられる現在、商店街の空き店舗を利用した文化的スペースなど、ハードを整備した。文化によって地域を再生するためには、ハードよりもソフトの充実がより重要であるため、生まれたスペースをよりよい形で活用する人材が必要とされています。(平成21年度中に約10名のコーディネーターが必要です。平成21年度も引き続き、文化ボランティア・コーディネーターの養成講座を行います。)

平成20年度の事業によって、様々な団体と協働して文化事業を行う実践を経験し、地域と文化を繋ぐ意義や難しさ、それぞれの課題があらわになりました。平成21年度は「別府現代芸術フェスティバル」の開催を通して、大規模文化イベントのボランティア、またはボランティア・リーダーを経験する事で、文化ボランティアに参加する市民が多くなると思われます。

このフェスティバルを通して、地域における文化の重要性を各人が実感し、今後も継続できるような仕組みや運営方法を発見できるような経験を積んでもらいたいです。また、引き続き platform の運営や、新たな文化事業を企画する等、広がりを見せたいです。

今回の事業のキーパーソン：坂本倫子（NPO法人BEPPU・PROJECT）

キーパーソンからの一言

文化ボランティア養成講座を通して、文化ボランティアの意義やコーディネーターの重要性を事務局と受講生が共有することができるプログラムづくりを考えました。大きな目的意識やビジョンを共有するための50人規模の講座と、実践にも対応しうる少人数の実習プログラムの2本柱で進めました。

また今までBEPPU・PROJECTの現場はまちの中にあり、特定のスペースや空間を所有していません。常に地域住民と対話をしながら、文化活動を行ってきており、平成20年から設けた platform（空き店舗をリノベーションし文化活動の拠点として活用している）を運営する際にも地域を重視しました。文化ボランティアの支援を続ける事は、まちの文化や歴史に奥行きを作り出し、様々な人が交わる事のできると思います。BEPPU PROJECTは今後も文化ボランティアの養成を続け、様々な発信し続けて行きたいと思います。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： 別府市中心市街地の空き店舗のリノベーションによって生まれる文化的スペース(ギャラリーやレジデンス施設含む)を運営(就労)するアート・マネージャー育成と、広くアートと地域をつなぐ架け橋となる文化ボランティア層の拡大を目指します。			
受講対象者	文化を軸にした地域再生を実現しようとする意志を持つ人。各講義・実習定員 40 名程度を予定		
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPに掲載。また当団体に登録しているボランティアや関連団体・アート NPO、個人に、Eメールなどで周知。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
地域社会におけるアートの可能性を探る	アートを媒体として地域に貢献できる事、協働できる事を考える。実例を交えた具体的なノウハウを学習し、自分たちの役割を考え今後の企画・運営に生かす。	経験豊かな様々なコーディネーターによる指導の下(講義含む)、養成講座受講者らが企画段階から参加する実習訓練を実施する。 【実習訓練 1】講座内容:地域における文化活動の意義 実習内容:2009 年春に開催される別府現代芸術フェスティバル開催事務局での広報活動に参画 【実習訓練 2】講座内容:文化団体における組織形成について 実習内容:2009 年春に開催される別府現代芸術フェスティバル開催事務局での組織運営マニュアル作成 【実習訓練 3】実習テーマ:従来の文化施設に頼らない企画展開について 実習内容:別府市中心市街地におけるイベント事業企画立案・運営	講座 x2 回(各 90 分)、実習合計 7 日間程度(28 時間程度) 【実習訓練 1】9 月(講座 90 分、実習 2 日間程度・実習時間合計 8 時間程度) 実習コーディネーター:芹沢高志(P3 art and environment エグゼクティブ・ディレクター) 【実習訓練 2】10 月(講座 90 分、実習 2 日間程度・実習時間合計 8 時間程度) 実習コーディネーター:宮本初音(ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局長) 【実習訓練 3】11 月(実習 3 日間程度・実習時間合計 12 時間程度) 実習コーディネーター:佐東範一(NPO 法人 Japan Contemporary Dance Network 理事長)、NPO 法人 BEPPU PROJECT
文化事業による地域資源の活用提案	地域が保有する建築資源や歴史的文化遺産を有効的に活用する手法を学ぶ。	講座テーマ:文化による地域資源の活用 実習(イベント開催):地域内外のコーディネーターの指導の下、養成講座受講者らが企画段階から参加し、実際に地域資源での文化イベント(ダンス・音楽・子ども WS・美術などの複合事業を想定)を開催する。 地域の特にアートに興味の無い方にも、イベントに参加してもらえる仕掛け作りを重視した企画立案であるかどうか重視する。 開催候補地:別府市中央公民館 (http://www.arch.oita-u.ac.jp/urban/beppu/barch09.htm)	講義:90 分程度 x1 回 8 月 講師:加藤種男(アサヒビール芸術文化財団 事務局長/横浜市芸術文化振興財団 専務理事) 予定 実習 x3 回(企画立案へ事業開催) 7 月末～8 月中旬(実習時間合計 12 時間程度) イベント開催:8 月末(4 日間程度) コーディネーター:NPO 法人 別府八湯トラスト、別府みらい塾(全て別府市内の NPO)、CAT(福岡県太宰府)、NPO 法人 BEPPU PROJECT

アーツ スペース運 営と、活 動内容の 企画立案	地方都市に おけるア ート空間 のための スペース・ マネジメント講座	国内の各地域でオルタナティブスペースやレジ デンススペースを運営し、積極的に地域でのア ート活動を展開している講師によるレクチャー の開催。 さらに、実習コーディネーター指導のもとに参加 者の企画したプログラム(短期的なイベントや WSなどを想定)をリノベーション空間で開催す る。	①講義 90分 x3回 7月、10月開催 講師:遠藤水城(ARCUS ディレクター、 NPO RHYTHM 代表)、立木祥一郎 (NPO 法人 Harappa 理事)、宮川敬一 (オルタナティブスペース・ギャラリー SOAP 代表) 予定 ②実習訓練 8、11月開催 コーディネーター:NPO 法人 BEPPU PROJECT 指導のもとに、実習訓練とし て企画実施。
--------------------------------------	--	--	---

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター： 別府市中心市街地の空き店舗のリノベーションによって生まれる文化的スペース(ギャラリーやレジデンス施設含む)を運営(就労)するアート・マネージャー育成と、広くアートと地域をつなぐ架け橋となる文化ボランティア層の拡大を目指します。				
受講対象者	文化を軸にした地域再生を実現しようとする意志を持つ人。各講義・実習定員 40 名程度を予定			
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPに掲載。また当団体に登録しているボランティアや関連団体・アート NPO、個人に、Eメールなどで周知。			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
地域社会におけるアートの可能性を探る	アートを媒体として地域に貢献できる事、協働できる事を考える。実例を交えた具体的なノウハウを学習し、自分たちの役割を考え今後の企画・運営に生かす。	経験豊かな様々なコーディネーターによる指導の下(講義含む)、養成講座受講者らが企画段階から参加する実習訓練を実施する。		
		【実習訓練 1】 講座内容: 地域における文化活動の意義	7 月 18 日 14 時～15 時 30 分 参加者: 43 名 1 回／講師: 芹沢高志(1951 年東京生まれ。神戸大学理学部数学科、横浜国立大学工学部建築学科を卒業後、(株)リジョナル・プランニング・チームで生態学的土地利用計画の研究に従事。その後、東京・四谷の禅寺、東長寺の新伽藍建設計画に参加したことをきっかけに、89 年に P3 art and environment (http://www.p3.org/) を開設。99 年までは東長寺境内地下の講堂をベースに、その後は場所を特定せずに、さまざまなアート、環境関係プロジェクトを展開する。)	告知期間が短かった。外国人の参加もあり、急遽英語通訳が必要になったが、専門性が高かったため、うまく通訳できなかった。
		【実習訓練 1】	12 月 12 日、13 日 17 時～19	学生の参加者が多かつ

	実習内容: platform の運営提案、指導	時 参加者: 9 名 14 日 10 時～12 時 30 分 9 名 3 回／講師: 芹沢高志	た。継続的に維持しなければならぬスペースなので、土地の人の参加が多ければよかった。
	【実習訓練 2】 講座内容: 文化団体 における組織形成について	8 月 27 日 17 時～18 時 30 分 参加者: 9 名 1 回／講師: 宮本 初音 (1962 年生まれ。1988 年九州大学卒。福岡市在住。 アートコーディネーター、インディペンデントキュレーター。 オハツ企画 代表 (アート・ベース 88 代表)。 ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局長。 1983 年頃より現代アートの作品制作と同時に自主企画展などの 展覧会企画や運営に関わり始める。1990 年代からはミュージアム・ シティ・プロジェクト (MCP) 企画を中心に、各種アートプロジェクト・ レクチャー・ワークショップ等の企画運営、コーディネート業務等。 2004-09 年、MCP として「ギャラリーアートリエ」(福岡市文化芸術振興財団) 企画運営に携わる (07-09 年はディレクター)。2008 年 10 月より 「別府現代芸術フェスティバル 2009 混浴温泉世界」副事務局長 (会期: 2009/4/11-6/14)。	実習の前に行っていたプログラムだった。
	【実習訓練 2】 実習内容: ダンス公演 の事前指導	12 月 4 日 10 時～17 時 30 分 参加者: 9 名 1 回／講師: 宮本 初音	文化ボランティアが自ら企画し運営するイベントに対して、イベント開催の心得や、ホスピタリティなど基本的なことを再度確認できた。
	【実習訓練 3】 実習テーマ: 従来の文化施設に頼らない 企画展開について	9 月 16 日 12 時～18 時 参加者: 9 名 11 月 13、14 日 17 時～19 時 参加者: 9 名	町の中でアートプロジェクトをする意義、また注意点などを重点的に教 わることができた。

		実習内容:別府市中心市街地におけるイベント事業企画立案・運営	15日 10時～12時 4回／講師:佐東範一(1980～1994年舞踏カンパニー「白虎社」にて舞踏手兼制作者として活動。'96年より1年間ニューヨークのDTWにてアーツマネジメント研修。1998年から3年間の準備期間を経て、2001年4月NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークとして活動開始。全国のアーティスト・主催者・評論家・財団などダンスに関わる個人・団体のネットワーク型NPOとして、ダンスと社会を結ぶ為の数多くの活動を行っている。)	
文化事業による地域資源の活用提案	地域が保有する建築資源や歴史的文化遺産を有効的に活用する手法を学ぶ。	講座テーマ:文化による地域資源の活用	8月21日 17時～18時30分 58名 1回／講師:加藤種男(1948年兵庫県生まれ。1990年にアサヒビールが企業文化部を創設に際し入社し、以後同社の社会貢献部門の推進役となる。98年 環境文化推進部エグゼクティブプロデューサー。2001年 環境社会貢献部副理事。2002年よりアサヒビール芸術文化財団事務局長。社団法人企業メセナ協議会研究部会長、日本NPO学会理事、内閣府NPO評価に関する調査委員会委員などを歴任。自身でもNPO法人アートネットワーク・ジャパン理事などを務める。著書に『社会とアートのえんむすび—つなぎ手たちの実践』(共著)『環境経営戦略事典』(共著)『文明と文化の視角—進化社会の文化経済学』(共著)ほか。芸術批評、音楽・美術プロジェクトのプロデュースも行う。)	受講者も多く、様々な立場の人が参加し、充実した講義だった。
		実習(イベント開催):地域内外のコーディネーター	8月22～30日	実習に対して、この事業として具体的なサポート

		ネーターの指導の下、養成講座受講者らが企画段階から参加し、実際に地域資源での文化イベント（ダンス・音楽・子どもWS・美術などの複合事業を想定）を開催する。 地域の特にアートに興味の無い方にも、イベントに参加してもらえる仕掛け作りを重視した企画立案であるかどうか重視する。 開催候補地：別府市中央公民館 (http://www.arch.oita-u.ac.jp/urban/beppu/barch09.htm)		ートができなかった。
アートのスペース運営と、活動内容の企画立案	地方都市におけるアートのスペース運営のためのスペース・マネジメント講座	国内の各地域でオルタナティブスペースやレジデンススペースを運営し、積極的に地域でのアート活動を展開している講師によるレクチャーの開催。 さらに、実習コーディネーター指導のもとに参加者の企画したプログラム（短期的なイベントやWSなどを想定）をリノベーション空間で開催する。	10月11日 15時～16時30分 参加者：9名 1回／講師：遠藤水城（キュレーター。ARCUS Project ディレクター。2001年より rhythm 名義で雑誌発行、ライブ、展覧会、映画上映会等を展開。2004年、「art space tetra」を福岡に設立。2005年、「Future Prospects Art Space」をマニラに設立。同年、国際的若手キュレーターに贈られる「Lorenzo Bonaldi Art Prize」受賞。「Singapore Biennale 2006」ネットワーク・キュレーター。2007年、Asian Cultural Council フェローで米国に滞在。同年、水戸市に「遊戯室」を設立。） 10月18日 16時～17時30分 参加者：57名 1回／講師：池	行政と協働事業を行った例に関しては、幅広い立場の人の集客ができたが、実務的な内容の講義には、学生の参加が多かった。

		田修(BankART1929 代表。PH スタジオ代表。1957 年大阪に生まれ。84 年 B ゼミスクール卒業後、都市に棲むことをテーマに美術と建築を横断するチーム PH スタジオを発足。86 年～91 年ヒルサイドギャラリー(東京代官山)ディレクター、97-2002 年ボッシュオートモーティブシステム付属ギャラリーZOOM 企画委員。96-2003 年Bゼミスクール講師。94-2001 年名古屋芸術大学美術学部非常勤講師。01 年から同大学院非常勤講師。04 年から BankART1929 の立ち上げと運営に携わる。) 11 月 1 日 10 時～11 時 30 分 参加者:11 名 1 回／講師:立木祥一郎(1962 年東京生まれ。東北大学文学部卒業。川崎市市民ミュージアム映像部門学芸員を経て、青森県立美術館開設に携わる。美術館建設基本計画、建築コンペ、設計を担当。奈良美智など現代美術、映像コレクションを手がける。2002 年、吉井酒造煉瓦倉庫での奈良美智とボランティアスタッフとともに展覧会を企画。以降、ここで2回の展覧会を実施。現在は八戸市によるカルチャーコンプレックスビル設計におけるソフト計画キュレーションを担当。)	
--	--	--	--

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター： 別府市中心市街地の空き店舗のリノベーションによって生まれる文化的スペース(ギャラリーやレジデンス施設含む)を運営(就労)するアート・マネージャー育成と、広くアートと地域をつなぐ架け橋となる文化ボランティア層の拡大を目指します。			
受講対象者	文化を軸にした地域再生を実現しようとする意志を持つ人。各講義・実習定員 40 名程度を予定		
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPに掲載。また当団体に登録しているボランティアや関連団体・アートNPO、個人に、Eメールなどで周知。別府市内の各企業に文化活動や社会貢献の一環として、案内する。		
課題	目的	問題点を踏まえた改善策(実施内容)	備考(時期・形式・回数)
地域社会におけるアートの可能性を探る	アートを媒体として地域に貢献できる事、協働できる事を考える。実例を交えた具体的なノウハウを学習し、自分たちの役割を考え今後の企画・運営に生かす。	(バイリンガル対応のスタッフも配置する。また育成する。) 経験豊かな様々なコーディネーターによる指導の下(講義含む)、養成講座受講者らが企画段階から参加する実習訓練を実施する。(バイリンガル対応のスタッフも配置する。また育成する。) 【実習訓練 1】 講座内容:地域における文化活動の意義 実習内容:2009 年春に開催される別府現代芸術フェスティバル開催事務局での広報活動に参画 【実習訓練 2】 講座内容:文化団体における組織形成について 実習内容:2009 年春に開催される別府現代芸術フェスティバル開催事務局での組織運営マニュアル作成 【実習訓練 3】 実習テーマ:従来の文化施設に頼らない企画展開について 実習内容:別府市中心市街地におけるイベント事業企画立案・運営	講座 x2 回(各 90 分)、実習合計 24 時間 【実習訓練 1】7 月下旬(講座 90 分)、12 月中旬(実習 3 日間・実習時間合計 6 時間) 実習コーディネーター: 芹沢高志 (P3 art and environment エグゼクティブ・ディレクター) 【実習訓練 2】7 月上旬(講座 90 分)8 月中旬(実習 2 日間程度・実習時間合計 8 時間程度) 実習コーディネーター: 宮本初音 (ミュージアム・シティ・プロジェクト事務局長) 【実習訓練 3】9 月、10 月、11 月(実習 3 日間程度・実習時間合計 12 時間程度) 実習コーディネーター: 佐東範一 (NPO 法人 Japan Contemporary Dance Network 理事長)、NPO 法人 BEPPU PROJECT
文化事業による地域資源の活用提案	地域が保有する建築資源や歴史的文化遺産を有効的に活用する手法を学	講座テーマ:文化による地域資源の活用 実習(イベント開催):地域内外のコーディネーターの指導の下、養成講座受講者らが企画段階から参加し、実際に地域資源での文化イベント(ダンス・音楽・子どもWS・美術などの複合事業を想定)を開催する。 地域の特にアートに興味の無い方にも、イベントに参加してもらえる仕掛け作りを重視した企画立案であるかどうか重視する。	講義:90 分程度 x1 回 8 月 講師:加藤種男(アサヒビール芸術文化財団 事務局長/横浜市芸術文化振興財団 専務理事) 実習 x3 回(企画立案～事業開催) 7 月末～8 月中旬(実習時間合計 12 時間程度)

	ぶ。	開催候補地：別府市中央公民館 (http://www.arch.oita-u.ac.jp/urban/beppu/barch09.htm)	イベント開催：8月末(4日間程度) コーディネーター：NPO 法人 別府八湯トラスト、別府みらい塾(全て別府市内のNPO)、CAT(福岡県太宰府)、NPO 法人 BEPPU PROJECT
アートのスペース運営と、活動内容の企画立案	地方都市におけるアートのスペース運営のためのスペース・マネジメント講座	(バイリンガル対応のスタッフも配置する。また育成する。)国内の各地域でオルタナティブスペースやレジデンススペースを運営し、積極的に地域でのアート活動を展開している講師によるレクチャーの開催。 さらに、実習コーディネーター指導のもとに参加者の企画したプログラム(短期的なイベントやWSなどを想定)をリノベーション空間で開催する。	①講義 90分 x3回 9月、10月、11月開催 講師：遠藤水城(ARCUS ディレクター、NPO RHYTHM 代表)、立木祥一郎(NPO 法人 Harappa 理事)、池田修(bankART1929 代表)、永井正之(別府市市役所、商工課課長) ②実習訓練 1月開催 コーディネーター：NPO 法人 BEPPU PROJECT 指導のもとに、実習訓練として企画実施。

団体名：ネイチャリング・プロジェクト
代表者：代表理事 松村 一芳
所在地：鹿児島県鹿児島市中央町24番地19
問合せ先：099-219-5739
E-Mail info@naturing.org



1① 団体紹介

持続的な地域コンソーシアムの実現を目指し、地域の課題解決を目指す社会起業家の方々などへ、起業家養成プログラムなどの人材養成事業やインキュベータ施設の運営などソーシャルビジネス、コミュニティビジネスの支援事業を行っています。

1② 養成講座実施（事務局）体制

- ・ 団体職員数：専任職員 6名、兼任職員 2名
- ・ 養成講座担当職員数：専任職員 1名、兼任職員 1名

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

文化ボランティアの特性を理解し、地域に貢献する文化ボランティアをマネジメントするための知識や、文化ボランティア・コーディネーターに必要な企画・発想能力、コーディネート力やコミュニケーション力といった実務的なスキルを習得することにより、文化ボランティアを推進できる人材です。

2② 上記2①のコーディネーターを必要とした背景

鹿児島県は少子高齢化に加えて、若い担い手世代の県外就職や移住が多く、経済的にも文化的にも過疎化が進む一方で、I・U・J ターンの移住希望者や観光客、鹿児島在住希望の外国人が多く存在する特徴もあります。県外や海外からの移住希望者は、鹿児島の土地に早くなじむために、地域文化を理解する為の機会や交流を求めています。しかし、地域の文化的な機会や交流の場を総合的にコーディネートできる人材が少なく、地域文化に触れる環境や様々な機会や交流等のニーズに応えることが難しいという現状があります。

その課題を解決する為に、文化ボランティアの特性を理解し、地域社会に貢献するようマネジメントする存在が必要であり、それが、文化ボランティア・コーディネーターであると考えます。

3① 養成されたコーディネーターの実際

目的どおりとなった点

文化ボランティアの特性を理解し、地域に貢献する文化ボランティアをマネジメントするための知識の習得・企画発想能力、コーディネート力、コミュニケーション力は講座を最後まで受講された方に関しては、概ね習得されたと考えます。

目的どおりにならなかった点

更にレベルアップするために、外部へ活動を発信する力のさらなる向上、目的達成の為のコミュニケーション力のアップが必要と考えます。

3② 実施した養成プログラムの問題点

文化活動を外部へアピールし、外部の協力者を得たりする際の外部交渉力、コミュニケーション力を強化するために、実践的なプログラムをさらに追加することが必要と考えました。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

次年度の実施プログラムの特に実習時の「アドバイザー」として新規受講生に対して助言、指導を行う役割を担っていただきます。

また、上記を担っていただく中で「プロフェッショナルコーディネーター」としてのキャリアを積んでいただく予定です。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

受講生には、NPO及び、起業準備をされている方やボランティア活動、個人事業をされている方など様々な方がいらっしゃいます。各自所属されているNPO、ボランティア、事業所が実施するイベント等において、コーディネーターとして、文化ボランティア推進のための企画や運営を行なう等の活躍が期待できます。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

受講者数：29名

4①の役割を期待できる者の数：9名

4②の役割を期待できる者の数：5名

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

6月23日（養成講座開始前）

8月26日（養成講座途中）

10月22日（養成講座途中）

1月19日（養成講座終了後） 計4回開催

検討会メンバー：

- ・島津 義秀 特定非営利活動法人 島津義弘公奉賛会 理事長
(鹿児島県の伝統文化伝承)
- ・新宅 和正 特定非営利活動法人 西郷隆盛公奉賛会 専務理事
(鹿児島県の伝統文化伝承)
- ・田代 哲郎 鹿児島県環境生活部生活・文化課 文化企画監
(文化政策)
- ・立元 昭子 財団法人 A F S 日本協会 鹿児島支部長
(交換留学生のサポート)
- ・カ石 久美 特定非営利活動法人 かがしま子ども芸術センター 代表理事
(子どもの芸術文化教育)
- ・原口 泉 国立大学法人 鹿児島大学 法文学部 教授
国立大学法人 鹿児島大学 生涯学習教育研究センター センター長
(歴史学・NHK ドラマ「篤姫」の監修役・時代考証)
- ・深見 聡 国立大学法人 長崎大学環境科学部 准教授
(地域コミュニティ論・観光まちづくり論・人文地理学・教育学)
- ・松村 一芳 特定非営利活動法人 ネイチャリング・プロジェクト 代表理事
(社会起業家養成・ソーシャルビジネス支援) ■委員長

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

養成講座①～⑥実施後開催の第2回検討委員会において、受講生への受講後アンケート結果から、受講生は、「地域活性化」に対して、問題意識が高い。しかし、受講生の興味等が、「内向き」の印象を感じられると意見があり、どう「外向き」にしていくか、思考の転換が必要との課題があがりました。そこで、次回以降の「ソーシャルリソースマネジメント」「コミュニケーション」講座に、「外部交渉」にかかる内容を追加し、反映させました。

養成講座⑦～⑫実施後開催の第3回検討委員会において、実習となる成果発表会において、「文化ボランティア」と「文化ボランティア・コーディネーター」の違いを再認識することが大事であり、いかに様々な地域のリソースをコーディネートできるかといった視点を強化する必要があると意見が出され、講座運営の中で、受講生に対して、講師や事務局がその点を受講生とともに意識するよう反映しました。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

文化ボランティア・コーディネーターは、活動の目的を常に明確に管理し、その目的達成のために、地域の文化や情報などの資源を活用し、調整、管理する役割が期待されると考えています。そういった人材がいることで、専門性を持たれた文化ボランティアの方々が力を発揮しやすい環境を創出できると考えています。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

コーディネーターには、企画立案力、ネットワーク形成力、調整力など様々な力が必要とされます。要求される様々なその能力の核となるのは、常に問題意識を持ち、自発的に考え、動くという「アントレプレナーシップ」であると考えています。アントレプレナーシップは、すべての人が元来持っている資質であり、それをいかに開花、発展させ、社会と繋がっていくかということが、課題でもあると考えます。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

鹿児島地域では、少子高齢化に加えて、若い担い手世代の県外就職や移住が多く、経済的にも文化的にも過疎化が進む一方で、I・U・J ターンの移住希望者や観光客、鹿児島在住希望の外国人が多く存在する特徴もあります。県外や海外からの移住希望者は、鹿児島の土地に早くなじむために、地域文化を理解する為の機会や交流を求めています。しかし、地域の文化的な機会や交流の場を総合的にコーディネートできる人材が少なく、地域文化に触れる環境や様々な機会や交流等のニーズに応えることが難しいという現状があります。そのような背景から、文化ボランティアの特性を理解し、地域に貢献する文化ボランティアをマネジメントするための知識や、企画・発想能力、コーディネート力やコミュニケーション力といった実務的なスキルを習得することにより、文化ボランティアを推進する役割を担うコーディネーターが必要とされており、これからそのような活動を発展させていくために、今年度作成した養成プログラムをベースに、毎年見直しを行い、毎年20名程度の文化ボランティア・コーディネーターを養成する。また、養成したコーディネーターは、次年度の実施プログラムの特に実習時の「アドバイザー」として新規受講生に対して助言、指導を行う役割を担っていただき、その中で「プロフェッショナルコーディネーター」としてのキャリアを積んでいただく予定です。また、受講生には、NPO及び、起業準備をされている方やボランティア活動、個人事業をされている方など様々な方がいらっしゃいます。各自所属されているNPO、ボランティア、事業所が実施するイベント等において、コーディネーターとして、文化ボランティア推進のための企画や運営を行なう等の活躍が期待できます。

今回の事業のキーパーソン：

原口 泉 氏

国立大学法人 鹿児島大学法文学部 教授

国立大学法人 鹿児島大学生涯学習教育研究センター センター長

ちょうど、平成20年が、NHK大河ドラマ「篤姫」の放映時期でもあり、その時代考証をされた原口先生は、まさに旬で貴重な存在でいらっしゃいました。歴史文化の文化的手法を通して、鹿児島の地域活性化に尽力されることを、ミッションとして活躍されており、文化ボランティア・コーディネーターに必要とされることは、まず「ミッション」であると、講義を頂き、プログラム検討委員としても関わっていただきました。「ミッション」をもった文化的活動のコーディネートをされている原口先生の活動そのものが、受講生への活動意欲の向上に繋がりました。

キーパーソンからの一言：

文化活動に、志をもって取り組み、地域活性化の担い手として活躍する方々を支える文化ボランティア・コーディネーターという人材は、今後更に活躍が期待されるものと考えます。その人材の養成は社会からの要請であると考えます。各地の特色を活かし、全国にそのような養成機関が創出されることを期待します。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター： 文化ボランティアの特性を理解し、地域社会に貢献する文化ボランティアをマネジメントするための知識や、文化ボランティア・コーディネーターに必要な企画・発想能力、コーディネート力やコミュニケーション力といった実務的なスキルを習得することにより、文化ボランティアを推進する人材を育成する。			
受講対象者	文化ボランティア活動を1年以上継続的にこなしている者		
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPに掲載し、また鹿児島県内のボランティア団体・NPO に対し、Eメール・郵送等で周知する。また無料配布のイベントカレンダー等に掲載依頼し、広く募集を行なう。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1. 文化ボランティア・コーディネートの基礎的知識の注入	文化ボランティアの求められているものを的確に知り、コーディネーターとしての基礎的な知識を身に付ける	①鹿児島文化ボランティア概論鹿児島の郷土文化に関する取り組みや文化ボランティアの現状についての講演。 ②文化ボランティア・コーディネーション概論・・・文化ボランティアの求められる社会的役割。郷土文化・資源を利用したコーディネーションの在り方や地域活性化との関連についての講義。	講義2時間×2回 7月開催
2. マネジメント能力の開発	ボランティアにかかるマネジメント能力や必要なスキルを身につける	以下の講義、実習からスキルアップを図る。 ①アントレプレナーシップ(ワーク) コーディネーションに必要な資質を個別にはかる ②マネジメント(講義) コーディネーションに必要なマネジメント法を学ぶ ③コミュニケーション(ワーク) 聴き取りについて学び、マッチングや協働のための調整法を学ぶ ④リソース(ワーク) 文化的資源や人材等をいかに協働・活用させ地域活性化へ導くか、そのプロセスについて学ぶ	講義(グループワーク)2時間×7回 8月・9月開催
3. 行政との連携	文化ボランティア施策に精通し、行政との協働に必要なスキルを身につける	①県や市の文化担当課から講師を招き、国・県の文化施策や課題、助成メニュー、申請方法について講義を受ける。 ②行政と連携し、活動を行なっている NPO 団体の実践事例や課題等について講義を受ける。	講義2時間×2回 9月開催
4. 受入先とのマッチング	文化ボランティアと受入先との調整能力を身につける	①学校や行政と連携し、子供から大人まで広く鹿児島の文化・芸術の発展のため活動を行なう NPO の実践事例中心の講義を受ける。 ②ボランティア希望者とそのニーズに合った受入先の選定、調整といった流れやノウハウを、コーディネーターの補助を行いながら学ぶ。	講義2時間×2回 10月開催 実習×2回 10月～11月実施

5. 活動内容 の企画立案	自立的に活動を 企画立案・実施で きる能力を開発す る。	①コーディネーターの指導の下、養成講座受講者が企 画段階から携わり、外国人（在鹿外国人）や観光客に向 けた鹿児島島の郷土文化イベントを行なう。	実習×3回 11月～翌年1月 イベント開催 1月
------------------	---------------------------------------	---	-----------------------------------

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター： 文化ボランティアの特性を理解し、地域社会に貢献する文化ボランティアをマネジメントするための知識や、文化ボランティア・コーディネーターに必要な企画・発想能力、コーディネート力やコミュニケーション力といった実務的なスキルを習得することにより、文化ボランティアを推進する人材を育成する。				
受講対象者	文化活動・ボランティア活動・コーディネーター業務に興味のある方。 地域貢献・地域活性化の担い手として活躍されたい方。			
受講者の募集方法	開催案内を当団体のHPに掲載し、また鹿児島県内のボランティア団体・NPO に対し、Eメール・郵送等で周知する。また無料配布のイベントカレンダー等に掲載依頼し、広く募集を行なう。			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
1. 文化ボランティア・コーディネーターの基礎的知識	文化ボランティアの求められているものの確に知り、コーディネーターとしての基礎的な知識を身に付ける	①鹿児島文化概論・・・鹿児島の郷土文化に関する取り組みや文化ボランティアの現状についての講演講義。 ②文化ボランティア・コーディネーション概論・・・文化ボランティアの求められる社会的役割。郷土文化・資源を利用したコーディネーションの在り方や地域活性化との関連についての講義。	①7月22日 講義2時間×1回 原口 泉 氏 (国立大学法人 鹿児島大学 法文学部教授) 専門分野: 日本近世近代史、日本社会史 ②7月22日 講義2時間×1回 奥村 高明 氏 (国立教育政策研究所 教育課程センター 研究開発部 教育課程調査官) 専門分野: 美術教育、文化ボランティア・コーディネーション	特になし
2. マネジメント能力の開発	ボランティアにかかるマネジメント能力や必要なスキルを身につける	以下の講義、実習からスキルアップを図る。 ①アントレプレナーシップ(ワーク) コーディネーションに必要な資質を個別にはかる ②マネジメント(講義) コーディネーションに必要なマネジメント法を学ぶ ③コミュニケーション(ワーク) 聴き取りについて学	①7月29日 8月5日 ワーク2時間×2回 松村一芳 氏 (ネイチャリング・プロジェクト 代表理事) 専門分野: 社会起業家の育成支援、ソーシャルビジネスのコンサルティング ②8月19日 講義2時間×1回 松村一芳 氏 (ネイチャリング・プロジェクト 代表理事) 専門分野: 社会起業家の育成支援、ソーシャルビジネスのコンサルティング	コーディネーターに必要なとされる能力と現在の自身との差を認識した上で、やる気を維持しつつ、スキルアップの必要性を感じてもらうことが課題。

		び、マッチングや協働のための調整法を学ぶ ④リソース(ワーク) 文化的資源や人材等をいかに協働・活用させ地域活性化へ導くか、そのプロセスについて学ぶ	グ ③9月16日 9月22日 10月7日 ワーク2時間×3回 立元昭子氏 (A-cube 株式会社 代表取締役社長) 専門分野:IT コンサルタント、キャリアコンサルタント、生涯学習開発財団認定プロフェッショナルコーチ ④9月9日 講義2時間×1回 松村一芳氏 (ネイチャリング・プロジェクト 代表理事) 専門分野:社会起業家の育成支援、ソーシャルビジネスのコンサルティング	
3. 行政との連携	文化ボランティア施策に精通し、行政との協働に必要なスキルを身につける	①県や市の文化担当課から講師を招き、国・県の文化施策や課題、助成メニュー、申請方法について講義を受ける。 ②行政と連携し、活動を行なっているNPO団体の実践事例や課題等について講義を受ける。	①8月26日 講義2時間×1回 田代 哲郎氏 (鹿児島県環境生活部 生活・文化課 文化振興企画監) 専門分野:鹿児島県の行政・文化政策 ②9月30日 講義2時間×1回 北川慶子氏 (国立大学法人 佐賀大学 文化教育学部 教授) 専門分野:社会福祉学、高齢者福祉、地域福祉、児童福祉	様々な文化政策を知識として習得することと、それを自身の活動の中で活かすことをイメージすることが課題。
4. 受入先とのマッチング	文化ボランティアと受入先との調整能力を身につける	①学校や行政と連携し、子供から大人まで広く鹿児島の文化・芸術の発展のため活動を行なうNPOの実践事例中心の講義を受ける。 ②ボランティア希望者とそのニーズに合った	①10月28日 11月7日 講義2時間×2回 浜田 順子氏 (MBC タレント)専門分野:鹿児島弁による歴史・風俗を再現したドラマ「かごしま今昔」に18年近く出演。 深見 聡氏 (国立大学法人 長崎大学 環境科学部 准教授)専門分野:観光地理学、地域づくり論、NPO論	特になし

		受入先の選定、調整といった流れやノウハウを、コーディネーターの補助を行いながら学ぶ。	②10月14日 11月11日 ワーク 2時間×2回 家村 順太 氏 (ネイチャリング・プロジェクト 事務局)専門分野:コーディネート事務	
5. 活動内容の企画立案	自立的に活動を企画立案・実施できる能力を開発する。	①コーディネーターの指導の下、養成講座受講者が企画段階から携わり、外国人(在鹿外国人)や観光客に向けた鹿児島島の郷土文化イベントを行なう。	①11月25日 12月9日 1月6日 実習2時間×3回 イベント2時間×1回 成松賢陽 氏 (ネイチャリング・プロジェクト 事務局)専門分野:コーディネート事務	受講生それぞれのイベント運営経験の有無を考慮しての講座展開が必要

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター : 文化ボランティアの特性を理解し、地域社会に貢献する文化ボランティアをマネジメントするための知識や、文化ボランティア・コーディネーターに必要な企画・発想能力、コーディネート力やコミュニケーション力といった実務的なスキルを習得することにより、文化ボランティア活動の推進を図る人材を育成する。			
受講条件 (受講対象者)	文化活動・ボランティア活動・コーディネーター業務に興味のある方。 地域貢献・地域活性化の担い手として活躍されたい方。		
受講者の募集方法	開催案内を法人のHPに掲載し、また鹿児島県内の文化ボランティア団体・NPO 法人等に対し、Eメール・郵送等で周知する。また地域の新聞等への掲載協力、公共施設等へのチラシ等の設置協力をを行い、広く募集する。		
課題	目的	問題点を踏まえた改善策(実施内容)	備考(時期・形式・回数)
1. 文化ボランティア・コーディネーターの基礎的知識	文化ボランティアの求められているものを的確に知り、コーディネーターとしての基礎的な知識を身に付ける	①鹿児島文化概論・・・鹿児島の郷土文化に関する取り組みや文化ボランティアの現状についての講演講義。 ②文化ボランティア・コーディネーション概論・・・文化ボランティアの求められる社会的役割。郷土文化・資源を利用したコーディネーションの在り方や地域活性化との関連についての講義。	講義2時間×2回 7月開催
2. マネジメント能力の開発	ボランティア人材の効果的な活用配置と管理に必要な思考トレーニングと手法を用いたマネジメント能力や必要なスキルを	以下の講義、実習からスキルアップを図る。 ①アントレプレナーシップ(ワーク) コーディネーションに必要な資質を個別にはかる ②ソーシャルマネジメント(講義) コーディネーションに必要なマネジメント法を学ぶ ③コミュニケーション(ワーク) 聴き取りについて学び、マッチングや協働のための調整法を学ぶ ④外部交渉のためのコーチング 行政・協力企業・団体等、個々のリソースへの外部交渉術を学ぶ ⑤ソーシャルリソースマネジメント(ワーク) 文化的資源や人材等をいかに協働・活用させ地域活性化へ導くか、そのプロセスについて学ぶ	講義(グループワーク) 2時間×10回 8月・9月開催
3. 行政との連携	文化ボランティア施策に精通し、行政との協働に必要なスキルを身につける	①県や市の文化担当課から講師を招き、国・県の文化施策や課題、助成メニュー、申請方法について講義を受ける。 ②行政と連携し、活動を行っている NPO 団体の実践事例やまた課題等について講義を受ける。	講義2時間×2回 9月開催
4. 受入	文化ボランティアと受	①学校や行政と連携し、子供から大人まで広く鹿	講義2時間×2回

先とのマ ッチング	入先との調整能力を 身につける	児島の文化・芸術の発展のため活動を行なう NPO の実践事例中心の講義を受ける。 ②ボランティア希望者とそのニーズに合った受入 先の選定、調整といった流れやノウハウを、コー ディネーターの補助を行ないながら学ぶ。	10月開催 実習×2回 10月～11月実施
5. 実践 的な活動 プログラ ムの実施	自立的に活動を企画 立案・実施できる能力 を開発する。	①プレイベントを開催して、個々のリソースの開 拓のためのボランティア人材、機関、団体への交 渉と、協力先からのフィードバック等の実践型プ ログラムを体感し、成果発表に向けた能力開発と 外部交渉を学ぶ	実習×3回 11月～12月 プレイベント開催 12月
6. 活動 内容の企 画立案	自立的に活動を企画 立案し、能力を活かし たイベントの質の向上 を図る	①アドバイザー(前年度受講生)の指導の下、養 成講座新規受講者が企画段階から携わり、鹿児 島在住の方(在鹿外国人)や観光客に向けた鹿 児島の文化イベントを行なう。	実習×3回 11月～翌年1月 イベント開催 1月

団 体 名 : 特定非営利活動法人
沖縄県立現代美術館支援課井 h a p p
代 表 者 : 理事長 久保田照子
所 在 地 : 沖縄県那覇市おもろまち3丁目1-1
沖縄県立博物館・美術館内
問合せ先 : 098-869-0633



1① 団体紹介

NPO法人h a p p（はっぷ）は、沖縄県立美術館の活動をサポートする組織（支援会）として、平成17年4月に結成され、同年8月にNPO法人として認可を受けました。

人間性の根幹に深くかかわる文化芸術活動によって、これらが県民の情操を豊かにし社会の健全な発展を支える。

わたしたちは、沖縄の社会状況を反映する芸術文化をサポートすることによって、当団体を人間の根本的な感性を呼び覚ます人間復興の最前線の間。また、現代を見つめ、未来への展望を切り開く場として機能させることを目指しております。

1② 養成講座実施（事務局）体制

- | | | | |
|--------------------|-----|------|-----|
| ・ 団 体 職 員 数 : 専任職員 | 1 名 | 兼任職員 | 1 名 |
| ・ 養成講座担当職員数 : 専任職員 | 0 名 | 兼任職員 | 2 名 |

2① 養成しようとした文化ボランティア・コーディネーター像

対話型展示解説をその個性を最大に生かしながら実施するボランティアと、その意欲を支える先進的な自己研修プログラムの構築を推進し、自ら同じ目線で行動するボランティア・コーディネーターの養成を目指します。

3① 養成されたコーディネーターの実際

ボランティアを、無償の労働力、ノウハウ等の提供だと考えたと、そこにボランティアをまとめ指示をだすボランティア・リーダー的な役割をもつボランティア・コーディネーターが必要です。それが当初、目標としたコーディネーター像でしたが、事業をすすめる中で、ボランティアひとりひとりがコーディネーターであるべきだという考えに至りました。

3② 実施した養成プログラムの問題点

当初はボランティアのリーダーとしての資質やスキルを向上させるためのカリキュラムを重点に講座中心のプログラムでしたが、参加者個々の主体的な活動を重視したプログラムの企画、実践に重点をシフトしました。

4① 団体としての養成プログラム受講者の今後の活用のあり方

今年度は、受講者と沖縄県立博物館・美術館との関係は、教育普及活動への協力が主たるものであった。来年度は、この育成プログラムを受講した者が、自身で企画した事業を、美術館と協力し、支援会事業として実施したいです。

また、今年度から実施している「h a p p アートサロン」などは引き続き、企画、実施したいです。

4② その他、養成プログラム受講者が今後活躍を期待できる場、役割（働き）

展示解説ボランティアのリーダーとして、ボランティアを管理し、育成講座を実施するなど美術館の教育普及活動に協力します。

また、独自事業の計画・立案を行い、実施します。

4③ 受講者のうち4①及び4②の役割を期待できる者の数

- ・ 受講者数： 10名
- ・ 4①の役割を期待できる者の数： 5名
- ・ 4②の役割を期待できる者の数： 5名

5① プログラム開発検討会の実施状況

実施時期：

10月8日（養成講座途中）計1回開催

検討会メンバー：

- ・ 奥村高明【文部科学省 調査官（美術教育）】
- ・ 一條彰子【東京国立近代美術館 主任学芸員（美術館教育普及）】
- ・ 西村貞男【沖縄県造形教育連盟会長・琉球大学名誉教授（美術教育）】
- ・ 花城郁子【NPO法人琉・動・体 代表（ボランティア育成）】
- ・ 前田比呂也【沖縄県立博物館・美術館 美術館主任学芸員（美術館教育普及）】

5② プログラム開発検討会意見の養成プログラムへの反映状況

もっと実践者養成寄りの内容にというご意見に従って、三期からの実践プログラムを強化し、当初の計画より多く企画実施を行い、さらに事業として成立させる内容にしました。

6① 文化ボランティアと文化ボランティア・コーディネーターの違いをどのように認識していますか？

ボランティア・コーディネーター育成事業を通して、文化ボランティアの在り方そのものを考えるにいたった。沖縄県立博物館・美術館で望まれている文化ボランティア像とは、一人ひとりがボランティア・コーディネーターとして、主体的、自主的に活動するものではないでしょうか。

したがって、ボランティアとボランティア・コーディネーターの違いはなく、ボランティアすべてがボランティア・コーディネーターを目指すべきと考えます。

6② 文化ボランティア・コーディネーターに必要な資質をどのように認識していますか？

沖縄県立美術館の対話型展示解説ボランティア・コーディネーターに必要な資質とは、組織を動かすリーダーシップやマネジメント能力やノウハウを活かせることなく、個々が持っているコミュニティを活かしつつ、自由に自発的に企画・立案・実行をできる人材です。

7 来年度以降の文化ボランティア・コーディネーター養成・活用計画

沖縄県立美術館は公立最後発で開館間もないこともあり、対話式展示解説で来館者と美術館を繋ぐ役割を担うボランティアを早急に育成する必要があった。この講座実施の経験を通してボランティア、およびボランティア・コーディネーターに対する認識が深まった当法人としては、かえって多様なボランティア・コーディネーターが生まれる可能性が広がりました。

今後は、ボランティアがボランティア・コーディネーター的活動をできるような環境整備をしていきます。

美術サロン事業、親子 de 美術鑑賞、きもの de 美術館など、当講座で生まれスタートした事業を多様なボランティア・コーディネーターの活躍の場として継続していきたいです。

今回の事業のキーパーソン：

前田比呂也（沖縄県立博物館・美術館 主任学芸員（美術館教育普及）

キーパーソンからの一言

h a p p の計画を美術館の活動と関連付けます。

文化施設の運営に文化ボランティア及びボランティア・コーディネーターの参画は不可欠です。連携して実践を積み重ねるとともに、その経験を互いに共有し、明日への勇気としてほしいです。

1 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(当初案)

養成するコーディネーター: 美術館におけるボランティアによる「対話式」展示解説を推進する、コーディネーター			
受講対象者	美術館における「対話式」ボランティア展示解説に興味のある美術館職員、ボランティア等		
受講者の募集方法	募集チラシを作成し、県内の美術館等文化施設や関係団体に配布すると同時に、当団体のホームページで広く呼びかける。また、マスコミ等も活用し周知を図る。		
課題	目的	対応策(事業実施内容)	備考(時期・形式・回数)
展示解説ボランティアを運営するためのノウハウがない	展示解説ボランティアの運営全般に関する業務のスキルアップを図る	(1)展示解説ボランティアの募集、登録等の業務に関する先進事例の講習を通して学ぶ。 (3)ボランティア解説のプログラムの種類や内容、その作成手順等の業務に関する先進事例の講習を通して学ぶ。	第1期研修 (全7回)主に講習会を受講7月16日～8月27日(毎週水曜日)18:30～20:00
展示解説ボランティアを育成するためのノウハウがない	展示解説ボランティアの育成業務に関するスキルアップを図る	(1)ボランティア育成講座の企画・運営、カリキュラムの編成方法等を講習と実習を通して学ぶ。 (2)講座資料の作成方法や視聴覚機器の取扱等を講習と実習を通して学ぶ。 (3)講師依頼の心得や、受付、案内表示の作成等を講習と実習を通して学ぶ。	第2期研修 (全8回)講習及び実習による研修9月3日～10月22日(毎週水曜日)18:30～20:00
ボランティアの展示解説を実際におこなうためのノウハウがない	ボランティア展示解説の実施業務に関するスキルアップを図る	(1)展示解説ボランティアのシフト編成、事前連絡、調整等の業務を主に実際の実施を通して学ぶ。 (2)案内表示や館内放送等、告知や集客方法を主に実際の実施を通して学ぶ。 (3)解説を実施しているボランティアの援助や、観客の誘導、監視員への連絡等、展示解説のスムーズな運営方法を主に実際の実施を通して学ぶ。 (4)ボランティアの解説内容、観客の反応などを記録し、情報を共有する自学システムの開発・構築に関する業務を学ぶ。	第3期研修 (全16回)主に実際の実施による研修11月5日～2月25日(毎週水曜日)18:30～20:00

2 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(実施報告)

養成するコーディネーター: 美術館におけるボランティアによる「対話式」展示解説を推進する、コーディネーター				
受講対象者	美術館における「対話式」ボランティア展示解説に興味のある美術館職員、ボランティア等			
受講者の募集方法	募集チラシを作成し、県内の美術館等文化施設や関係団体に配布すると同時に、当団体のホームページで広く呼びかける。また、マスコミ等も活用し周知を図る。			
課題	目的	対応策(事業実施内容)	実施日時・形式・回数	対応策(事業実施内容)の問題点
美術館ボランティア活動について受講者間に認識・理解に隔たりがある。	美術館のボランティア活動全般について学ぶ	美術館でのボランティア活動全般について学び、文化ボランティアの役割についての理解を深めるための講座を実施した。1. ボランティア活動の種類を学ぶ2. 展示解説ボランティアについて学ぶ3. 美術鑑賞の意義について学ぶ4. ワークショップとアウトリーチ活動について学ぶ5. 展示解説ボランティアについて学ぶ6. 美術鑑賞のマナーについて学ぶ	第1期研修(全6回)主に講習会を受講7月16日～2009/8/27(毎週水曜日)18:30～20:00	美術館でのボランティア活動全般について学び、文化ボランティアの役割についての理解を深めるための講座を実施した。 1. ボランティア活動の種類を学ぶ 講座名:「オリエンテーション」 2. 展示解説ボランティアについて学ぶ 講座名:「美術館における展示解説ボランティアとは」 3. 美術鑑賞の意義について学ぶ 講座名:「絵を見ることと知識を得ることの違いについて」 4. ワークショップとアウトリーチ活動について学ぶ 講座名:「館を捨てて街に出よう①」 5. 展示解説ボランティアについて学ぶ 講座名:「自学システム『アキアム』の活用について」 6. 美術鑑賞のマナーについて学ぶ 講座名:「美術品保存の現場から」
「ボランティア」と「ボランティア・コーディネーター」の違いについて役割の違いが分らない	美術館ボランティア活動を円滑にするためにボランティア・コーディネーターの役割について学ぶ	ボランティアとボランティア・コーディネーターの違いについて考えるための講座を実施した。1. ボランティア・コーディネーターとは2. 沖縄県立美術館の事例を学ぶ	第2期研修(全5回)講習・実習による研修9月3日～2009/10/1(毎週水曜日)18:30～20:00	ボランティアとボランティア・コーディネーターの違いについて考えるための講座を実施した。 1. ボランティア・コーディネーターとは講座名:「ボランティア・コーディネーター基礎知識①」 講座名:「ボランティア・コーディネーター基礎知識②」 講座名:「ボランティア・コーディネーター基礎知識③」 2. 沖縄県立美術館の事例を学ぶ講座名:「館を捨てて街に出よう②」 講座名:「出前美術館出品作品紹介」

他の施設やボランティア団体の様子が知りたい	先進事例を学ぶ	※美術館ボランティアの先進事例の研修(他美術館での実践事例の紹介)	第3期研修 (全7回)講習・実習による研修 10月8日～ 2009/12/3 (毎水曜日) 18:30～ 20:00	※美術館ボランティアの先進事例の研修 (他美術館での実践事例の紹介)講座名: 「町田市国際版画美術館のボランティア活動」講座名: 「南洋群島展におけるボランティアの役割」講座名: 「国立劇場おきなわでのボランティア活動」講座名: 「大田区立龍子記念館のボランティア活動」講座名: 「丸木美術館でのボランティア活動」講座名: 「佐喜真美術館でのボランティア活動」講座名: 「高知県立美術館でのボランティア活動」
ボランティア・コーディネーターは、実際の企画・立案・事業の実施を通して学ぶことが多いのではないか	実際の企画・立案・事業の実施等を通してボランティア・コーディネーターとしての資質を向上させる	※色々な企画を実践する事でボランティアについての理解を深める。 1.「赤ちゃんプロジェクト」2.「ハップ・アート・サロン」①「西洋絵画にみるクリスマス・ストーリー」実施 ②「着物 de 美術館」実施	第4期研修 (全11回)主に実際の実施による研修 12月10日～2月11日(毎週水曜日)18:30～20:00	※色々な企画を実践する事でボランティアについての理解を深める。 1.「赤ちゃんプロジェクト」2.「ハップ・アート・サロン」①「西洋絵画にみるクリスマス・ストーリー」実施 ②「着物 de 美術館」実施

3 文化ボランティア・コーディネーター養成プログラム(案)(実施後改善版)

養成するコーディネーター: 美術館におけるボランティアによる「対話式」展示解説を推進する、コーディネーター			
受講条件	美術館における「対話式」ボランティア展示解説に興味のある美術館職員、ボランティア等		
受講者の募集方法	募集チラシを作成し、県内の美術館等文化施設や関係団体に配布すると同時に、当団体のホームページで広く呼びかける。また、マスコミ等も活用し周知を図る。		
課題	目的	問題点を踏まえた改善策(実施内容)	備考(時期・形式・回数)
美術館ボランティア活動について 受講者間に認識・理解に隔たりがある。	美術館のボランティア活動全般について学ぶ	美術館でのボランティア活動全般について学び、文化ボランティアの役割についての理解を深めるための講座を実施した。 1. ボランティア活動の種類を学ぶ 講座名:「オリエンテーション」 2. 展示解説ボランティアについて学ぶ 講座名:「美術館における展示解説ボランティアとは」 3. 美術鑑賞の意義について学ぶ 講座名:「絵を見ることと知識を得ることの違いについて」 4. ワークショップとアウトリーチ活動について学ぶ 講座名:「館を捨てて街に出よう①」 5. 展示解説ボランティアについて学ぶ 講座名:「自学システム『アキアム』の活用について」 6. 美術鑑賞のマナーについて学ぶ 講座名:「美術品保存の現場から」	第1期研修 (全6回) 主に講習会を受講 7月16日～8月27日 (毎週水曜日) 18:30～20:00
「ボランティア」と「ボランティア・コーディネーター」の違いについて役割の違いが分からない	美術館ボランティア活動を円滑にするためにボランティア・コーディネーターの役割について学ぶ	ボランティアとボランティア・コーディネーターの違いについて考えるための講座を実施した。 1. ボランティア・コーディネーターとは 講座名:「ボランティア・コーディネーター基礎知識①」 講座名:「ボランティア・コーディネーター基礎知識②」 講座名:「ボランティア・コーディネーター基礎知識③」 2. 沖縄県立美術館の事例を学ぶ 講座名:「館を捨てて街に出よう②」 講座名:「出前美術館出品作品紹介」	第2期研修 (全5回) 講習・実習による研修 9月3日～10月1日 (毎週水曜日) 18:30～20:00
他の施設やボランティア団体の様子が知りたい	先進事例を学ぶ	※美術館ボランティアの先進事例の研修(他美術館での実践事例の紹介) 「町田市国際版画美術館のボランティア活動」 「南洋群島展におけるボランティアの役割」 「国立劇場おきなわでのボランティア活動」	第3期研修 (全7回) 講習・実習による研修 10月8日～12月3日 (毎週水曜日)

		「大田区立龍子記念館のボランティア活動」 「丸木美術館でのボランティア活動」 「佐喜眞美術館でのボランティア活動」 「高知県立美術館でのボランティア活動」	18:30～20:00
ボランティア・コーディネーターは、実際の企画・立案・事業の実施を通して学ぶことが多いのではないかな	実際の企画・立案・事業の実施等を通してボランティア・コーディネーターとしての資質を向上させる	※色々な企画を実践する事でボランティアについての理解を深める。 1.「赤ちゃんプロジェクト」 2.「ハップ・アート・サロン」 ①「西洋絵画にみるクリスマス・ストーリー」実施 ②「着物 de 美術館」実施	第4期研修 (全11回) 主に実際の実施による研修 12月10日～2月11日 (毎週水曜日) 18:30～20:00

文化ボランティア支援拠点形成事業 成果報告書

平成20年度 委託事業

